

0048251-000

特230-493

ウタノホン

文部省・書

日本書籍

上

昭和17

AHI

ウタノホン

上

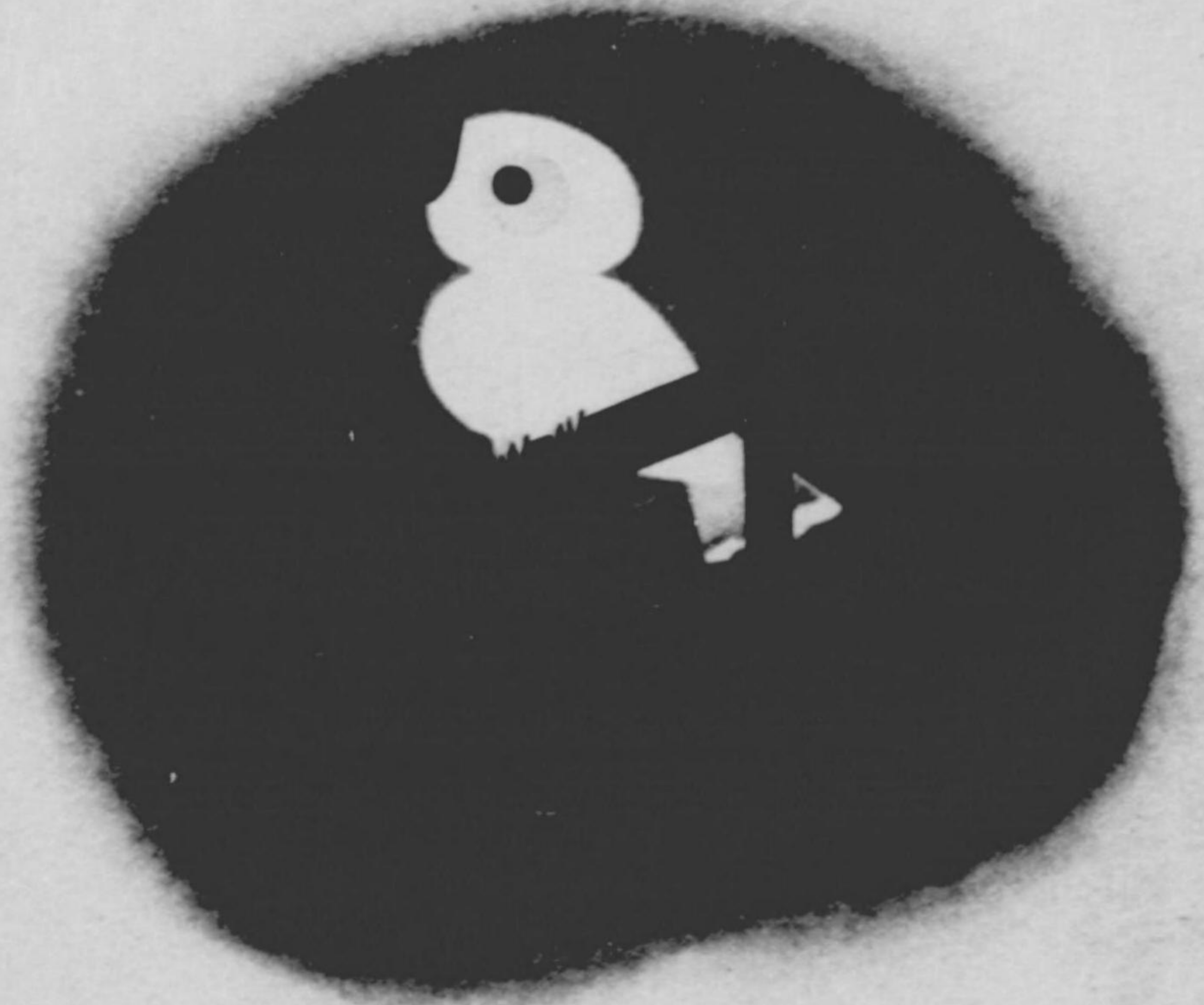
教師用



文部省

ウタノホン

上
教師用



文 部 省

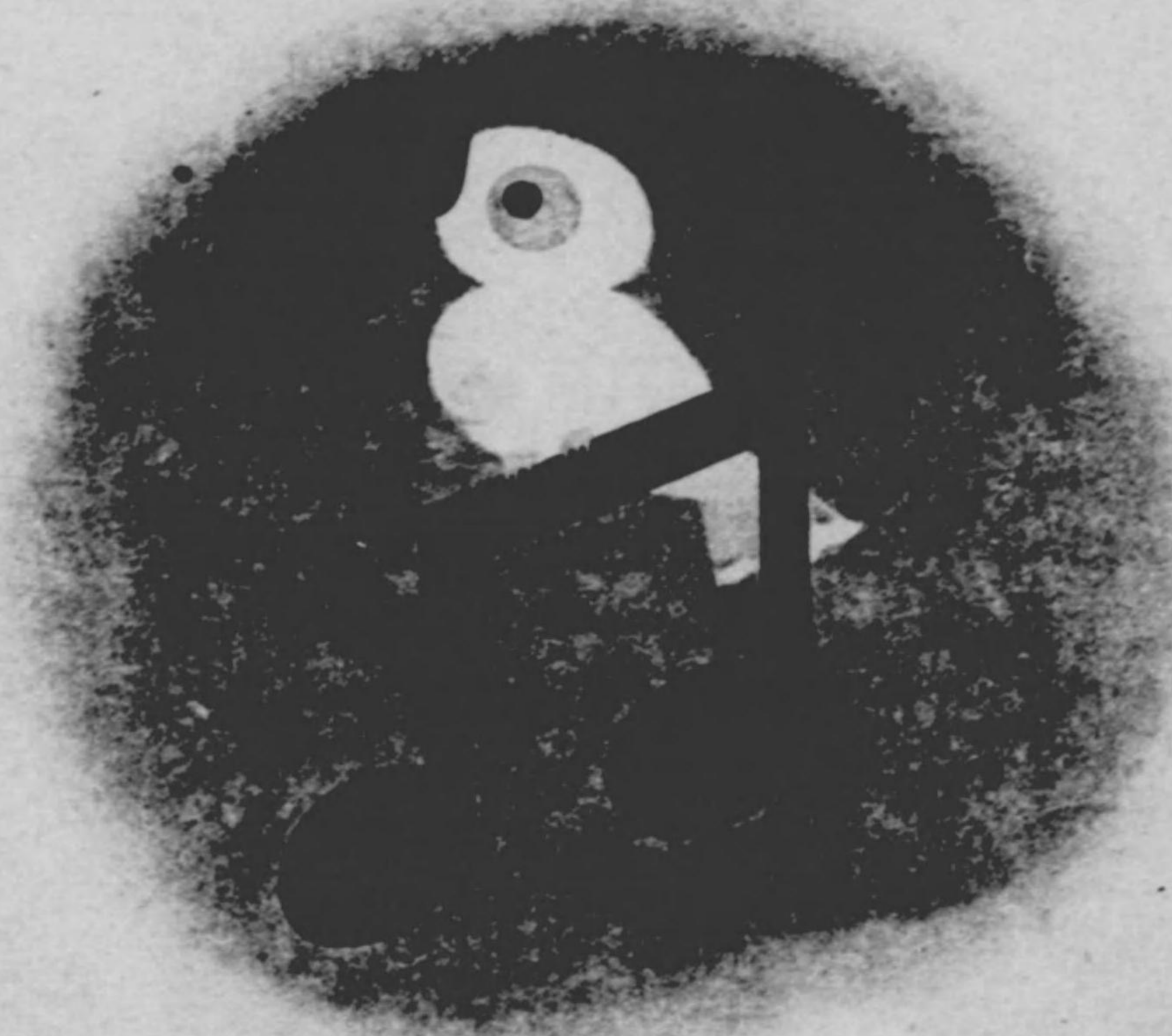
430

80

特 230
493

ウタノホン

上
教師用



文 部 省



目 次

第一 藝能科指導の精神	1
第二 藝能科音楽指導の精神	8
(一) 音楽教育の變遷	8
(二) 音楽教育の目的	10
(三) 国民学校音楽教育の確立	11
(四) 儀式唱歌の重視	12
第三 藝能科音楽教育の系統	13
(一) 指導方針	13
(二) 初等科第一學年の指導要項	13
第四 藝能科音楽指導の實際	14
(一) 歌唱指導	14
(二) 鑑賞指導	20
(三) 基礎練習	28
(四) 器樂指導	36
(五) 指導の方法	36
(六) 掛圖の取扱	38
第五 他教科他科目及び行事儀式の關聯	39
第六 儀式唱歌樂譜及び指導上の注意	40
君が代 勅語奉答 一月一日 紀元節 天長節 明治節	
第七 初等科第一學年教材樂譜及び解説	62
附 録	
(一) 藝能科音楽に關する法令	142
(二) 音楽用語	144
(三) 初等科各學年教材一覽表	150
(四) 指導豫定進度表	151
(五) 鑑賞用音盤一覽	152

ウタノホン 上 教師用

總 論

第一 藝能科指導の精神

(一) 要 旨

一 皇國の道の修練

藝能科教育の要旨は、先づ第一に皇國の道に則つて初等普通教育を施し國民の基礎的練成をなすにある。此れは言ふまでもなく國民學校教育の一般の原則であるが、特に藝能科の教育に當るものの銘記しておく必要がある。

吾々は、悠久の昔から吾々の祖先が修練し創造してきた歴史的國民的な藝能文化の中に養はれ育てられてゐる。そこには、祖先が吾々に遺した傳統的な物の見方、感じ方、考へ方があり、道がある。さうして、それ等のものの歸結するところは、藝能文化の面を通しての皇運扶翼といふことにある。それが皇國の道である。吾々は、この皇國の道に於て現に生かされてゐると共に、將來、益々之を發揚して行かねばならぬのである。即ち藝術技能を修練することを通してこの皇國の道に參じ、自分に於て皇國の道を自證し、皇國の道に於て自分を自覺し、皇國の道の使徒として之を紹述し、之を顯彰し、以て國運の發展に貢獻して行かねばならぬのである。

それは第一に修練である。故に行と行得とを忘れた觀念や觀想のみであつてはならないのである。又、それは道の修練である。故に單なる技能や知識の傳習のみに留らず、道を求め道を修める心がなくてはならないのである。又、それは皇國の道の修練である。故に吾が國の傳統を忘れた外國の藝能への心酔や、國家を超えた藝術至上主義とか、美の爲の美とかいふやうなものであつてはならないのである。あくまでも、吾が國藝術技能の實修を通して皇國の道を體得せしめることであらねばならない。

次に藝能科は、國民練成の爲の教科である。故に抽象的な個人的人格の完成とか、自我の實現の爲の教育ではなく、具體的に忠良な皇國臣民を練成する爲の教育藝能であり、又、國境を超えた單なる人間性の教養ではなく、歴史的な日本國民性の練成の爲の藝能教育であらねばならないのである。

更にそれは基礎的練成の爲の教科である。故に兒童將來の多様な發展の

由つて出づるその基礎に培へばよいのであつて、専門的な純粋藝術の教育とか、小藝術家を育てるかのやうな教育に流れてはならないのである。

二 國民生活の充實

抽象的な個人といふやうなものは、現實には存在しない。吾々は、根本的に歴史的社會的な存在である。故に現實の吾々の生活は、凡て當然に歴史的社會的な國民生活であるのである。さうして、本來吾々は、かかる國民生活によつて形成せられ、又、國民生活を形成して行くべき存在である。従つて、かやうな生活を営む吾々には、内にある國民的・情操的なものを、具體的な、客觀的なものにまで表現し形成してゆくことによつて、どこまでも自分を見て行き自覺してゆかうとする藝能的表現の要求がある。さうして、之を果すことによつて、深い底からの満足と喜びがあり、又それによつて吾々の國民生活は豊醇にされ潤澤にされ、生きがひのある華も實もある生活をなし得るのである。そこに、吾々の國民生活の充實がある。藝能科は、かやうな意味に於て、國民生活の充實を目的とするのである。

三 藝術と技能

國民學校教育の一分節として、藝能科の分擔する部面は、藝術と技能の修練であり、情操の醇化といふことにある。藝術は主として美的な價値に重點を置く表現活動であり、技能は廣い意味では藝術を含むが、藝術に對して云へば、實用的、實際的な價値に重點を置く表現活動である。併し、藝能科の中に、この二つが二元的に併立するのではなく、又、藝術と技能とが別々にあつて、之を組み合はせて藝能科ができるのではなく、本來、一體である藝能的活動の兩極をなすにすぎない。即ち藝術は技能を反極としてもち、技能は藝術を反極としてもち、共に情操を基調とした生活態度の現れであり、行動を通し物を素材とし、合理的に形成する表現の活動を中心とするものである。

あくまでも實際生活を離れず、實際生活に即してゆかうとする藝能科に於ては、美と實用とを一如の姿で生活に具現してゆくことを理想とする。加之、本來美と實用とは必ずしも矛盾するものでなく、却つて、この兩者を巧に相即融合せしめることこそ、吾が國藝能のすぐれた傳統の一つである。

藝術技能の修練に於ては、どこまでも身を以て行じ、身に訴へて知り、身についたものとせねばならない。藝能科には、各科目とも表現、鑑賞、理會等の諸方面があるが、作ることと、見ることと、知ることとは本來離るべからざるものであるから、之等は、相互に密接な關聯を保ちつつ、すべてこの精神をもつて貫かれ、且つ常に反復練習と苦心推諫とのうちに百鍊自得せし

めることが大切である。

(二) 藝能科指導の方針

一 精神の訓練

藝能科の指導に於ては、技巧に流れず、精神の訓練を重んぜねばならぬ。古來、吾が國民は、技巧に於て勝れてゐるが、而も技巧の末梢に偏すること深く戒め、術を超えて道を求め、技術を通して精神をねり、心身一體、心技一致の處に、道を修めて人間を造るといふことを重んじたものである。

吾が國藝能のかやうな傳統は、藝能科に於ても益々維持發揚せねばならぬ。

所謂、技巧に流れずとは、かやうな心技一致の具體的な創造から抽象された單なる技巧を偏重して、手先きの器用さなどのみを追ふ流弊を戒めたのであつて、決して技巧を無視する意味ではない。本來、技術の修練を外にして精神の訓練のあらうはずもなく、精神は技術を通してのみ磨かれ、技術は精神によつてのみ輝くものであることは言ふまでもない。

精神の訓練は、修練の過程に於てこそ行はれる。故に藝能科に於ては、製作實習の過程を重視して、單に結果や成績のみを偏重してはならない。又、この過程に於ける修練には、興味や喜びがなくてはならぬと共に、刻苦して製作し、久しきに堪へて完成するといふ真剣な心構へや、作品に於て自らを省み、過程そのものに自ら楽しむといふやうな眞摯な態度を養ふことも忘れてはならない。藝能科をもつて、單に興味中心の遊びごととのみ觀するやうな考へ方は、深く戒める必要がある。

二 我が國藝術技能の特質

藝能科に於ては、吾が國藝術技能の特質を知らしめねばならない。祖先の遺産としての歴史的な藝能的作品は、國民精神や國民的情操の最も具象的な現れであり、大きな陶冶力をもつものである。従つて、兒童は之に觸れることによつて、最も有効に端的に國民的情操を陶冶することができるのである。特に各科目とも、その鑑賞の教育に於ては、此の點に留意せねばならぬ。

我が國民の藝能的な天分や個性や傳統及び外來文化攝取醇化の精神、態度等を理會せしめ、これ等のものが今後の我が國藝能文化創造の根幹となるべきものであることを、兒童の程度に應じて知らしめることが必要である。

我が國の藝能文化を尊重することが、決して退嬰的な尙古主義や、外國文化の排斥を意味するものでないことは、言ふ必要もないことである。

三 工夫創造力の養成

藝能科に於ては、工夫創造力の養成に力めねばならぬ。従つて、自發と個性を重んじ、表現の意慾を鼓舞し、發明創案に力めしめることに留意せねばならぬ。特に藝術的・技術的良心を養ひ、小成に安んずることなく、推敲改良して已まない態度を養ふことが大切である。

我が國藝能の傳統を尊重することと創造力の養成とは、決して相反するものではない。偉大なる傳統こそ眞に創造するものである。それと共に、今後の藝能科教育に於ては、從來よりも一層科學的・合理的なものの参加が必要とせられる。我が國藝能の勝れた傳統である處の勤とか妙とかいふ直感的なものは、近代の科學的な知性と相俟つて、更に一層創造的になるであらう。科學的な知性を離れた藝能は、秘傳的、個人的になつて停滯しがちである。藝能科に於て知性的なものが重視せられてゐる所以である。

(三) 教材の選擇排列

教材は、我が國の藝能文化につき、藝能科の目的を達するに必要なものを國民生活及び學校行事の實際に即し、兒童の心身及び技能の發達に留意して精選すべきである。而して之を發生的に展開せしめると共に、他の教科との作業的な關聯を考慮して教材を定位せしめることに留意すべきである。

上の趣旨に従つて、教材の體系は、左の四段階に分つて排列する。

第一期 初等科第一學年、第二學年

兒童の思想感情の擴充と表現意欲の自由暢達とを主眼とし、特に兒童の主體的活動、遊戯的態度に即して表現の豊富を期し、表現の歡びを感得させることに留意する。

第二期 初等科第三學年

前期の主體的な遊戯的な表現を次第に自覺的な又目的的な表現に導き、觀照的な寫實的な態度への圓滑な誘導に力める。

第三期 初等科第四學年、第五學年、第六學年

觀照的な態度を確立し、對象の理性的な認識を修練させ、藝術的規範や自然の理法に隨順せしめつつ創造する精神を養ひ、技能を修練させる。

第四期 高等科第一學年、第二學年

前三期の綜合的應用を徹底し、之を生活に具現することに留意すると共に吾が國藝能の傳統に關する理會と鑑賞とを深め、以て國民的藝能創造の素地に培ふことに留意する。

向、教材を具體化、實際化する爲に兒童の家庭や郷土の生活に即せしめ、學校の儀式行事とも關聯せしめることが必要である。又、此の趣意から、農山漁村の教育が、徒らに都市の教育に追隨するの弊などは、藝能科に於て特に深く戒めねばならぬ。又、教科書に於ける教材の選定排列の精神を體し、之に則つて、適宜、地方の代用教材や補充教材を發見し考案することの必要な場合が藝能科に於ては特に多いであらう。併し、普通教育として陶冶價値の乏しい稀有特異の地方的資料に偏することは慎まねばならぬ。

(四) 指導上の注意・その他

一 日常生活への應用

藝能科の教育が單に教室だけのものに終らず、技で修練した情操、技能、知識、感覺が、兒童の生活の全面に具現され應用され、生活そのものも、生活の環境も、藝術的に、技術的に、たしなみ深く洗煉されたものとなり、又能率的、合理的なものとなるやうに指導することが大切である。進んでは利用厚生とか、國防産業の方面に寄與する精神を養ふことが大切である。

二 個性の伸長と共同作業

藝能科に於ては、教科の性質と特に個性の伸長に留意せねばならぬことは言ふまでもない。唯、個性と癖とを混同したり、誤つた自由や放任に墮したり、個人主義的な教育に終つたりすることは戒めねばならぬ。特に初等普通教育としての或る一定の要求を充すことを忘れてならないことは勿論である。

個性の發揮と之を綜合する共同作業を適宜行はせ、個性を通して全體に奉仕し、相互に協力する精神を養ふことは、今後、意々必要とせられる。

三 儀・姿勢

儀の教育は、吾が國教育に於けるゆかしい傳統である。特に藝能科は、行動作業を主とするものであり、且つ用具・材料を取扱ふことも多いから、儀の教育を行ふ必要も機會も効果も格別多いものがある。特に清潔・整頓・仕事の後始末・材料の節約利用等の良習を養ひ、座作進退の行儀を練ることに注意せねばならぬ。

姿勢は、藝能科に於ては單に衛生保健の立場からばかりでなく、能率的とか、藝術的とかの立場からも注意せねばならぬ。即ち仕事に對する氣魄や氣合や慣みなどの心構への現れとして姿勢を考へ、所謂構へとして精神的で合理的でしかも自然に安らかであるやうに指導せねばならぬ。又、作られる作品の美と共に、作るはたらきそのものの美をも現するといふ意味でも指導し

たいものである。作品の批正の如きも原因にさかのぼつて姿勢の批正から、廣義の姿勢ともいふべき机腰掛等の關係にも及び、更に進んでは、根本的に心構への批正にまで及ぶやうにしたいものである。

四 用具・材料

用具に就いては、名稱・構造・機能・使用法・手入法・保存法等から、物によつては、分解・組立・修理についても適當に指導すると共に、之を手の延長と觀じさせて大切に愛護させねばならぬ。特に古來、道具を單なる手段としての器具以上のものとして尊重し、寧ろ之を神聖なものとしへみて來た傳統精神を重んじて、用具愛護の精神を養はねばならぬ。

材料に就いては、その性質を明かにし、物の理に循つて造る態度を養ひ、常に製作に即し、技法に關聯しつゝ種類・特性・選擇・保存等について指導すると共に、之を單なる自然の物質・製作の手段としてみるのみでなく、古來、之を自然の恩恵と觀じ、勿體ないと感じて來たやうな傳統に鑑み、單なる經濟的な意味からばかりでなく、精神的な立場からも資源愛護、廢物利用等の態度を指導してゆきたいものである。

五 他教科他科目・儀式・學校行事との關聯

藝能科及びその諸科目は、夫々独自の價値と組織とをもつものであるから、他によつて之を歪められる如きことなく、夫々の地位に於て陶冶價値を發揮すべきことは勿論であるが、之がために偏狹な科目割據の流弊に墮することは、國民學校教育の精神に鑑み、深く戒めねばならぬ。藝能科の諸科目は、その作業的性質の故に、他教科他科目及び學校の儀式行事と殊に密接な關聯があることを辨へ、独自の特色を保ちつつも、其れ等と自然にして而も必然な關聯を保つやうにせねばならぬ。それは、決して科目の價値と系統とを害するものでなく、却つて之を發揚するものであることを知らねばならない。

以上の如き關聯は、特に下記の如き點に於て保たれるべきである。

1. 國民科との關聯。藝能科は、國民的情操を醇化し、高雅なる趣味を涵養することを目的とする。従つて、國民的感動を通じて國民精神の涵養を意圖する國民科とは、最も密接な關聯がある。特に道徳的情操を陶冶し、國民の品位を高め、又、吾が國家家庭生活の醇風美俗を發揚し、婦徳の涵養に資する等の點に於て關係の深いものがある。更に、國民科の教科内容を作業化して、之を體得せしめることに依つて、其の鑑賞や理會を徹底し、表現の力を精練する上に貢獻する所が多い。
2. 理數科との關聯。藝能科は、物を素材とし、道具や機械を手段とし、

それ等の理法に循つて創造し形成することを本質とする。用具・材料の理法に循ふには、それを明確に知らねばならず、其の爲には、之を觀察し、思考し、理會する理數科的の修練を必要とする。創造する爲には、技術を以て物を處理せねばならぬ。技術は直覺的であり、合理的でなくてはならず、従つて、理數的な原理の應用としての性質を多分に含むものである。此の點に於て、理論的であり、直覺的な態度を重んずる理數科の修練と相通する。機械の理會や取扱を要素とする工作は、勿論、音樂、圖畫、家事等に於ても、此の合理的、直覺的な態度の修練は意々必要とせられる。

要するに、理數科の目的とする合理創造の精神の養成は、藝能科に於ても忘るべからざるものである。

3. 體鍊科との關聯。藝能科は、身體の行動を通して、藝術技能を修練し、體得を重んじ、心身一體の境地に至ることを志すものである。此の點に於て、體鍊科と深い關係がある。又、作業による身心の鍛鍊、姿勢の訓練は勿論、團體訓練の尊重、明朗快活な精神の養成等の點に於て關聯が深く、更に傳統的な武道精神と藝道精神とは、相通する所が非常に多い。
4. 實業科との關聯。藝能科は、勤勞作業を通して創造生産することを本質とする。従つて、實業科に於ける勤勞愛好の精神及び創造生産の精神の養成に密接に關聯する。

又、工夫・考案の精神及び協同の精神を養ひ、實業的知識及び技能の基礎的修練をなすことに於て實業科に提携すべき部面が多い。

5. 儀式・學校行事との關聯。儀式・學校行事は、多く音樂を伴ふものである。従つて、歌曲による敬虔の心情、愛國精神の涵養に資し、又、之によつて感情及び行動を統一し、以て團體訓練に資する所が多い。又、式場や會場の裝飾整備や行事内容に藝能的修練の貢獻する所が多くあらう。

六 設備・材料

藝能科に於ては、教科の性質上、相當の物的設備及び材料が必須である。故に設備の充實に就いては、今後、一層積極的な計画的な考慮を要する。材料の供給に就いても同様に細心周到な工夫と配慮とが必要である。

七 教師の敬養

藝能科の使命の重要性と、教科内容の進歩増大とに鑑み、教師の敬養は、一段と高きを要求される。制度の改善も、設備の充實も、一切は之を運用する教師其の人によつて活かされるのであるから、藝能科教師の深い敬養や高い見識こそ、藝能科教育振興の眼目と言はねばならない。

第二 藝能科音楽指導の精神

藝能科音楽の指導は、國民學校教育の根本精神に則つて、國民の基礎的錬成を行ふことをその最高目標としなければならないのは勿論であるけれども、この目的を達成する爲には、當然、藝能科本來の使命を全うし、更に藝能科音楽独自の使命を全うしなければならないのである。即ち藝能科音楽は、その独自の使命を十分に發揮して、之を達成することにより、國民の基礎的錬成といふ最高目標に到達することを常に考へなければならない。

藝能科音楽の指導に當つては、先づ我が國に於ける音楽教育が如何にして發達して來たかを顧み、更に國民學校の教育上、如何なる使命を持つか、といふことを十分に考へなければならない。

1. 音楽教育の變遷

國民學校に於ける藝能科音楽の基礎となつて居るものは、過去七十年間に亘る小學校唱歌科である。

我が國に於ける小學校の唱歌科は、明治五年八月の學制頒布にその萌芽を發したのである。この學制に於ては、「唱歌」が小學校の一教科として設置されては居るけれども、その末段には、「當分之を缺く」といふやうな但書が附せられて居り、實際にはその指導が行はれて居なかつた。即ち當時に於ては、唱歌を指導し得る教師の實力も無く、又、指導する教材も用意されて居なかつた爲に、全く有名無實の状態であつた。

明治十二年十月、文部省は音楽取調掛を創設して、音楽教員の養成と、唱歌教材の調査研究に着手した。明治十四年から十七年にかけて出版された「小學唱歌集」(三冊)は、その研究の成果であり、我が國に於ける唱歌教科書として最初のものといふことが出来る。この時代から唱歌指導が實際に行はれるやうになつたのである。

前に述べた學制は、明治十二年九月、教育令となつて發布され、次いで十三年十二月には改正教育令となり、更に明治十九年四月には小學校令の發布となつた。當時にあつては、「唱歌」は、尋常小學校に於ては土地の情況によつて加設することを得る教科の一であり、高等小學校に於ては土地の情況によつて缺くことを得る教科の一であつて、嚴格な意味に於ける必須科ではなかつたのである。

その後、小學校令は屢々改正を加へられたけれども、唱歌科の地位は大同小異であつたが、明治四十年二月、小學校令の大改革が行はれて、義務教育年限が六ヶ年に延長された際、「唱歌科」は、始めて必須科となり、國民學校令施行前迄、この規定がそのまゝ行はれて來たのである。

明治四十三年七月、文部省は、始めて「尋常小學讀本唱歌」(全一冊)を發行した。前に述べた「小學唱歌集」は、主として外國曲に日本語の歌詞を配したものを載録したのであるが、この「尋常小學讀本唱歌」は、主として當時の我が國に於ける音楽家の新作樂曲を掲載したものである。この意味に於て、我が國の唱歌教科書として文部省編纂の最初のものである。

この時代から小學校の唱歌指導は、漸次物典の機運に向つて來たのであるが、次いで、明治四十四年五月から大正三年六月にかけて、文部省編纂の「尋常小學唱歌」(全六冊)が發行されるに及び、各學年に於ける唱歌教材が或程度迄充實し、全國的に唱歌科の實績を擧げて來たのである。特に大正の初期以來、所謂新教育の思潮が流行し、その中でも藝術教育思潮の影響は、唱歌科その他一般藝術教科物典の推進力となつて、一層盛んになつて來たのである。

昭和五年五月、文部省は、「高等小學唱歌」(全一冊)を發行して、高等小學校に於ける唱歌教材を提供した。

文部省は、更に「尋常小學唱歌」の大改訂を行ひ、昭和七年三月から同年十二月にかけて、「新訂尋常小學唱歌」(全六冊)を完成し、更にその續刊として、昭和十年三月から八月迄の間に、「新訂高等小學唱歌」(全六冊)を發行して、小學校全般に亘る唱歌教材の整理を一應完了したのである。

その間、音楽教育の實績は相當に向上して、國民學校令の實施期に到達したのであるが、小學校に於ける音楽教育の概況を顧みると、尙、不十分な點を多分に發見した。その最も根柢的なものは、國家として音楽教育の方法等に關する一定の基準が示されて居なかつた爲に、教材の選擇、排列、或は指導の方法、等が、唱歌指導者の手に自由に任せられて居たといふことである。その結果として、全國的には音楽教育の特殊な研究者が多量に現はれたけれども、それは、個人の研究に止まつて、普遍的ではなかつたといふこと、及びその研究の方針、程度、範圍、その他が、殆ど指導者個人の意見によつて決定され、國家としての一定の方針が示されて居なかつたといふ結果になつたのである。

例へば、教科用圖書の如きも、文部省著作のもの外に、多數の文部大臣檢定済のものがあり、各指導者は、その中から或程度迄自由に選擇して指導

することが出来たのである。又、視唱法を行ふにしても、それをどの學年から始めるか、どの程度迄進めるか、といふやうな事、或は階名唱法によるか、音名唱法によるか、といふやうな事も、規定が無かつた爲に、その実績は極めて區々たる状態であつた。

2. 音樂教育の目的

人間の精神的教養を高める爲に音樂を利用するといふ考へ方は、洋の東西を問はず、又、古今を通じて變らない原則である。

明治二十四年十一月、我が文部省に於ては、「小學校教則大綱」といふものを定めたが、その第十條には、次のやうに示されてあつた。

小學校教則大綱

第十條 唱歌ハ耳及發聲器ヲ練習シテ容易キ歌曲ヲ唱フルコトヲ得セシメ兼テ音樂ノ美ヲ辨知セシメ徳性ヲ涵養スルヲ以テ要旨トス

次いで明治三十三年八月、小學校令が改正されたが、その中には、「唱歌」の要旨が、次のやうに示されてあつた。

小學校令施行規則

第九條 唱歌ハ平易ナル歌曲ヲ唱フルコトヲ得シメ兼テ美感ヲ養ヒ徳性ノ涵養ニ資スルヲ以テ要旨トス

更に明治四十年二月、小學校令の改正が行はれ、昭和十六年三月迄は、殆どそのまま適用されて居たのであるが、唱歌科の要旨は、前の明治三十三年の改正の當時と全然變りがない。

即ち小學校に於ては、「平易ナル歌曲ヲ唱フ」といふ音樂的技能の修練を通じて「美感ヲ養ヒ」、そして「徳性ノ涵養」に役立つところの教育を施す目的を以て、唱歌科が設置されて居たのである。

國民學校藝能科音樂に於ては、次の如く示されてゐる。

國民學校令施行規則

第十四條 藝能科音樂ハ歌曲ヲ正シク歌唱シ音樂ヲ鑑賞スルノ能力ヲ養ヒ國民的情操ヲ醇化スルモノトス

國民學校に於ても、「歌曲ヲ正シク歌唱」とか、「音樂ヲ鑑賞スルノ能力ヲ養フ」といふ音樂の技能的修練によつて、「國民的情操ヲ醇化」することが、音樂教育の目的であるが、その技能の修練も、國民的情操の醇化も、結局は國民の基礎的鍊成の爲のものである。國民學校に於ける歌唱指導は、單なる音樂技能の修練が目的ではない。それが、國民的情操の醇化に役立つなくては

ならないのである。従つて、すべての教材とすべての方法とが、國民的情操の醇化に役立つやうに考慮が拂はなければならないのである。又、國民學校に於ける鑑賞能力の養成は、單なる音樂的教養の向上といふことに終始してはならない。やはり、それが國民的情操の醇化に役立つやうに、すべての教材と方法とに考慮が拂はなければならないのである。この歌唱指導と音樂鑑賞能力の養成とは、國民の基礎的鍊成の爲に必要な國民的情操の醇化に役立つなければならないといふことになる。

3. 國民學校音樂教育の確立

小學校七十年の歴史を基礎として國民學校の音樂教育は、次の如くに確立された。

イ. 唱歌科が藝能科音樂となつた。

從來小學校に於ては、「唱歌科」であつて、主として歌唱といふ音樂的技能の修練を中心として實踐されたのであるが、國民學校に於ては、「藝能科音樂」となり、その技能的修練は、歌唱、鑑賞及び器樂の指導といふ廣い範圍に亘つて行はれるやうになつたのである。

ロ. 教科書が國定となつた。

小學校の唱歌科に於ては、文部省著作の教科用圖書ばかりでなく、廣く文部大臣の檢定を経た教科用圖書を採用することが出来たが、國民學校に於ては、國定教科書が制定され、原則として文部省に於て著作権を有するもののみが、教科用圖書として採用されることになつた。更に小學校に於ては、尋常小學校第四學年以下に兒童用の教科用圖書が無かつたけれども、國民學校に於ては、全學年に亘つて兒童用の教科書が編纂され、而もその教師用書が出来て、各教材の教授方針等が詳細に示されて居る。

ハ. 輪唱歌及び重音唱歌の指導範圍が擴張された。

小學校に於ては、尋常小學校で輪唱歌及び重音唱歌を指導することが出来ない規定であつたが、國民學校に於ては、初等科に於ても、之を指導することが出来るやうになつた。即ち國民學校令施行規則に次の如く示されてある。

國民學校令施行規則

第十四條 初等科ニ於テハ平易ナル單音唱歌ヲ課シ適宜輪唱歌及重音唱歌ヲ加ヘ……云々

二、器樂の指導が加へられた。

小學校に於ては、器樂の指導が法規の上で認められて居なかつたけれども、國民學校に於ては、器樂指導の音樂教育上に於ける独自の價値を認めて、之を法規の上に明示して居る。

國民學校令施行規則

第十四條 初等科ニ於テハ……(中略)……又器樂ノ指導ヲナスコトヲ得。

ホ、樂典の指導が明示された。

小學校に於ては、樂典指導に何等の指針も示されて居なかつたが、國民學校に於ては、

歌唱ニ即シテ適宜樂典ノ初歩ヲ授クベシ

と明示されたのである。

ハ、視唱法指導の體系が確立された。

小學校に於ては、視唱法指導に對して何等の規定がなく、その體系は全く示されて居なかつたが、國民學校に於ては、初等科第二學年迄は、歌曲の指導に聽唱法を本體とし、その間に視唱法の基礎練習を行つて、第三學年以上は視唱法を本體とすること及び全學年を通じて音名唱法を採用する等、視唱法指導に關する體系が明示されたのである。

ト、基礎練習に對する要求が明示された。

小學校に於ては、基礎練習の範圍等に對しても、何等示されて居なかつたが、國民學校に於ては、次の如く重視すべき點が明示されてある。

發音及聽音ノ練習ヲ重シ自然ノ發聲ニヨル正シキ發音ヲナサシメ且音ノ高低、強弱、音色、律動、和音、等ニ對シ鋭敏ナル聽覺ノ育成ニカムベシ

特に鋭敏なる聽覺の育成は、歌唱及び鑑賞指導の根柢であるばかりでなく、國民としての生活水準を向上し、基礎的練成の上にも極めて重要なことである。

4. 儀式唱歌の重視

特に儀式唱歌の指導に對する注意を喚起し、その徹底を要求して居る點も、國民學校に於て始めて法規の上に示された重要なことである。

即ち教則中に

祭日祝日等ニ於ケル唱歌ニ付テハ周到ナル指導ヲ爲シ敬虔ノ念ヲ養ヒ愛國ノ精神ヲ昂揚スルニカムベシ

と示されて居るのである。

かくして國民學校の音樂教育は確立され、その指導の方針が明確に示されたと同時に、教材に對しても指導の方法に對しても、國家として統制ある方針が示されて居るのである。これは、やがて教則に示されて居る次のやうな教育の理想に到達することを期待して居るのである。

兒童ノ音樂的資質ヲ啓發シテ高雅ナル趣味ヲ涵養シ國民音樂創造ノ素地ヲラシムベシ

第三 藝能科音樂教育の系統

1. 指導方針

藝能科音樂の技能的修練として歌唱と鑑賞との二方面があり、その指導を十分に徹底させる爲に種々の基礎練習がある。

この歌唱、鑑賞及び基礎練習は、指導の根本方針として一元的であることを理想とするが、指導の過程に於ては、その或部分が獨立の形式をとるのは止むを得ないことである。

一般方針としては、先づ初等科第三學年迄の間に幹音だけの認識、鑑賞、記憶をさせるが、その實際指導方法としては、歌唱の指導、五線譜の視唱指導及び和音訓練がある。或過程に於ては、その歌唱指導と視唱指導及び和音訓練等が各々獨立の形式をとる場合もあるけれども、それ等は結局幹音の認識、鑑賞、記憶といふ點で融合統一されるやうに計畫されて居る。

極めて複雑な音の組織の中で、先づ幹音を體得させ、それを基礎とし、中心として指導が他の派生音に發展し、結局、國民學校全學年を通じて、或程度の廣範圍の音に對し、之を認識、鑑賞、記憶させるやうな教育が實施される譯である。

この歌唱指導は、大體に於て初等科第二學年迄は聽唱法により、第三學年以上は視唱法を本體とする。

視唱指導及び和音訓練等に對する指導方針は、それぞれの項に於て述べるが、兎に角、一定の順序と方法とを以て、極めて體系的に實施するやうに計畫されて居る。

2. 初等科第一學年の指導要項

先づ第一學年に於ては、與へられた歌曲を聽唱法を以て指導することから

國民學校の音樂指導が出發する。その間、或は之と關聯して鑑賞指導の行はれることは勿論であるし、又、特に發音發聲の訓練に對する注意も拂はれるとか、更に他教科及び他科目との關聯の重んぜられなければならないことはいふ迄もない。

一方に於ては、歌唱指導と對立して五線譜の音名讀が開始されるが、第一學期中頃以後に到れば、歌唱指導とこの五線譜の音名讀とが結合されて、その結果は、當然、幹音の音高記憶と視唱法指導との基礎訓練になり、やがて幹音の認識、鑑賞、記憶といふ理想を達成する。

更に和音訓練が開始され、それも第二學期の始め頃から、五線譜の音名讀と結合されることによつて、音高記憶及び和音記憶の基礎となるのである。

歌唱指導、五線譜の音名讀、和音訓練と並行的に開始された各方面の指導は、それぞれ個々の指導が漸次徹底するに従ひ、その三者がいよいよ融合されて來て、幹音の認識と鑑賞と記憶とを達成することになるのである。

第四 藝能科音樂指導の實際

1. 歌唱指導

イ 歌詞に就いて

歌詞の選擇に當つては、至純なる國民的情操を陶冶し、皇國民を鍊成することに重點を置いた。

例へば、古來傳統的に歌はれて來た民謡童謡等の中、從來、教育上等閑視されてゐたものをも相當に採用したるが如き、國防に關するもの、自然の觀察を取扱つたもの、兒童の實生活に即したもの、古來の國民的社會的行事を歌つたもの等を、兒童の心境に即するやうに考慮して採用した等がそれである。

更に歌唱の間に、兒童が自然に感化と影響とを受け、以て快活純美な性情を陶冶し、音樂教育の真義に透徹するやうなものを採用することに力めたのである。

尙、國歌を巻頭に掲げて、その正確にして莊重な歌唱を重視した如き、又、初等科一、二學年に於ては、全體を通じて短く平易であるといふことを旨とし、概ね二句二節、三句二節、四句一節以内とし、童心の表現を主として、容易く理會し且つ暗記して歌唱し得るやうに力めた

點などは注意すべきである。

歌詞の排列は、出来るだけ季節に相應するやうに考慮し、極めて簡易なものから、次第に複雑な内容のものへと展開するやうに注意したが、更に修身、國語、國畫、工作、體操、等の各教科、科目との關聯を圖り、歌唱の指導を終れば、直ちに遊戯又は其の他の生活に之を應用出來るやうな材料をも相當に採擇した。

以上の外、輕快な律動的な材料を採擇して、快活明朗な童心の育成をはかり、更に分散和音の訓練に資する歌詞を附したるが如きは、何れも新たな創案である。

ロ 樂曲に就いて

初等科第一學年に於ける樂曲は、大體次のやうになつて居る。

調子 旋律に派生音をふくまないから、兒童用書には全然調子記號を用ひないが、次のやうに分類される。

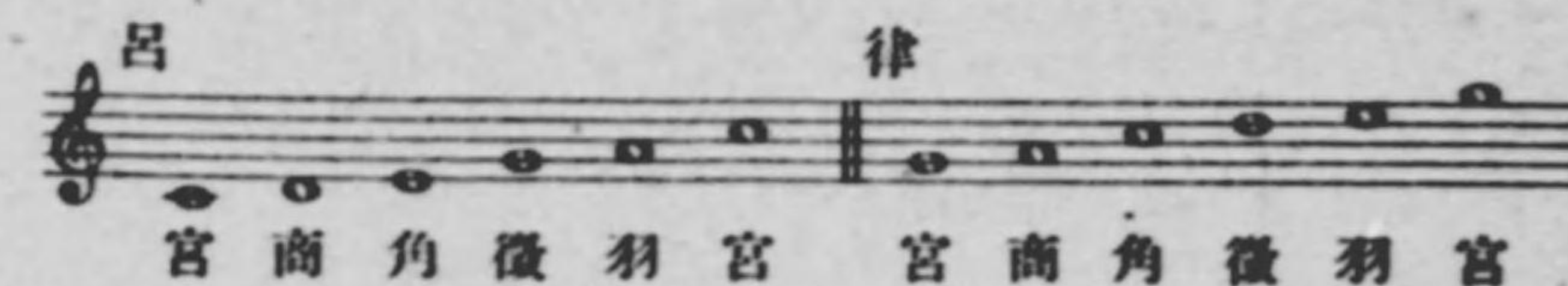
ハ 調長音階 7曲 ト 調長音階 3曲 ヘ 調長音階 4曲

日本固有の音階に依るもの

イ 調陽音階 4曲 ト 調陽音階 1曲 ニ 調陽音階 1曲

日本固有の音階には、雅樂音階と俗樂音階とがあり、雅樂音階には、「呂」と「律」の二種、俗樂音階には「陽」と「陰」との二種がある。

雅樂音階の音列は、次の如くである。

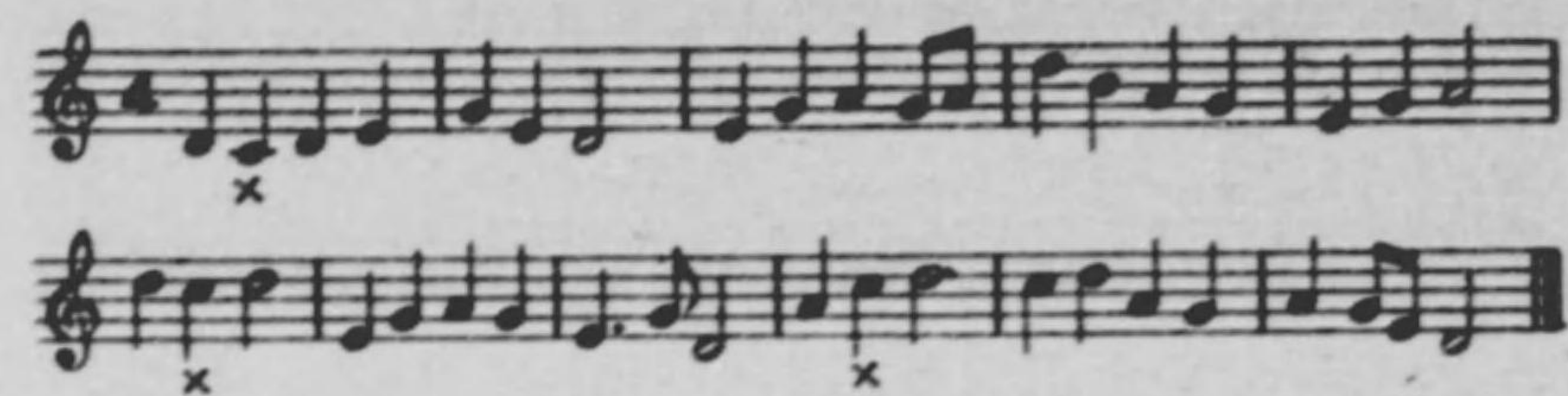


「宮商角徵羽」は、階名である。

之等の音列は、旋律の途中に於ては半音程の上昇又は下降の變化が行はれることがある。



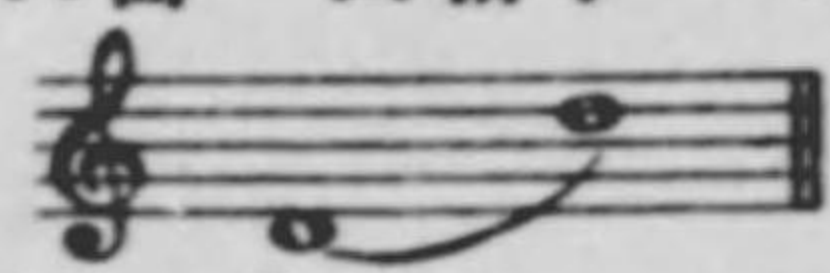
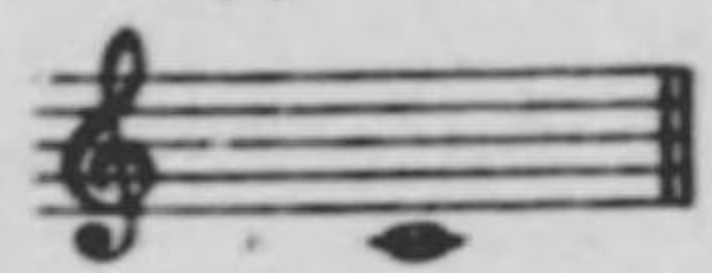
國歌「君が代」は、「ニ音」を宮、即ち主音とする「律」の音階から成り、上行旋律の導音は、半音程上昇して「嬰羽」となつて居るのである。
(×印=嬰羽)



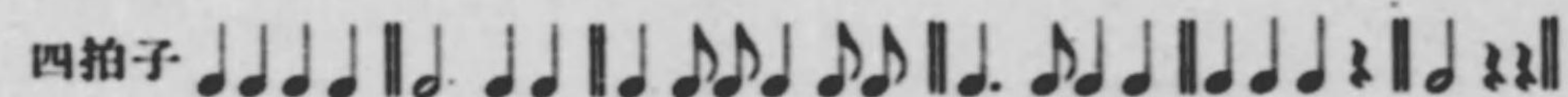
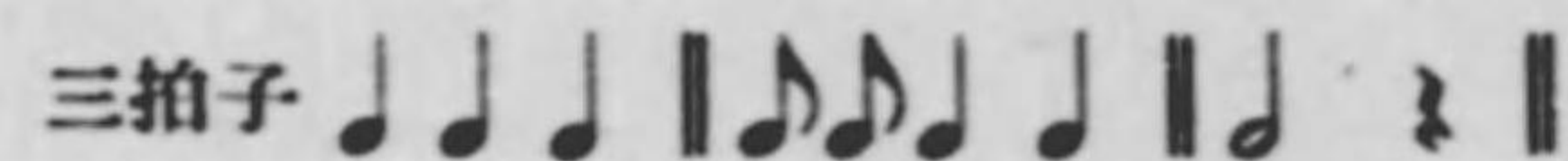
「呂」の音階は、我が國民の嗜好に適せぬ爲か、殆ど用ひられず、
雅樂の多くは「律」の音階によつて作られて居る。
俗樂音階の音列は、次の如くである。



「陽」音階は、雅樂の「律」の音階に類似して居り、「陰」音階は、西洋音
樂の短音階が長音階に對すると同様に、之と同主音階の關係に
なつて居ると思はれる。この二つの音階に於ても 旋律の進行
上、その上行下行に際して嬰や變の變化をなすことがあるが、
その様式は、雅樂音階の場合と同様である。

拍子 二拍子 14曲 四拍子 4曲 三拍子 2曲
音域 大部分は  例外として  の用ひて
あるものが二曲ある。

律動



曲の長さ 大部分は八小節乃至十二小節程度の短い構造のものである。
中に十六小節のものもあるが、それは二拍子のもので、實質的
に長いものではない。

ハ 歌ひ方に就いて

歌則には發音練習に就いて「自然ノ發聲ニヨル正シキ發音ヲナサシメ」
と示されて居る。自然の發聲とは無理の無い、自然の話し聲を基調と
した歌聲であつて、唱歌を歌ふ際、音樂的表現を自由になし得る聲で
ある。即ち特種な所謂聲色を持たず、無理のない、自然の聲そのまゝ
を土臺として、之に音樂的な表現力を加へて行けばよいのである。
初等科一學年の兒童は、學校といふ團體の生活に入つたばかりであつ

て、心身の發育狀態も極めて不揃ひである。各兒童の聲の性質も、聲
域も、又はその聲量も一樣ではない。こゝに指導上注意を要する點が
多いのである。即ち或兒童の聲域は長六度位しか無いのに、他の兒童
は十度もある場合もあり、又或兒童は高い方の聲は出し易いが、他の
兒童は低い方だけしか出ないといふやうな場合が多いのである。この
區區たる狀態の聲を持つ多くの兒童を一つの歌曲を歌はせる爲にまと
めて行くといふ點に困難がある。従つて、兒童各個の聲の狀態を十分
研究し、觀察する必要がある。それ故に、一つの教材を齊唱させて置
くだけでは、十分に發聲の指導が出来ない。兒童の個々の狀態に常に
注意して、之を適當に指導して行くことが肝要である。

姿勢 唱歌の際の姿勢は立つて歌ふ姿勢が基本である。椅子に腰を
掛けたり、行進中歌ふのは應用の姿勢である。何れにしても



樂に歌へるやうに、身體のどこかに不自然な力を入れたり、
又は咽喉をつめて頭に青筋を張らせるやうなことは特によろ
しくない。頭は正しく正面に向け、頤を出さないやうにする
が、しかし咽喉を壓迫する程ひくのはよくない。胸や肩に無
理な力を入れず、胸はやゝ張り氣味に、腹部を前に出さない
やうにする。本を持つて歌ふ際に、頭を下げないやうに注意
する。又、歌ふ際に頭を振るやうなことは、絶対に避けな
ければならない。

呼吸 呼吸は、發聲の原動力であるから、正しい發聲をする爲には、
先づ正しい呼吸が必要である。腹の下部はやゝ引き氣味にし
て保ち、腹の上部及び肋骨の部分が自由に擴げたり、又、收

縮したりすることの出来るやうにして呼吸をする。呼吸の際、肩を上下したり、胸に無理な力を入れたりすることは避けなければならない。尚、この程度の児童にあつては、呼吸を長くとめるやうな練習は必要が無い。

母音の歌ひ出し すべて或旋律を歌ひ出す場合に、子音が始めにある時は、その子音についで母音があるから、問題は別になるが、母音から出るときは、比較的始めの聲の出し方が困難である。この場合は、一旦呼吸を止めて母音を出す方がよいのである。

聲の共鳴 聲は、音楽的な表現力を増す爲に種々な共鳴を作ふ。普通、頭部共鳴、胸部共鳴といはれて居るのがその主なるものである。頭部共鳴は、頭の方へ最もよくひびいて居るやうに聞える場合で、胸部共鳴は、胸に一番よく共鳴して居るやうに聞える場合を指すのである。歌ふ時は、その何れにも偏せず、表現の場合に応じて兩者又は兩者の中間的な聲も自由に使ふことが肝要である。従つて、聲區の如きもあまり極端に考へすぎない方がよい。聲區の境目が判然と分れるやうな不自然な發聲は、教師の正しい範唱によつて正しく指導するのがよい。

聲の訓練 歌曲を歌ふことそれ自體が、聲の訓練となるには相違無いが、一面に於ては、歌ふことの準備としての聲の練習を少しづつこの時代から始めた方がよい。勿論、この練習は、児童の心理を無視して、徒らに技巧のみに走つてはならない。

音域の擴張 この時代の児童の音域はまちまちであるが、児童が團體生活に馴れるに従つて、之を揃へるやうに指導することが大切である。音域の狭いのは、次のやうなことが主としてその障礙の原因となつて居るから、之等に注意して指導することが肝要である。

叫び聲を出し過ぎて居る場合。

咽喉に無理に力を入れて、しめつけて居る場合。

聲を細くし過ぎて萎縮して居る場合。

聲を口腔の奥の方へひきこみすぎて居る場合。

無理に息を出し過ぎて居る場合。

發想 この程度の児童の歌曲は、明朗なもの、元氣なもの、或は美しく一種の憧憬を表現するやうなものがあるが、しかし概して極めて幼稚な表現である。その聲は、大人のやうに強弱を十分に表現するやうな必要はない。歌詞を十分に表情をつけて朗讀する程度を基調として、無理のないやうに自然な發想で歌はせることが肝要である。

唱歌を歌ふ場合のみに發聲に注意するのではなく、日常生活に於ける發聲に注意して、不自然な叫び聲の如きは、常に避けさせるやうにしなければならない。

ニ 伴奏に就いて

伴奏は、歌唱の誘導輔佐の任に當るばかりで無く、和音訓練及び聽覺訓練等と密接な關係があるから、常に正しく奏するやうに心掛けなければならない。

教師は、先づ児童の歌唱に耳を傾け、伴奏の強弱緩急等を明確に表現することが肝要である。

伴奏は、從來ややもすると輕視される傾向があつたが、國民學校の音楽教育に於ては、之を重視する必要がある。

伴奏樂器としては、ピアノの方が効果的であることはいふ迄も無いが、オルガンでも奏し得るやうに考慮して作曲されてある。

各樂曲には前奏が附けてあるが、實際指導の場合には、適宜之を省略しても差支ない。

調子記號、速度記號、發想記號、發想標語は、児童用書には省略してあるが、伴奏樂譜には記入してあるから、實際指導に當つては、それ等に對して特に注意することが肝要である。

ホ 樂典指導に就いて

樂典は、歌唱に即してその初歩を授けるといふことになつて居るが、和音訓練や視唱指導等に關係して、必要に應じ、大體次のやうな程度のことを授ける。

譜表 (五線譜) 低學年に於ては、この名稱を授ける必要はない。線及び間にして音名だけを授ける。

音符 二分音符、四分音符、八分音符、附點四分音符

之も名稱は授けず、「一うち」「二うち」といふやうに内容に即して授けた方がよい。

音名 ハニホヘトイロ

息つき 記號によつて、そのつけてあるところで息つきをすることを授ける。

拍子 二拍子、三拍子、四拍子とがあること、及びその數へ方等を授ける。

縦線 「たての線」と教へる。

へ 祝祭日唱歌に就いて

國民學校に於ては、特に祝祭日唱歌の指導に對して注意しなければならない。

その指導に當つては、大要次のやうな點に注意して之を徹底的に取扱ふことが肝要である。

歌詞に就いて 發音を正しく、又、學年の程度に應じてその大意を理會させ、歌詞を十分に暗記させる。

樂曲に就いて 音程、律動、息つき、速度、發想、等に注意し、なるべく正確に之を表現する。

歌唱の態度に就いて 常に姿勢、態度に注意し、敬虔の念を養ふことに留意する。

指導の範圍 本學年の兒童用書には、國歌「君が代」だけを掲載してあるが、他の祝祭日唱歌も、出來得る限り指導する。例へば一月一日「紀元節」の第一節位は、是非とも指導する要がある。それ以上は、學年の進むに従つて指導の範圍を擴張して行けばよい。又、本學年で實際は歌はせる指導迄に到らない祝祭日唱歌でも、特によく聽かせて、十分之に親ませ、或程度の理會を得させて置くやうな指導をすることも特に必要である。

2. 鑑賞指導

イ 鑑賞指導の根本方針

國民學校藝能科音樂に於ける鑑賞指導の根本方針は、兒童の音樂的能力の發達に作り、歌唱と相俟つて聲樂器樂の音樂美を感得させ、且國民音樂創造の素地を培ふため、廣く東西古今に互り、兒童に適切な教材を選択して之を聽かせ、以て漸次高尙なる藝術音樂を鑑賞する能力を養ふにある。而して、その方法は、主として演奏、音盤、ラジオ、音樂映畫、等による。

一 演奏による鑑賞は、授業中に於ける歌唱又は樂器の演奏、校内に於け

る學藝會、又は兒童に適切な一般の音樂會等に於て之を行ふ。

二 音盤による鑑賞は、唱歌教材を模範的に吹込んだ音盤、又は唱歌教材に關係ある聲樂曲、器樂曲を吹込んだ音盤、音樂の形式又は律動を知らせるのに適當な音盤、聽覺訓練に必要な樂器の音色、性能、管絃樂の組織等を知らせるのに適當な音盤、高學年に於ては稍々高尙な藝術音樂を鑑賞させるために適當な音盤等によつて之を行ふ。

ラジオによる鑑賞は、學校放送又は一般放送を利用して、兒童に適切な音樂を聽かせることによつて之を行ふ。

三 音樂映畫による鑑賞は、兒童に適切な音樂映畫を利用して之を行ふ。

ロ 鑑賞指導の實際

以上、列記した鑑賞方法の中、最もその範圍の廣いものは音盤による鑑賞方法である。その他の方法は、適宜教材との連絡を考へ、兒童の音樂的能力に従つて適當な方法を採用すべきである。

音盤による鑑賞指導は、「ウタノホン」に收められた歌曲を吹込んだ音盤の外、大體、次の如き系統によつて之を行ふ。

初等科第一學年

聲樂 唱歌教材に關係ある獨唱曲、齊唱曲を模範的に吹込んだもの。

器樂 律動的なるものを主とし、樂器は管絃樂器、打樂器、ピアノ等を使用したもの。

樂曲の種類は、行進曲、描寫曲、舞曲等。

一 雲が代行進曲 吉本光藏作曲

これは、國歌「君が代」による行進曲で、教材「君が代」と連絡する。

四分四拍子、曲趣は、莊重にして且勇壯である。中間樂節に「皇國の守」の曲譜が挿入されてゐる。これは、外山正一の作歌、伊澤修二の作曲で、明治二十一年發行の「明治唱歌」に載つて居る。曲譜は、次の如くである。皇國の守は「ミクニノマモリ」と讀む。

曲は、「君が代」の旋律によつて始まり、中間樂節は、「皇國の守」の旋律に轉じ、再び「君が代」の旋律をくり返して曲を終る。

作曲者吉本光藏は海軍軍樂長で、明治四十年六月十一日に歿した。

皇國の守

外山正一 詞
伊澤修二 曲
吉本光藏 和聲

きたれやきたれやいざきたれ
みくにをまもれやもろともに
よせくるてきは おほくとも
おそるるなかれ おそるるな
しすともしりぞくことなかれ
みくにのためなりきみのため

指導方法

先づ静かに音盤を聴かせ終つて、最初に出て来た曲は何であるかを思ひ出させる。児童は大抵この曲は、「君が代」であることを知つてゐるから、教師は国歌の尊厳であることをよく説明する。次に中間樂節は何んであるかを尋ねる。これは知らぬ児童が多いと思ふから、一度ピアノでひいて聴かせ、曲名を教へる。

再び音盤を掛けて、拍子をとりながら律動をはつきりと知覺させる。中間樂節の旋律も、真似の出来る程度にラララ等の方法で歌はせる。

二 森の鍛冶屋 ミハエリス作曲

森の中の鍛冶屋を材料とした描寫音樂である。「ウタノホン」上巻第四「エンソク」と關聯する。遠足で見聞した景色等を思ひ出させて之と連絡をとる。

曲の内容は、静かな森の中に一軒の鍛冶屋がある。東の空がだんだん白んで来た。森の中では郭公がカツコウ、カツコウと啼く。同時に種類の小鳥が嬉しさに啼き出す。教會の時計が五時を打つ。朝のお祈りの音樂が聴えて来る。鍛冶屋は、こんなに早くから精を出して愉快

さうに働いて居る。此の曲は、朝のすがすがしい情景と、静かな森、小鳥の歌、生活の歡び、等を現はして居る。

作曲者ミハエリスは、一八三一年ドイツのバレンシュテットに生まれ、一八八七年ハンブルグで死んだ。野外樂の作曲者として有名である。

指導方法

曲の始めは静かな朝の氣分を現はし、次に鍛冶屋の槌の音を打樂器で現はして居る。極めて律動的な曲である。

児童に曲の中の、物を打つやうな音は何か、と尋ねる。児童は、色々の答をするであらう。そこで教師は、これは鍛冶屋の槌の音であると説明し、引きつづいて曲の内容を話してやる。鳥の聲に注意させる。曲の中の教會から聴えて来る音樂は、パイプ・オルガンの演奏である。全曲のリズムをはつきりと知覺させることが大切である。

遠足で見た森を思ひ出させて問答を行ひ、又は既習の「エンソク」の歌を歌はせる。その他、適當の方法で指導する。

三 森の水車 アイレンベルク作曲

森の中の水車を材料とした描寫音樂である。季節を春としよう。よく晴れた春の一日、友達と森に散歩する。小鳥が嬉しさに啼いて居る。森の中に綺麗な小川が流れて居る。段々行くと流れが急になつて、水車の音が聴えて来る。なほも行くと、果して水車だ。カタカタと嬉しさに廻つてゐる。水玉が飛び散つて、きらきらと太陽の光をうけて光つて居る。

作曲者アイレンベルクは、一八四八年ドイツに生まれ、行進曲や舞踏曲を澤山作つて居る。一九二五年に歿した。

指導方法

曲の始めは八分六拍子で、長閑な氣分を現はし、水車の廻つてゐる部分は四分二拍子で輕快に且つ擬音的に取扱つて居る。

曲を静かに聴かせて、水車の廻る音に注意させ、問答の上、曲の内容

を話してやる。

此の曲は、吹奏樂器を極めて巧妙に使用して居るから、よくその部分を聴かせ、その中の主な旋律を記憶させるやうにする。

此の曲も、教材「エンソク」と関係させることが出来る。

律動の變化に注意させることが大切である。

感想を繪に描かせて見るのも面白い。

四 小鳥屋の店 レーク作曲

小鳥屋の店を材料とした描寫音樂である。「ウタノホン」上、第十二の「ハト ポフボ」と連絡する。

町のはづれに一軒の小鳥屋がある。澤山の鳥籠があつて、いろいろの小鳥が思ひ思ひの聲で啼いて居る。二三人の人々が、それを面白さうに聴いてゐる。郭公が啼く、カナリヤが啼く、つづいて山鳥が啼き出す。それが皆擬音で奏される。その聲の間を巧に音樂が進行してゆく。長閑な光景である。

指導方法

音盤を聴かせ、兒童に、これはどういふ有様を現はしたものかを問ふ。兒童の様々の答へを處理して、教師はその内容を話してやる。わかる範圍に於て、いろいろの小鳥の啼聲を判別させる。

曲の途中から行進調になり、律動が極めてはつきりして来るから、此の部分より拍子をとらせて見るのもよい。

五 子守歌 日本古謡

これは、我が國に於て古くから歌はれた民謡で、「ウタノホン」上、第十三「コモリウタ」に連絡する。この音盤に吹込まれたものは、歌詞も昔のとはりになつてゐるから、「ウタノホン」の歌詞とは多少違つて居る處がある。

指導方法

先づ音盤を聴かせ、これは何の曲かと問へば、生徒は全部子守歌と答へるだらう。そこで、教師は既習の「コモリウタ」を歌はせ、どこか違つてゐるところは無いか、と質問して歌詞の異なつてゐる部分を指摘し、

古い時代にはかういふ風に歌つたものであると説明してやる。

伴奏には、種々の樂器が用ひてあるから、此の點も注意してやる。

六 國際急行列車 プーエ作曲

汽車の進行を材料とした描寫音樂である。「ウタノホン」上、第十六の「デンシャゴフコ」と連絡する。題目が國際急行列車となつてゐるけれども、必ずしも此の文字に従はれる必要がない。唯、汽車の進行といふ意味で説明しても差支ない。但し日本の汽車と少し違つた點があるから、外國の汽車であると説明した方が兒童にわかりよいであらう。國際列車といふのは、ヨーロッパ各國の都市を貫く國際的の大列車をいふのである。

その内容は、今、停車場から急行列車が出るところである。大きな機關車が長い長い列車を引つづいてゐる。發車のベルが鳴つたので、大勢の客が急いで乗り込む。車掌がビーと發車の合圖をすると、汽笛がポーと鳴る。機關車がシューフ、シューフと蒸氣をはくと、汽車は元氣よく走り出して段段速度をはやめる。廣廣とした野原を逸散に走る。小さな驛は見向もしない。汽車は次の驛に着いた。そして間もなく又發車のベルが鳴ると、汽笛がポーと答へて、次の驛へと走り出した。

指導方法

此の曲は、汽車の發車するところ、進行中のところ、停車するところを巧に擬音を用ひて描寫してゐるから、此の點を注意して説明する必要がある。

先づ音盤を掛けて、此の音樂は何を現はして居るかを尋ねると、兒童は直に汽車の進行する有様であると答へるであらう。そこで、内容を説明し、發車、進行、停車について委しく聴き取らせる。

電車と比較して其の構造上の相違を話し、若し兒童の中、何等か汽車についての歌を知つてゐるものがあれば、それを歌はせて見るのも面白い。

汽車の進行に合はして手拍子を軽く取らせてもよい。

七 時計屋の店 オルト作曲

時計屋の店を材料とした描寫音樂である。曲の始めは、朝の時計屋を

寫したものである。先づ時計屋の大時計が八時を打つ。店が開かれた。澤山の小僧さん達が集まつて来る。休んで居る時計にねちをかける。澤山の時計が動き出す。みんなお早うといつてゐるやうである。可愛らしい鳩時計の鳩が、ポツポー、ポツポーと啼く。段段お客さんが集まつて忙しくなる。その中、目覺し時計が鳴り出す。又、小僧さんがねちを巻くと、今度は歌時計が綺麗な歌を歌ひ出す。それはスコットランドの「釣鐘草」といふ有名な民謡である。この歌は、「美しきわが子やいづこ」といふ歌詞がついて、文部省音楽取調掛編纂の「小學唱歌集」初編に「うつくしき」といふ標題で載つて居る。

うつくしき

うつくしきわがこやいづこ

うつくしきわが—かみのこは

ゆみとり—てきみのみさき—にいら

みたちてわかれゆきにけり

時間がどんどん立つて夕方になると、又、澤山の時計が一時に鳴り出して店がお終ひになる。

作曲者オルトは、一八五〇年南ドイツに生まれ、後にアメリカに渡りオースと呼ばれて居る。澤山の輕音楽の作曲がある。

指導方法

此の曲は、時計のチクタクといふ律動を中心として作曲したもので、それにあらゆる種類の時計の音を配し、輕快なる描寫音楽に作り上げたものである。

先づ音盤を掛け、いかなることを現はした音楽であるかを尋ね、中に現はれて来る時計の種類について問答し、再び聽かせる。

歌時計に出て来る「美しき」の旋律を十分覺えさせる。教師は、此の旋律を特にピアノでひいて聽かせるのもよい。

八 郭公ワルツ ショナソン作曲

此の曲は、曲中多少の擬音を用ひてゐるが、大體は郭公の啼聲を純器樂的に取り用ひ、それを中心としてワルツに仕上げたものである。ワルツは三拍子の舞踏曲で、輕快で潑刺たる曲趣をもつて居る。曲は三つの部分にわかれ、第一部は輕快な拍子で書かれ、中間はトリオと稱し、緩徐な樂節である。第三部は、再び第一部をくり返して曲を結ぶのである。

此の曲は、第一部、第三部は郭公の啼聲を主題として作曲されてゐるが、第二部(中間樂節)トリオの部分は極めて美しい緩徐な旋律で書かれて居る。ワルツは、我が國では圓舞曲と譯して居る。

指導方法

先づ靜かに音盤を聽かせ、どんな感じがするかを尋ねる。或者は踊つて居るやうだと答へるであらう。そこで、これは圓舞曲といふ舞踏の曲であることを教へる。

更に曲中、再三くり返される郭公の啼聲について回答し、これはカツコウ、カツコウと啼く聲を土臺にして作曲したので、郭公ワルツといふ名がついてゐることを説明する。そして此の曲は三つの部分にわかれてをり、中間樂節はゆつくりした拍子に變り、再び初めの旋律をくり返すことをよく説明する。

中間樂節の旋律は、手風琴ではつきり出て居るから、その旋律をよく記憶せしめるやうに導く。

「ウタノホン」上、「ウミ」「モモトラウ」は、三拍子の曲であるから、それと關聯せしめてよくその拍子を會得せしめる。「ウミ」や「モモトラウ」の節を歌はせて見るのもよからう。

九 おもちやの兵隊さん ゼツセル作曲

原曲は、鍋の兵隊の觀兵式となつて居る。鍋で造つたおもちやの兵隊が、觀兵式を行ふと云ふ筋を行進曲風に作曲したものである。これは、「ウタノホン」上、第十八「兵タイゴツコ」と連絡する。

曲の内容は、夜中に鍋で造つたおもちやの兵隊さんが、おもちや篇から出て観兵式を行ふのである。軍樂隊を先頭に勇ましい行進曲を奏し、それにつづいて歩兵や騎兵や砲兵が、威風堂堂と行進するのである。やがて、夜が明けかけたので、大あわてにあわてて篇の中に入るのである。

指導方法

先づ音盤をかけて静かに聴かせる。この曲は、どういふ處を現はしてゐるかを尋ねる。兒童は直ぐ何物かが歩調をとつて歩いて居るのに氣がつくであらう。それから、教師は曲の内容を説明する。

教師は、観兵式について簡単に話し、又、「ウタノホン」の「兵隊ゴフコ」を思ひおこさせ、その節を歌はせて見る。

この樂曲は、律動が極めてはつきりして居るから、軽く手拍子をとらせるのもよからう。

此の樂曲を聴かせた後、その感想のままを繪に描かせて見るのもよからう。

木琴のそなへつけのある學校なら、それを拍子に合はせて叩かして見てもよい。

3. 基礎練習

初等科第一學年に於ける基礎練習は、極めて初歩のものであるが、今後に於けるすべての基礎をなすもので、非常に重要である。この點に十分留意して、徹底的に指導しなければならない。

聴覺訓練と視唱練習とは、一つの系統によつて練習し、之等の練習が歌唱指導と常に密接な連絡を保つやうに心掛けなければならない。

發聲、發音は、未だ之を獨立して多くの練習を課する程度になつて居ないけれども、無味乾燥にならぬやうに注意し、常に歌唱と連絡を保ちながら、基礎練習本來の使命を徹底させるやうに工夫して行ふことが肝要である。

イ 發聲發音練習

一年に於ては、發聲練習としてとり立てて練習することは困難であるが、歌唱に即して發聲發音を指導するやうに心掛けるべきである。

發聲については叫聲にならぬやうに、呼吸が亂暴にならぬやうに留意して指導すればよい。弱い聲が必ずしもよい聲ではない。自然に兒

童が歌ひ得る位の聲でよいのである。

發音は、最少限度五母音だけは明瞭に發音出来るやうに留意して指導すべきである。

尙、特殊な發音について、大要を次に述べて置く。

ガ行の發音は、後舌背と軟口蓋との破裂音で、聲を伴ふものであるが、大別して硬い有聲破裂音と軟い有聲破裂音に區別することが出来る。前者は、破裂に際し鼻音を伴はず、硬い破裂音を伴ふもので、一般に濁音と稱して居る。後者は、破裂に際して稍々鼻音を伴ふもので、軟い感じのする破裂音である。通例、鼻濁音と云つて居る。濁音は、通例語頭に於て發音される。例へば、ガクタイ(樂隊)の如きである。鼻濁音は語間に表はれるもので、例へば、オンガク(音樂)の如きものである。

促音の發音は、破音の閉鎖時の保持された状態の現はれである。即ち破音の準備から、段段外破(破裂)へ導かれる状態、閉鎖時の間の緊張せる黙止を意味する。國語に於ては、通例「フ」を以て表はして居るが、ガクカウの如く書くものもある。促音の長い短い、その場合によつて違ふのである。

無聲擦音は、サシスセソの始めに表はれ、弱音でその調節點(摩擦)を起す場所は、後續母音によつて異なる。サスセソは、大體に於て前舌背と硬口蓋の間に於て行はれる。シは、中舌背と硬口蓋によつて行はれ、稍々平たい形によつて行はれる。擦音の強さ、長さは、その場合により表現の状態によつて異なる。

鼻音は、マ行、ン等によつて表はされ、ウも鼻音を表はすことがある。原則的には、鼻の音が非常に強く表はれた音(鼻の音)を云ふのである。音の通鼻作用を行ふのに口腔内に於ける調節點を異にし、聲の口に出るのを止める點が異つて居るのである。その調節状態によつて、次のやうに分けることが出来る。

(イ) 兩唇による鼻音 口裂を閉鎖して通鼻を行ふ鼻音。舌背は口蓋に密着せず、口腔の共鳴を伴ふもの「アンマ(按摩)の「ン」の如きは、この鼻音である。

(ロ) 前舌背による鼻音 前舌背と硬口蓋とにより通鼻を行ふ鼻音「アンナイ」(案内)の「ン」は、この鼻音である。

(ハ) 後舌背による鼻音はこの後舌背と硬口蓋とによる通鼻を行ふ

鼻音。グンカ(軍歌)の如きは、この鼻音である。

(二) 閉鎖のない鼻音母音の通鼻化した鼻音で、口腔は母音の形で鼻音がひびく音を云ふ。「ハンオン(半音)の「ン」は、これである。「ウメ」(作)「ウマ(馬)の「ウ」は、兩唇により鼻音となる。

語尾に現はれる「ン」は、その歌ふ状態によつて前者の何れかになる。

□ 聴音練習

「聴音ノ練習ヲ重シク、音ノ高低、強弱、音色、律動、和音等ニ對シ鋭敏ナル聴覺ノ育成ニカムベシ」と云ふ教則の趣旨により、初等科第一學年から聴音練習を行ふ。聴音は、幼時に始めてこそ効果があるのであるから、この程度の學年から聴音練習に努力を拂ひ、鋭敏な聴覺の育成を期待せねばならぬ。

聴覺の訓練は、多岐に亘るが、大別すれば、(1)高低に關するもの(音高の記憶) (2)強弱の判別、(3)音色の認識、(4)律動の知覺、(5)和音の識別となる。

高低に關するもの——音高の記憶

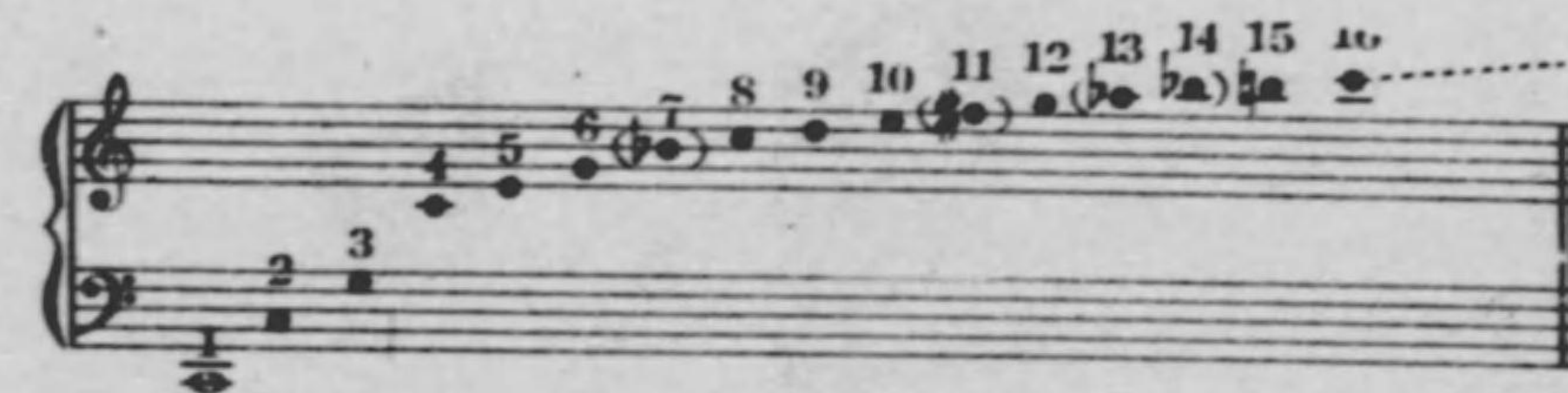
音を覺える練習の第一階段としては、先づ兒童をして音に注意を向けるやうな練習をする。「ものおと」の識別から始めて、兒童にその物音を聴く態度を養成する。「ものおと」は、兒童の生活に即したものが適當で、しかもなるべく美しい音の出るものがよい。一例を挙げると、鐘、太鼓、笛、等は適當で、「ものおと」をよく覺えさせて後、二三の數へた音の中から何の音かを識別させるやうにする。聴かせる「ものおと」は、兒童の最も覺え易い音がよい。次に音が似て居るが、發音物體が異なるものを識別させる。例へば、ブリキの鐘と洗面器の如く近い音のするものがよい。最後は同種のものから出る音の識別にもつて行く。例へば、大きい太鼓と小さい太鼓のやうなものがよい。期間は、約四月中の練習であるが、早くよく出来れば、次に移つてよい。次は樂器(ピアノ又はオルガン)による高い低い音の識別をさせる。この時は、始めは高低の差を大きくし、次第に差を小さくするがよい。音の名を云ふ必要はなく、どちらが高いか、低いか、と云ふことを判断させればよい。大體、五月一杯位練習をする。次に和音の訓練に入るが、和音の訓練が、何故に音高記憶に有利であるかといふことに就いて、その大要を説明して置く。

音高の認識には、相對的及び絶對的の二様式がある。相對的音高認

識とは、基準になる何物かの音に比較して、その高さを判断する事をいひ、絶對的音高認識とは、何物にも比較せずに、その高さを判断する事をいふ。相對的音高感覺だけ所有してあるものは、自分の心の中に考へる音高を發聲しようと思つても、何か基準になる樂音を耳に聴いてからでないと出来ないが、絶對的音高感覺を所有して居るものは、思ふ通りの音高を自由に出す事が出来る。普通にいふところの階名のドレミは、相對的音名であり、音名のイロハは、絶對的の音名である。耳に聴いた音を音名によつて認識するのを絶對音高感覺といふ。

さて音高の認識は、何れにしても音高を記憶する事によつて得られる。故に訓練して、相對的にも、絶對的にも、音高を記憶せしめるやうにしなければならぬ。

音高の記憶に導くには、單音よりは和音を用ひる方がよい。單音は、自然音として次の例の如く、各々部分音(所謂倍音)を含んで居り、結局、それが夫々の樂器の音色となるものであるが、



1を實際に鳴らす基本音とすれば、2……16……は、1の部分音である。カフコした音は、ピアノ其の他の平均律樂器の音とは少しく異なるものを意味する。

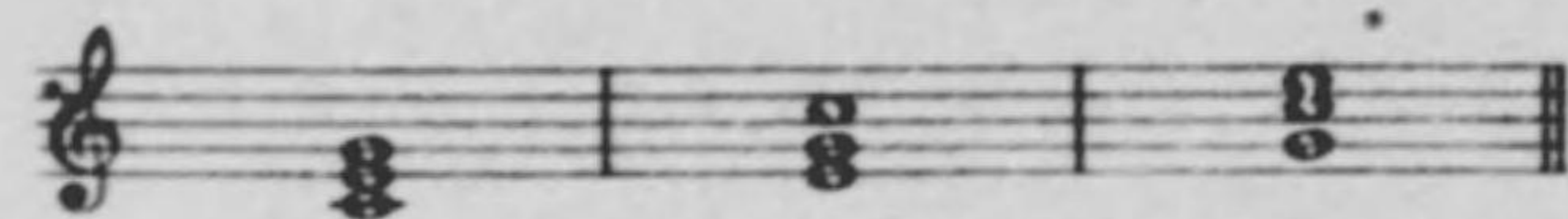
この部分音列は、單にハの音のみでなく、ニの音に於ても、ホの音に於ても、同様な形をなすものである。故に各樂器に於ける各音は、何れも同様な單音色を持つものといふ事が出来る。然るに、和音となつて三箇以上の音を同時に鳴らす時は、各音の部分音が同時に響くが故に、單音と異なつた一種の和音色を構成する事になる。例へば、協和音程から成り立つ一箇の長三和音を採つて、その部分音を調査すれ



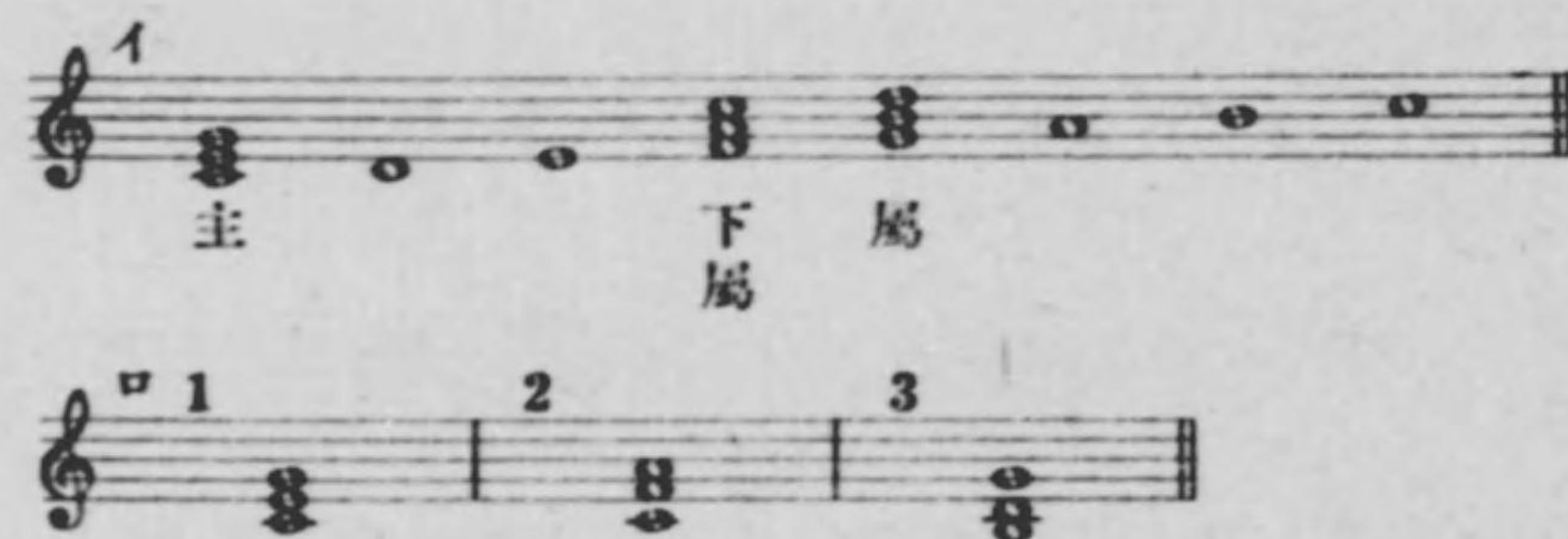
ば、上の如くである。

イはハ音を根音とする長三和音。ロは各音に於ける代表的な部分音を示す。又、ハはその和音に依つて起る部分音を示す。

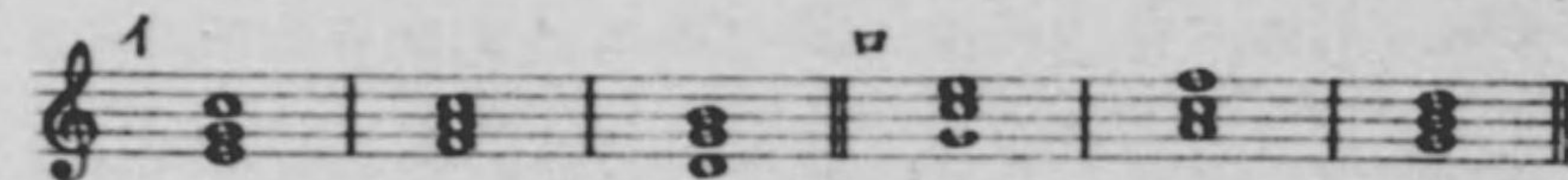
三和音は、三音を低音とした第一轉回三和音の場合、又、五音を低音とした第二轉回三和音の場合と、夫々多少の異なる部分音關係を起すので、音高の記憶に資するための三和音は夫々異なる配置のものを用ひて、その和音の特徴を兒童に認識させる事が必要である。併し、次の如く同一三和音を、夫々三種の配置として用ひるは、同一材料よりなる結果として、和音を特徴附ける事が困難である。そこで、ある



調子の音階として、最も重要な主和音、下屬和音、屬和音の三種の三和音を用ひ、而もその配置を夫々基本位置、第一轉回位置、第二轉回位置として用ひるのである。例へば、次の如くである。



イは、ハ調長音階に於ける主要三和音の位置を示し、ロは、それを各各三種の配置としたものである。即ち1は、根音を低音とする主和音の基本位置、2は、五音を低音とする下屬和音の第二轉回位置、3は、三音を低音とする屬和音の第一轉回位置。これらは、各々配置を次の如く換へる事も出来るが、主和音が最も安定の状態にある前例のものを最初に用ひる方がよい。特に聴音のみならず、和音の合唱などを同時に行ふ場合には、次の例のロは、音域が高すぎる嫌ひがある。



かくして和音の聴音を行ひ、分散和音唱、單音抽出唱、和音合唱から、和音の構成要素である單音の音高を記憶せしめる。

以上のやうにして、記憶した音は、個々の連絡のない音であるが、音相互の關係より成り立つ終止形合唱などを課する事によつて、音楽

の本質に觸れる事になる。即ちハホトなる三和音は、ハ長調に於ては主和音であるけれど、ト長調では下屬和音、ヘ長調では屬和音となる。



和音訓練は、和音を記憶させることから出發する。先づ和音「ハホト」を教へ、これを覚えたら「ハヘイ」を教へる。兩者をピアノ又はオルガンで弾き、これを識別させる。和音の「ハホト」「ハヘイ」と云ふ名を教へるのであるが、始めは和音に成名前——例へば、「ハホト」は赤の音、「ハヘイ」は白の音の如く——をつけ、それによつて遊戯をさせるのも効果がある。例へば、「ハホト」は赤、「ハヘイ」は白と約束をしてピアノでその何れかを弾くと、赤のときは、赤いカードを、白のときは白のカードを拾ふ。その他、動作と結びつけて、「ハホト」は起立、「ハヘイ」は着席と約束して、聴音によつて起立させたり、着席させる等、教師の工夫によつて、種種のことが出来る。「ハホト」「ハヘイ」の次に「ロニト」を教へる。三つの和音は、一學期終り迄よく覚えて居るやうにする。

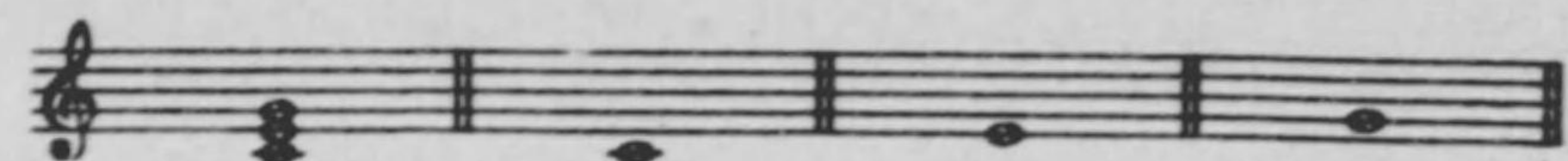
和音の聴覺訓練は、短時間でもくり返し、回数多く練習する方がよい効果が得られる。和音を弾くときは、分散和音的に弾かないで一つの和音として弾く。その音の響に即して記憶させるのである。

九月から、第一學期に學んだ五線譜の音名讀と結合して和音の書取をさせる。ピアノ又はオルガンで和音を弾き、これを書取らせる。この場合は、兒童用書の巻末にあるやうな擴大した五線譜を使用する。又、兒童用書の表紙裏にある大きい五線に、オハジキのやうなもので和音をならべることも興味がある。

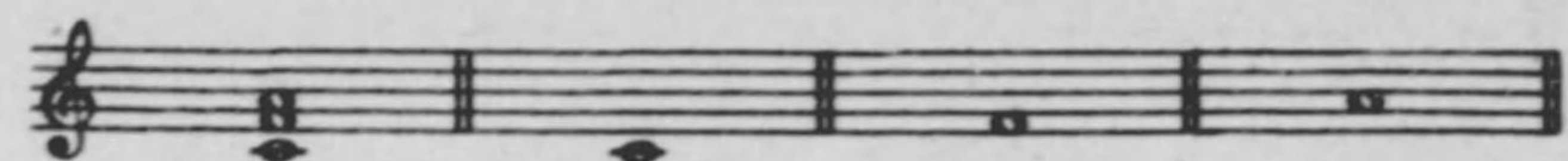
次は、書取りをすることによつて、和音を構成して居る音のはつきりとわかるやうになつたならば、この和音を分散的に弾き、よく聴きとらせ、且これを歌はせるのである。出来るならば、和音「ハホト」「ハヘイ」「ロニト」を分散和音唱をさせるがよい。音域の關係で、困難な場合は別であるが、出来るだけ歌はせると高さや云ふものが判然として来る。兒童用書の巻末にも例があるから、それによつてよく練習する必要がある。始めは、和音をピアノ又はオルガンで弾き、ピアノの助けをかりて分散和音唱をするが、段々と練習するに従つて、和音だ

けを弾いてすぐ分散和音唱をなし、和音を弾かなくても、分散和音唱が出来るやうに導くことが肝要である。

分散和音唱が出来れば、次は和音からある音をぬき出して歌はせる。例へば、和音「ハホト」をピアノで弾き、その中から「ハ音」又は、「ホ音」を歌はせる等である。これが、単音抽出唱である。



ピアノで弾く ハ音を歌ふ ホ音を歌ふ ト音を歌ふ

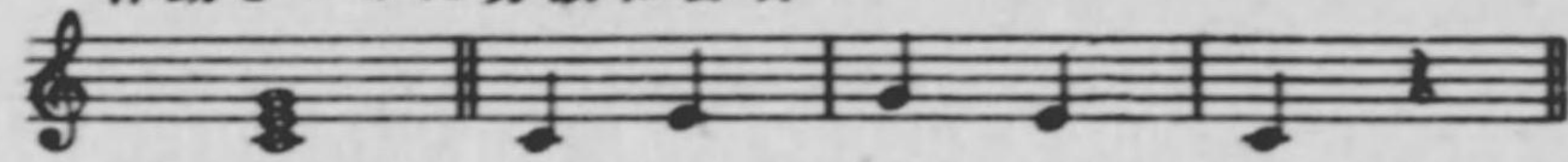


ピアノで弾く ハ音を歌ふ ヘ音を歌ふ イ音を歌ふ

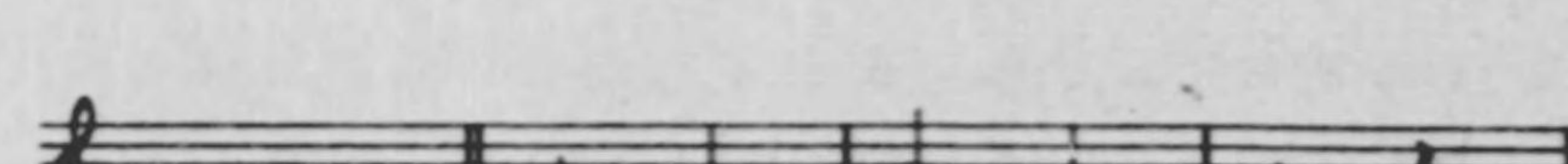
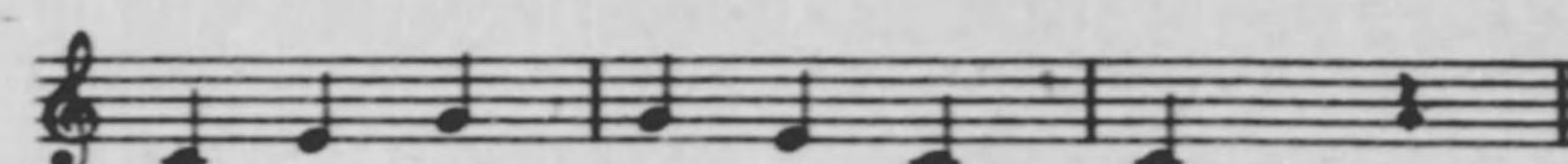
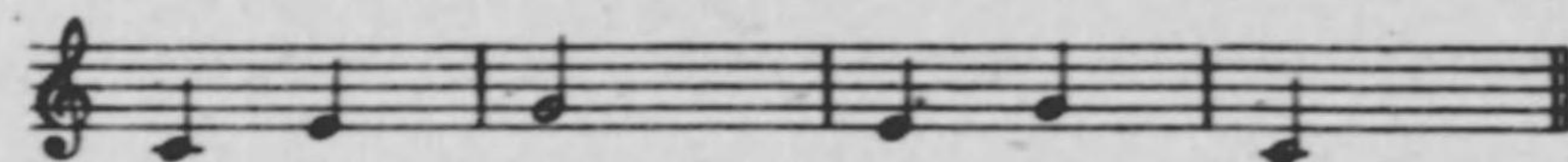
和音を記憶し、和音の分散和音を記憶し、次いで単音抽出唱により、単音の音高記憶に導くのである。

更に分散和音唱には、律動をつけて練習することが必要であるが、その例は、児童用書の巻末にもあるから之を利用する。

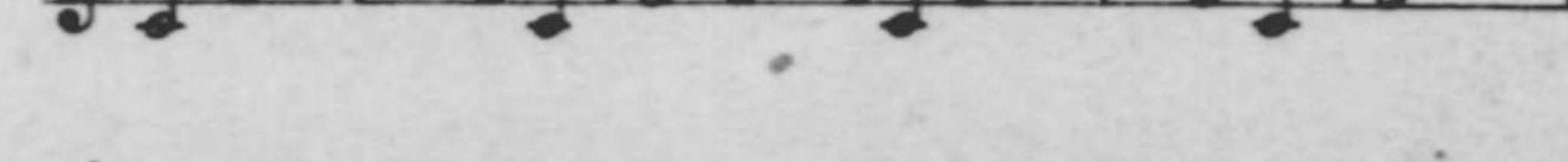
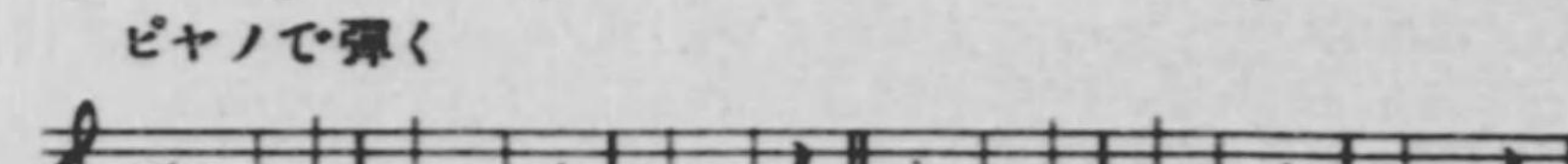
律動をつけた分散和音唱



ピアノで弾く



ピアノで弾く



ピアノで弾く



ピアノで弾く



分散和音唱の発展したものとして、児童用書の巻末にも掲げてあるやうな歌詞をつけた分散和音の練習をする。



以上は、第二学期中の練習である。

第三学期は、和音合唱の練習に入る。組を三組に分けて、各組に和音の単音抽出をさせ、合唱の練習をするのである。



この外に、和音の単音抽出を練習して、単音の音高を記憶させる。例へば、「ハ」の音高を聞きわける練習、又はピアノを弾かないで、「ハ」音が歌へるやうに練習させ、覚えさせるのである。

単音は、或一音にきめて練習する方が効果的である。

以上、述べた聴音練習を系統的にまとめてみると、大要次の如くなる。

- (1) ものおとの識別
 - a. 鐘、太鼓、等の異種類のものおとで、各々の音に特色あるもの。
 - b. 異種類のものおとで音の似て居るもの。
 - c. 同種類のものおとのもの。
- (2) 幹音からなる長調主要三和音の記憶。(樂器はピアノ又はオルガンに依る)
- (3) 分散和音を歌ふ練習 (簡単な律動を加味する)
- (4) 和音を弾き、単音抽出唱の練習
- (5) 和音を弾き、分散和音唱の練習。(稍進んだ律動を加味する)
- (6) 單獨の和音合唱

(ト) 和音の審取

(イ) 單音の音高記憶の練習

ハ 視唱練習

樂譜の視唱は、初等科第一學年の始めから少しづつ系統的に指導することが肝要である。

先づ五線譜の線及び間の音名を大體次のやうな順序によつて授け、第一學期位の間はその音名讀を終るやうにする。



この練習が少し出来るやうになつたならば、第一學期中頃から歌唱指導と結合して、視唱の基礎訓練を行ふ。

第二學期からは聴音練習と結合して、分散和音等の視唱練習を行ふことが出来る。この頃から、二分音符、四分音符、八分音符、等の音符の長さの関係も理會させるやうに導く。



第三學期は、それ等の練習を一層徹底させて、(♪ ♪)といふ律動に進めて行く。

4. 器樂指導

設備のある學校では、器樂の指導をする事が出来る。用ひる樂器は、次の如きものをあげ得る。

ピアノ オルガン 木琴 笛 ハーモニカ 手風琴 太鼓

其の他の打樂器。

工作と連絡をとつて、笛又は一絃琴、太鼓、其の他の打樂器を作る試みも考へられる。又、竹、貝殻、等を用ひて木琴のやうなものを作る事も出来るであらう。高價な樂器を僅か備へるよりも、安價なものでも數多く揃へて、合奏出来る方が望ましい。但し、あまりに安價すぎて、調子の不定のもの不揃のものはよろしくない。

5. 指導の方法

音樂指導を行ふに當つては、兒童の心理、實力、等を顧慮し、更に教材の

形式及び内容等に即應した或程度の形式を具備して、之を進行しなくてはならない。特に本學年間に於ける大體の目標から、各學期に於ける大體の指導目標を立て、更にその學期の指導目標から、各月或は各週の指導目標を確立し、その各週の指導目標を達成する爲に、各時間に於ける指導目標を確立しなければならぬ。即ち一時間一時間の音樂指導が、國民學校全學年を通じての、或は本學年間を通じての音樂指導の目的を達成する爲に、十分有效な一時間であるやうに、實行計畫を豫め十分に練らなければならない。従つて、或程度の指導様式、或は指導過程、等が豫定せられ、それに従つて指導を進行するのである。

勿論、この指導の形式が、單に形式を整へる爲の形式に終始して、兒童の心理や實力と離反し、實質上、音樂指導の効果を擧げることが出来ず、却つて之を阻害するやうなことがあつてはならない。かかる結果に陥らないやうにするには、先づ兒童の心身發育の状態はもとより、音樂上の實力等を十分に調査し、更に教材の形式及び内容を詳細に研究して、最も適切有效な指導の方法を考案することが肝要である。

次に指導の方法に關する重要な點に就いて述べて置く。

イ 歌詞の取扱

歌詞は一般に平易なものが多いが、先づその讀方に注意し、特に發音等については、十分正しく指導しなければならない。之等は、單に音樂指導として必要であるばかりでなく、國民學校教育の本旨に鑑みて極めて重要なことである。

歌唱指導に於ては、歌詞を十分に歌はせ、その間に歌詞の形式と内容を正しく味得させることが肝要である。徒らに語句の説明に時間を費して、歌唱によつて之を味はせることを忘れてはならない。

ロ 範唱及び範奏

巧妙なる範唱と範奏とは、音樂指導の生命である。指導者は、常に技術の修養に志して之を修得練磨しなければならない。しかし、一方に於ては、先づ範唱と範奏とを正確にするといふことが根本的に必要である。巧妙なる範唱及び範奏といふことは、指導者個々の素質にもより、又その技術を修得することは一朝一夕になし得ることでは無い。しかし、正確なる範唱及び範奏をするといふことは指導者の心掛によつて容易になし得ることである。指導者は、教材の形式と内容を十分に研究して、先づ正確なる範唱と範奏とが出来るやうに心掛けなければならない。

ハ 聴くことの訓練

正しく歌ふといふことは、正しく聴くといふことがその基礎である。特に低学年に於ては、歌ふ前に先づ克く聴くといふ訓練を徹底しなければならない。この訓練は、單に歌唱指導の基礎であるばかりでなく、發音及び聽音練習等の基礎であり、更に鑑賞指導の根柢であるから、十分に徹底しなければならない。

ニ 練習

音樂指導の目的は、反復練習することによつて徹底する。常に練習を重ねて、その徹底を期することが肝要である。特に音高記憶、視唱指導とも重大な関係があるから、一旦指導したものは、或は他教科他科目と關聯し、或は兒童の生活と關聯して、屢々之を練習し、練成することに重きを置くべきである。

ホ 指導案

音樂指導をするものは、常に指導案を作製しなければならない。その形式は、教材の性質により、或は指導の場合によつて、一定することは出来ないが、大要、次の如き形式を持つべきである。

藝能科音樂指導案

- (イ) 教材、題目、調子、拍子、音域、等。
- (ロ) 指導要旨、指導の主眼点を明示する。
- (ハ) 教材の研究、歌詞及び樂曲の形式、内容に對する研究。
- (ニ) 指導過程、指導進行の豫定を具體的に書く。
- (ホ) 準備、指導に必要な教具又は掛圖等を記載して置く。

6. 掛圖の取扱

指導用掛圖は、本学年に於ては、大要次の如きものが作製される。

歌唱姿勢圖

視唱及び和音訓練用掛圖

歌唱姿勢圖は、適宜之を利用して、兒童の音樂教室内に於ける姿勢の指導と訓練を徹底するのである。之が單なる教室内の裝飾として掲げるのではなく、實際上、兒童の姿勢指導に役立つやうに利用しなければならない。

視唱指導及び和音訓練は、その階梯に於て統合的に取扱はなければならない部分が多い。設備の十分に出来る學校では、更に多くの教辨物を備へて、之を利用することが肝要であるが、少くとも、この掛圖位の程度のもは備

へて、視唱と和音訓練との徹底に利用することが大切である。

第五 他教科他科目及び行事儀式との關聯

音樂指導の目的を達成する爲には、藝能科音樂独自の特色を十分に發揮すると共に、一方に於ては、他教科及び他科目との關聯を十分に重んじて、兒童の實際生活に適合するやうに心掛けなければならない。

特に本学年に於ては、國民科修身、國語、藝能科圖畫、工作、等とは、直接間接に密接な関係があるから、常に之等との關聯を重んじて、その徹底を期することが肝要である。

更に體鍊科體操とは統合して毎週五時間といふことになつて居るが、一面に於ては、體鍊科體操として独自の使命に立脚し、特別の時間も必要であらうし、藝能科音樂としてもその独自の使命に立脚して、特別の時間を必要とすることは勿論であるけれども、又、一方に於ては兩者を同一時間内に統合的に取扱ふといふことも必要である。或は唱歌遊戯として、或は行進等の團體的行動に音樂を利用する等、體鍊科體操と藝能科音樂との統合的に取扱はれる部面が非常に多いのであるから、この方面に對しては、特に注意しなければならない。

尙、學校に於ける儀式、行事等との關聯を重んじ、音樂を學校に於ける兒童の實際生活と統合して、その徹底を期することが肝要である。

君が代

林 廣守 作曲

♩ = 69

キミガ - ヨ - ハ チヨニ - - ヤチヨニ

♩ = 69

サザレ イシノ イハホト ナリテ

コケノ ム - ス - マ - - デ

君が代

古歌

君が代は

ちよにやちよに

さざれいしの

巖となりて

こけのむすまで

勅語奉答

小山作之助 作曲

p $\text{♩} = 84$

ア ヤニ カシコキ スメラギ ノー

mf

ア ヤニ タフトキ スメラギ ノ

f

ア ヤニ タフトク カシコク モー

f

ク ダシ タマヘリ オホミコト

p $\text{♩} = 100$

コレゾ メデタキ ヒノモト ノー

mp

ク ニノ ヲシヘノ モトキナル

p

コレゾノデクキヒノモトノ

mp *rit.*

ヒトノヲシヘノカガミナル

mf $\bullet = 84$

アヤニカシコキスメラギノ

f

ミコトノママニイソシミテ

ff

アヤニタフトキスメラギノ

ff *molto rit.*

オホミココロニコタヘマツラン

勅語奉答

勝安芳作歌

あやに畏き 天皇の、
あやに尊き 天皇の、
あやに尊く、 畏くも、
下し賜へり、 大勅語。
是ぞめてたき 日の本の
國の教の 基なる。

是ぞめてたき 日の本の
人の教の 鑑なる。
あやに畏き 天皇の
勅語のままに 勤みて、
あやに尊き 天皇の
大御心に 答へまつらん。

一月一日

上 真行 作曲

♩=96 *mf*

ト シノ ハ ジメ ノ タメ シ ト テ
ニ はつ ひ の ひ ーか り き し い で て

♩=96 *mf*

ヲ ハ リ ナ キヨ ノ メ デ タ サ ヲ
よ も に か が や く け さ の そ ら

f

マ ツ タ ケ タ テ テ カ ド ゴ ト ニ
き ー み が み か げ に た じ へ つ つ

イ ハ フ ケ フ コ ソ タ ノ シ ケ レ
あ ふ ぎ み る こ そ た ふ と け れ

仰ぎ見るこそ
君がみかげに
四方に輝く
初日のひかり
今朝のそら
比へつつ
たふとけれ。

いはふ今日こそ
松竹たてて
門ごとに
終なき世の
年のはじめの
例とて

たのしけれ。

第二章

第一章

一月一日

千家尊福 作歌

紀元節

伊藤修二 作曲

♩ = 80

一 *mf* ク モ ニ ソ ビ ユ ル タ カ チ ホ ノ
 二 *mp* う な ば ら な 一 せ る は に や す の
 三 *mf* ア マ ツ ヒ ツ ギ ノ タ カ ミ ク ラ
 四 *f* モ ら に か が や く ひ の と の

♩ = 80

タ カ ネ オ ロ シ ニ ク サ モ キ
 い け の お も ー ヨ ニ ナ ウ ゴ ひ キ
 ヲ ヨ ヅ く ー に た ぐ ひ な

♩ = 80

一 *f* ナ ビ キ フ シ ケ ン オ ホ ミ ヨ フ
mf め び の な シ ケ ン オ ホ ミ ヨ フ
f モ ト キ の サ ダ メ シ た ソ ノ カ ミ
ff く に の サ は し た た て し

* 伴奏部の強弱は、歌詞各節の強弱による。
 - 50 -

ア フ グ ケ フ コ ソ タ ノ シ ケ レ
 あ ふ ぐ け ふ こ そ た の し け れ
 あ ふ ぐ け ふ こ そ た の し け れ

紀元節

高崎正風 作歌

第一章

雲に聳ゆる高千穂の 高根おろしに、 草も、 木も、
 なびきふしけん大御世を 仰ぐ今日こそ樂しけれ。

第二章

海原なせる埴安の 池のおもより猶ひろき、
 めぐみの波に浴みし世を 仰ぐ今日こそ樂しけれ。

第三章

天津ひつぎの高みくら、 千代よろづよに動きなき、
 もとゝ定めしそのかみを 仰ぐ今日こそ樂しけれ。

第四章

空にかがやく日のもとの、 萬の國にたくひなき、
 國のみはしらたてし世を 仰ぐ今日こそ樂しけれ。

天 長 節

奥 好義 作曲

♩ = 96 *mf*

ケ フ ノ ヨ キ ヒ ハ オ ホ キ ミ ノ
け ぶ の よ き ひ は み ひ か り の

♩ = 96 *mf*

ウ マ レ タ マ ヒ シ ヨ キ ヒ ナ リ
さ し で た ま ひ し よ き ひ な り

p *mf*

ヒ カ リ ア マ ネ キ キ ミ ガ ヨ フ
め ぐ ゐ あ ま ね き き ゐ が よ を

ff

イ ハ へ モ ロ ビ ト モ ロ ト モ ニ
い は へ も ろ び と も ろ と も に

今日けふの吉きちき日は、大君おおきみの
うまれたたまひし 吉きちき日ひなり。
今日けふの吉きちき日は、御ごひかりの
さし出でしたまひし 吉きちき日ひなり。
ひかり遍へんき 君きみが代しろを
いはへ、諸人もろびと もろともに。
めぐみ遍へんき 君きみが代しろを
いはへ、諸人もろびと もろともに。

天 長 節

黒川眞頼 作歌

明治節

♩ = 96 *mf*

ア ジ ヤ ノ ヒ ガ シ ヒ イ ズ ル ト コ ロ ヒ
 フ ル キ ア メ ツ チ ト ザ セ ル キ リ ラ オ
 め ぐ む の な む ー は や し ま に あ ま り
 か ゐ む の よ さ き せ る む わ ぎ を ひ ま る め た
 ア キ ー ノ ソ ラ ス ミ キ ク ノ カ タ カ キ ケ
 サ ダ ー メ マ シ ケ ル ミ ノ リ ラ ア ガ メ サ

♩ = 96 *mf*

ジ リ ノ キ ミ ー ノ ア ラ ハ レ マ シ テ
 ホ ー ミ ヒ カ リ ニ ク マ ナ ク ハ ラ マ シ ヒ
 い つ の か ぜ ー は う な ば ら こ え て
 む の き か ゆ く ち か ば の ば し
 フ ー ノ ヨ キ ヒ ヲ ミ ナ コ ト ホ ギ テ
 ト ー シ マ シ ケ ル ミ コ ト ラ マ モ リ

タ シ ヘ ア マ ネ ー ク ミ チ ア キ ラ ケ ク ラ
 と つ く に ぐ に ー の ふ む に も し る く と
 ヨ ヨ ー ギ ノ モ リ ノ ヨ ヨ ト コ シ ヘ ニ ア

サ メ タ マ ヘ ル ミ ヨ タ フ ト
 ど め た ま へ る む な か し こ
 フ ギ マ ツ ラ ン オ ホ ミ カ ド

明治節

一 アジヤの東日出づる處
聖の君の現れまして、
古き天地とぎせる霧を、
大御光に隈なくはらひ、
教あまねく、道明らけく、
治めたまへる御代尊。
二 惠の波は八洲に餘り、
御稜威の風は海原越えて、

神の依させる御業を弘め、
民の榮行く力を展ばし、
外つ國國の史にも、著く
留めたまへる御名畏。
三 秋の空すみ、菊の香高き、
今日のよき日を皆ことほぎて、
定めましける御憲を崇め、
諭しましける詔勅を守り、
代代木の森の代代長へに
仰ぎまつらん、大帝。

儀式唱歌指導上の注意

君 が 代

1. 歌詞の發音に注意し、又、學年程度に應じてその意味の大意を理會させるやうに指導することが大切である。
特に歌詞の一言が、二つ以上の音符に附けられ延ばされて居る箇所には十分注意して指導しなければならない。例へば、「きみが—の」が—と延ばすところが、「があ」といふやうに、残る「あ」の母音に不自然な力が加へられないやうにすることが肝要である。「よ—は」も同様である。「ちよに—の」に—、「む—す—」の「む—及びす—」、更に「ま—で」の「ま—」の如き、何れも注意を要する箇所である。
2. 速度は、四分音符を一分間に69であるから、一回を歌ふのに38秒強、大略40秒を要するわけである。この速度を誤らないやうに歌ふことが大切である。
3. 息つぎの箇所を正しく守ることが肝要である。息つぎ及び發想は、次の如くである。

きみがよは^V ちよにやちよに^V さざれいしの^V
p *mf* *f*
いはほとなりて^V こけの^V むすまで

4. 發音上の注意
「きみが」の「が」は、鼻濁音である。
「いはほ」は、「いわお」と發音する。
5. 初等科第一學年では、聽唱法で指導するのを本體とするが、第二學年以上に於ては、音名視唱に導く。

勅語奉答

1. 學年程度に應じて何の爲に歌ふ唱歌かといふことをよく理會させ、又歌詞の大意を指導することが肝要である。
2. 歌詞が相當に長いから、よく注意して正しく暗記させることが大切である。特に、「かしこき」「たふとき」「たふとく」「かしこく」等を混同しないやうに徹底的に指導しなければならない。

3. 樂曲は、十六小節のもの三箇所を重ねた形であるが、最初の十六小節と終りの十六小節とは、大體同じ旋律で、結局、次のやうな構造である。

甲(十六小節)+乙(十六小節)+甲(十六小節)

- 甲の部分は、四分音符を一分間に84、乙の部分は100であつて、少し速くなつて居る。この部分の速度の變化に十分注意しなければならない。
- 乙の部分の終りは、次の部分に入る豫備として少しrit.する必要がある。又、最後の二小節は、molto rit.としてあるから、可成り速度をゆるめて大きく終止するのである。この部分の歌ひ方に注意しなければならない。
4. 全體の發想記號に注意して、之を正しく表現するやうに歌ふことが肝要である。又二分音符及び附點二分音符を正しく保つやうに歌ふ。
5. 歌詞發音上の注意
「すめらぎ」の「ぎ」は、鼻濁音である。
「かがみ」の「が」も、鼻濁音である。
「たふとき」は、「と—とき」と發音する。
「おほみこころが」おほみこころ」と濁音にならないやうに注意する。
6. 歌詞も、樂曲も、可成り程度が高いから、初等科一、二學年あたりでは、比較的軽く指導して置き、三學年以上で本格的に指導する。
7. 初等科第四學年迄は聽唱法で指導し、第五學年以上では樂譜の視唱も行ふ。

一月一日

1. 二調長音階の第四度、「ト」の音が可成り多く現はれて居るが、この音程は低下する傾向があるから注意して指導する。
2. 速度は、四分音符を一分間に96である。遅くならないやうに注意して、明朗に歌ふことが大切である。
3. 歌詞發音上の注意
第一章
「かどごとに」の「ご」は、鼻濁音である。
「いはふ」は、「いお—」と發音する。
第二章
「かがやく」の「が」、「きみが」の「が」、及び「みかげ」の「げ」は、何れも鼻濁音である。
「あふぎ」は、「あおぎ」であつて、「お—ぎ」ではない。又、「ぎ」は、鼻濁音である。

4. この歌詞は、少しむづかしいが、楽曲は比較的容易であるから、初等科第一學年から歌はせてよい。

5. 初等科第四學年以下では聴唱法で指導し、第五學年以上では樂譜も視唱させる。

紀元節

1. 歌詞が第四章迄あるが、之を正しく暗記させるやうに指導することが肝要である。しかし、初等科第一學年からその全部を取扱ふことが困難であるならば、第一學年では第一章だけを正しく暗記させ、第二學年では第一章と第二章だけ、第三學年以上で第四章迄全部暗記させるやうにしてもよい。

2. 速度は、四分音符を一分間に80である。少し落ちついて美しく歌ふことが肝要である。又、第一章と第三章とは、*mf*を中心とする強さ、第二章は少し弱めに、第四章は最も力強くといふやうな心持で歌ふ。

3. 歌詞發音上の注意

第一章

「あふぐは、」
「あおぐ」であつて、「おーぐ」では無い。又、「ぐ」は、鼻濁音である。(第二、第三、第四章の場合も同じ)

第二章

「めぐみのぐは、」鼻濁音。

第三章

「ひつぎのぎは、」鼻濁音。「うごきのごも、」鼻濁音。

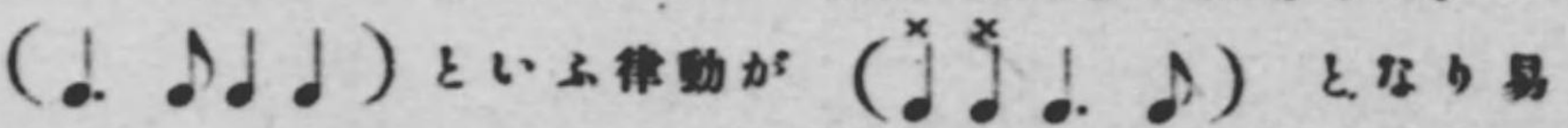
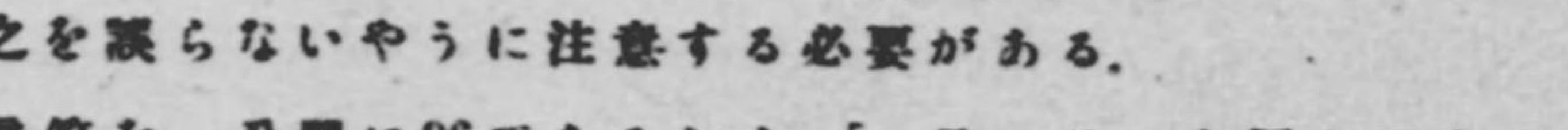
第四章

「かがやくのがは、」鼻濁音。「たぐひのぐも、」鼻濁音。

4. 初等科第一學年では、聴唱法によつて指導し、第三學年以上では、樂譜の視唱に導く。

天長節

1. 四拍子の第一拍にある強拍をはつきりと表現することが肝要である。又、二調長音階の第四度「ト」の音に注意して、この音高を正しく指導する。

2. 第十一小節の  といふ律動が  となり易い傾向があるから、之を誤らないやうに注意する必要がある。

3. 速度は、四分音符を一分間に96であるから、「一月一日」と同じであつて、遅くならないやうに注意する。

4. 歌詞發音上の注意

「おほきみが、」
「おほきみ」と濁音にならないやうに注意する。

「うまれのうは、」
「む」とならないやうに注意する。

「よきひのひをはつきりと發音する。

「きみがよのがは、」鼻濁音である。「めぐみのぐも、」鼻濁音。

5. 初等科第一學年では、入學の當初であるから、軽く指導して置き、第二學年以上では本格的に指導する。

6. 初等科第四學年迄は、聴唱法で指導し、第五學年以上では、樂譜の視唱も行ふ。

明治節

1. 歌詞が六句三章、全體十八句といふ可成り長いものであり、且つ楽曲の程度も稍、高いから、初等科第一、二學年では歌詞、第一章だけを歌はせ、第三學年以上は、三章全部を暗記させることを理想として指導する。

2. 歌詞の大意を學年の程度に應じて理會させることが必要である。

3. 息つぎが不正確になり易いから十分注意して指導しなければならない。

4. 速度は、四分音符を一分間に96である。遅くならないやうに注意して指導しなければならない。

5. 歌詞發音上の注意

第一章

「ひがしのがは、」鼻濁音である。「おほみひかりは、」
「おーみひかり」と「ひをはつきり發音する。「たふとは、」
「とーと」と發音する。

第二章

「めぐみのぐは、」鼻濁音。「みいつのつが濁音となり、
「みいづ」とならないやうに注意する。「くにぐにのぐは、」鼻濁音。

第三章

「ことほぎては、」
「ことおぎて」でなく「ほ」をはつきり發音し、又、「ぎは、」鼻濁音である。

「あがめのがは、」鼻濁音。「よよぎの、」
「ぎ」も、鼻濁音。

「あふぎは、」
「あおぎ」であつて、「おーぎ」では無い。「ぎは、」鼻濁音である。

6. 初等科第四學年迄は、聴唱法で指導し、第五學年以上では、樂譜の視唱を行つてもよい。この場合、「嬰ト音」といふ派生音の出現に注意して指導する。

ガクカウ

活潑に ♩ = 112

— ミン ナデ ベン キヤウ ウレシイ ナ
ニ ゲン キデ タイ サウ イチ ニツ サン

コクミン ガク カウ イチネン セイ
コクミン ガク カウ イチネン セイ

一 ガクカウ

一 ミンナデ ベンキヤウ

ウレシイナ、

コクミンガクカウ

イチネンセイ。

二 ゲンキデ タイサウ

イチ、ニツ、サン、

コクミンガクカウ

イチネンセイ。

第一節

學校は、楽しく學ぶところであることが歌つてある。

「ミンナデ」は、今迄の個々の家庭生活から、新たに學校といふ團體生活に入つたことを意識させる。

第二節

學校は又、元氣に運動をして身體を丈夫にするところであることが歌つてある。

一 ガクカウ

指導要旨

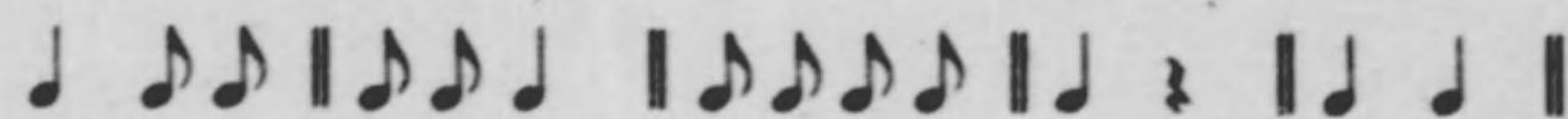
国民学校へ新入学の喜びを歌はせ、学校生活の楽しさを感じさせる。

楽曲の解説

一点ホ音から二点ニ音迄の音域から成るハ調長音階の楽曲である。

八小節から成る一部分形式であるが、前楽節も、後楽節も、共に尻上りに旋律を高調させて、国民学校新入学の喜びを表現して居る。

四分の二拍子、律動は、次のやうなものが組み合はされて居る。

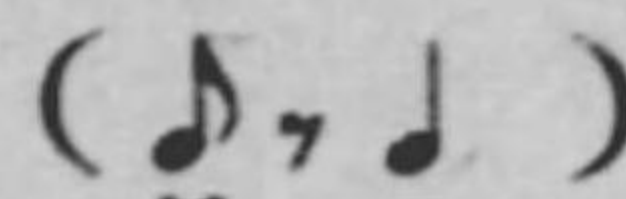


指導要項

1. 本学年最初の必修教材である。
2. 二拍子の拍子訓練を行ふ。即ち各小節の第一拍に強拍のあることを十分意識させて歌はせるやうに指導する。
3. 四分音符二箇の一拍が、不平均にならないやうに注意しなければならない。
4. 常に練習を重ねて行き、第一学期の中頃以後は、五線譜の音名讀がある程度迄出来るやうになつたならば、次第に音名でも歌へるやうにして、音高記憶と音名視唱との基礎的訓練を導入する。
5. 速度は、四分音符一分間に112であるから、大體に於て速歩の速度、114に近い。軍隊の速歩行進の速度を思ひ出させながら歌はせるやうにし、正しい速度で指導しなければならない。

歌ひ方

1. 發音をはきはきと、朗かに、活潑に歌はせることが大切である。
2. 第一節、「ミンナデ」の「ミン」は、四分音符を二等分する氣持で發音する。「ウレシイ」の「シイ」は、「イ」を殊更にひびかせず、「シー」と平に歌ふ。
3. 「コクミン」の「ミン」も、やはり、四分音符を大體二等分するやうな氣持で歌ふ。
「ガクカウ」は、「ガツコー」と發音する。「ガツ」の促音は、「コー」の前



に八分休符を置くやうな氣持で、はつきり歌ふ。ガツコー

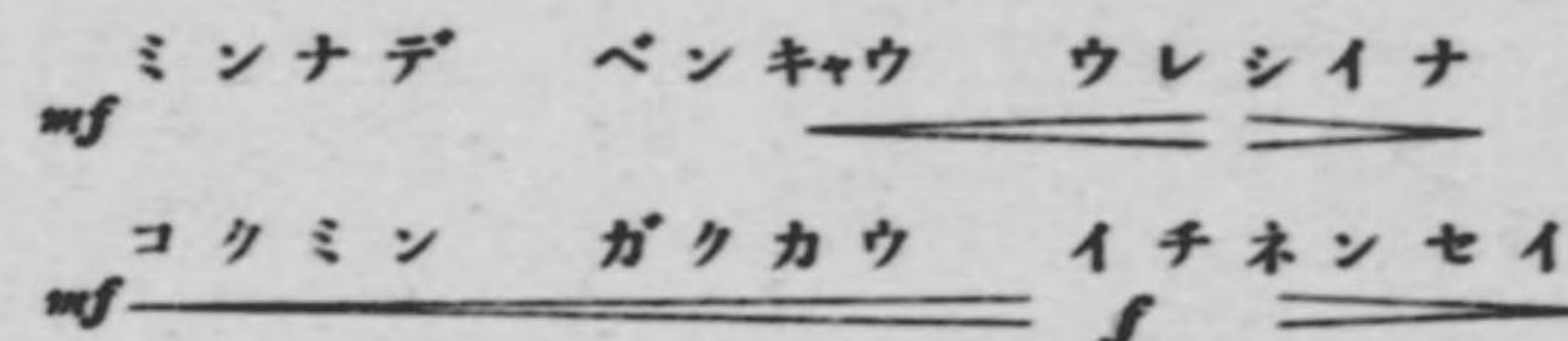
5. 「イチネンセイ」の「ネン」も、やはり四分音符を大體二等分するやうな氣持で發音する。「セイ」は、「イ」を殊更にひびかせずに、軽く「セー」と發音するのである。

6. 歌詞第二節、「ゲンキデ」の「ゲン」は、やはり、四分音符を二等分するやうな氣持で發音する。「ゲ」は、濁音である。

7. 「タイサウ」は、「タイソー」と發音する。

8. 「イチニフサン」の「ニフ」といふ促音も、その次にある「サン」といふ音の前に、八分休符を置くやうな氣持で、はつきりと歌ふ。「サン」も、やはり、四分音符を二等分するやうな氣持で、軽く「ン」を發音する。

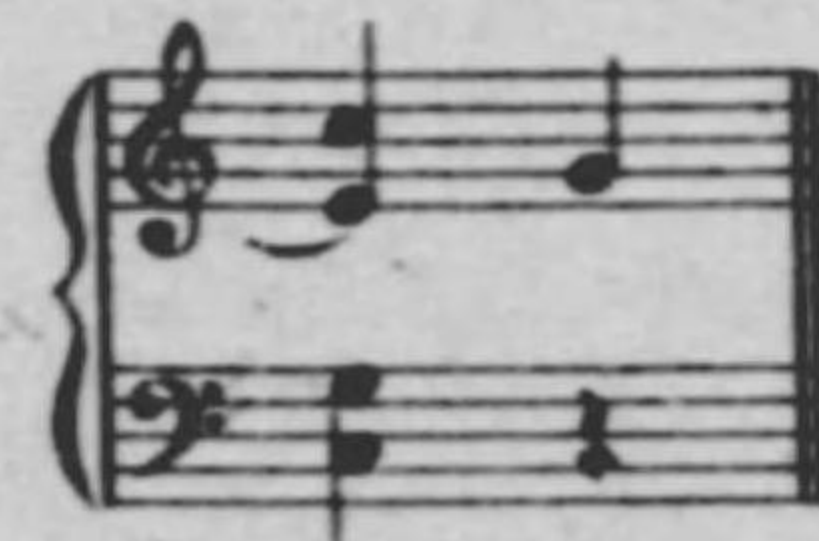
9. 強ひて極端な發想をつけさせる必要はないが、旋律の進行上、又は歌詞の言葉や氣持の上から、自然に次のやうな發想がつく。



10. 各段の終りにある四分休符の前の四分音符に、不自然な力を入れたり、或は重苦しく延ばす傾向があるから、特に注意して歌はせることが大切である。

伴奏法

1. 四小節の前奏が終つて歌唱部に入るところで、若し兒童が、「ト音」をとりにくい場合には、前奏部の最後の小節を次のやうに奏してもよい。



2. 伴奏の場合、拍子の強拍と弱拍や、全體の發想を正しく表現して、兒童が之を自然に感得するやうに指導することが肝要である。

3. 歌唱部第三小節及び第七小節の第二拍に當る右手の音は、特に明確に演奏する。

ヒノマル

廣々と ♩ = 104

一 ア ヲ
ニ ア サ

ゾ ラ タ カ フ ヒ ノ マ ル
ヒ ノ ノ ボ ル イ キ ホ ヒ

ア ゲ テ ア ア ウ ツ ク シ
ミ セ テ ア ア イ サ マ シ

イ ニ ホ ン ノ ハ タ ハ
イ ニ ホ ン ノ ハ タ ハ

ニ
アサヒノ ノボル
イキホヒ ミセテ、
アア、イサマシイ、
ニホンノ バタハ。

一
アラゾラ タカク
ヒノマル アゲテ、
アア、ウツクシイ、
ニホンノ ハタハ。

ニ
ヒノマル

第一節
青空にひるがへる日の丸の旗の美しさを歌ったのである。
新訂尋常小學唱歌中に掲載されてあるものを一部分改訂してある。

第二節
日の丸の旗は、旭日昇天の姿を現はした勇ましい旗であることを歌ったので、この中には國運の隆昌を暗示してある。
新訂尋常小學唱歌中に掲載されて居るものを一部分改訂してある。
「イキホヒミセテ」は、勢を現はしての意である。

二 ヒノマル

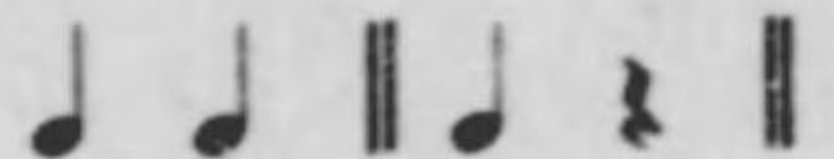
指導要旨

国旗の美しさと勇ましさを歌はせ、之を讃仰する心を喚起して 國民的情操を昂揚する。

楽曲の解説

一点へ音から二点へ音迄の音域からなるへ調長音階の楽曲であるが、旋律には、その第四度「變ロ音」が用ひられて居ない。

全曲の構成は、四分の二拍子で、十六小節から成る一部分形式であるが、内容は四分の四拍子的(八小節の)のものである。しかし、四分の二拍子にしてある爲に律動が力強くなつて居る。

律動は、 といふ極めて単純な形式である。

指導要項

1. 新訂尋常小學唱歌に掲載されて居る歌詞が先入主となつて居る場合には、特にその改訂されてある部分に注意して指導しなければならない。
2. 第一學期第二番目の必修教材である。
3. 四分の二拍子に於ける極めて基本的な単純な律動形式を正しく體得させ表現させることに重きを置いて指導する。
4. 之も反復練習するうちに、五線譜の音名讀が成程度迄出来るやうになつたならば、その應用練習的にこの歌曲を音名で歌はせ、音高記憶と音名唱法との基礎訓練に導入することが肝要である。
5. 速度は、四分音符一分間に104である。稍々落ち着いて、はきはきと、明朗に歌ふ。

歌ひ方

1. 全體として、明朗な氣持を表現することが大切である。發音をはきはきと、亂暴にならないやうにしなければならない。
2. 各小節の第一拍に強拍のあることを會得させるやうに導いて、二拍子の拍子訓練を行ふことが肝要である。
3. 歌詞第一節「ヒノマルアゲテ」の「ゲ」は、軽く鼻濁音に歌ふ。

4. 「アアウツクシイ」「アアイサマシイ」の「アア」は、「アー」と一音になるやうに發音して、「アア」と次の「ア」が角立たないやうに歌ふ。

5. 「ウツクシイ」及び「アイサマシイ」の「イ」は、強ひて強くひびかせないで、むしろ「シー」と歌ふやうにする。

6. 「ニホンノハタハ」の「ハ」は、「ワ」と發音する。

7. 歌詞第二節「イキホヒ」は、「イキオイ」と發音する。特に「イキヨイ」といふやうに訛らないやうに注意する。

8. 強ひて發想をつける必要はないが、旋律の構造上、及び歌詞の言葉や意味の上から、極めて自然に子供らしい發想が表現されるやうに指導することが大切である。

大體、發想は次の如くなる。

アヲゾラ タカク ヒノマル アゲテ
mf
アア ウツクシイ ニホンノ ハタハ
f *mf*

即ち歌詞第一節も、第二節も、「アアウツクシイ」「アアイサマシイ」の「アア」のところが高調部となり、之を中心として全體の曲想がつけられるやうに歌ふのである。

伴奏法

1. 一拍一拍と進行する伴奏の音をはつきりと奏して、全曲の廣廣とした曲想を助けることが肝要である。
2. 伴奏の間に二拍子の強拍と弱拍とを可成りはつきりと表現し、兒童が自然に之を感得して、その歌唱の上に拍子の強拍、弱拍が正しく表現されるやうに誘導する。
3. 特に歌唱部の第九小節及び第十三小節の第一拍の音には、可成りはつきりとアクセントを與へて、兒童の歌唱を助けるやうにしなければならない。
4. 右手の音は、音域が一般に廣く、指を廣く開いて演奏する技巧を必要とする部分が多い。この場合には、特にその中にふくまれる二箇又は三箇の音が、平均にひびくやうに注意して演奏する。

ユフヤケ コヤケ

きれいに ♩ = 104

一 カアカア カラス オヤマヘ カヘル アノソラ
ニモウスグ ゴハン オウチヘ カヘラウ サヨナラ

アカイ ユフヤケ コヤケ アシタテンキニ ナアレ
シマセウ ユフヤケ コヤケ アシタテンキニ ナアレ

三 ユフヤケ コヤケ

一 カアカア カラス、
オヤマヘ カヘル、
アノ ソラ アカイ。
ユフヤケ コヤケ、
アシタ テンキニ ナアレ。

二 モウスグ ゴハン、

オウチヘ、カヘラウ、
サヨナラシマセウ。
ユフヤケ コヤケ、
アシタ テンキニ ナアレ。

第一節

夕焼の空を望み、明日への希望を歌つたのである。
ユフヤケコヤケ アシタテンキニナアレは、我が國古来の童謡で、ヨミカタ(一)二十頁に掲載されてある。ナアレは、ナレといふ語を語調を整へる爲にナを延ばしたのである。

第二節

夕刻お友達と別れて家へ歸る時の氣持を歌つたのである。

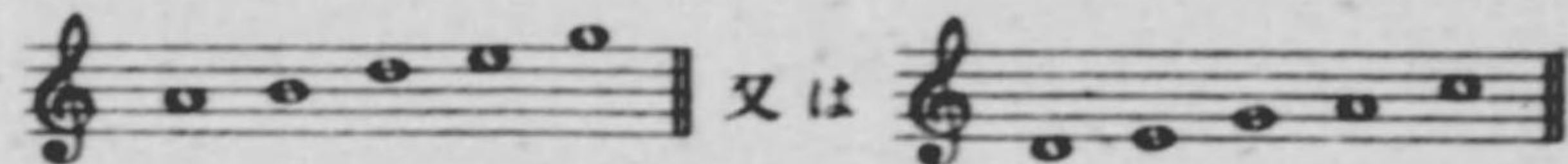
三 ユフヤケ コヤケ

指導要旨

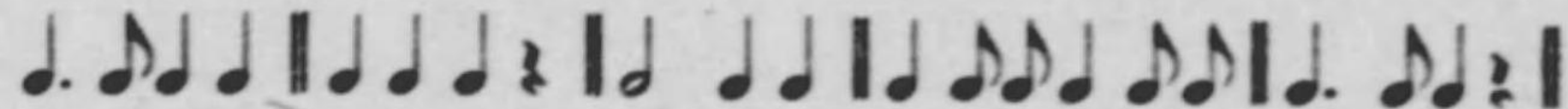
我が國古來の童謡をふくむこの歌曲を歌はせて、素直な童心を培ひ、國民的情操を醇化する。

樂曲の解説

一點ホ音から二點ニ音迄の音域で、イ音を主音とする我が國固有の陽音階である。陽音階の構造は、次の如くである。



全曲は、十小節から成るが、前の六小節と後の四小節との二部分に分けられる。後の四小節は、我が國古來の童謡の旋律をそのまま採つたのである。四分の四拍子。律動は、次のやうな形式である。



指導要項

1. 始めて現はれる我が國固有の陽音階から成る童謡風の旋律である。この旋律を十分に味はせることに重きを置いて指導する。
2. 四分の四拍子の歌曲も始めてである。前に指導した四分の二拍子の拍子訓練と連絡して、四拍子の拍子訓練を行ふ。即ち第一拍到強拍があり、第三拍到中強拍、第二拍と第四拍とが弱拍であることを會得するやうに指導する。
3. 律動の形式も、この程度の兒童にとつては可成り複雑なものであるから、この律動の變化を正しく體得させ、表現させることに重きを置いて指導しなければならない。
4. 速度は、四分音符を一分間に104であるから、前の「ヒノマル」と同様である。但し、やや落ちついて歌ふ。
5. 練習を重ね、五線譜の音名讀が出来るやうになつたならば、音名でも歌はせる。

歌ひ方

1. 我々日本人の心の中に深く刻まれて、一種のなつかしきを持つ童謡である。この味を十分に表現することが肝要である。
2. 歌詞第一節「カアカア」は、「カーカー」と歌ふ。「カラス」の「カ」に軽いアクセントをつけて、夕焼の空を飛んで行く鳥に、實際呼びかけるやうな氣持で歌はせる。
3. 第六小節にある「ロ音」から「ホ音」へ入る完全五度の音程が曖昧になり易いから注意して指導する。
4. 「オヤマヘカヘル」は、「オヤマエカヘル」と、「ユフヤケコヤケ」の「ユフ」は、「ユー」と延ばして歌ふ。
5. 「アシタ」の「シ」は、無聲擦音(シの子音だけ残つて、イは脱落する)として歌ふ。
6. 「ナアレ」は、「ナーレ」と延ばすやうに歌ふのである。
7. 歌詞第二節「モウスグヨハン」の「グ」は、鼻濁音であるが、「ヨハン」の「ゴ」は、普通の濁音であつて、鼻濁音ではない。
8. 「オウチヘカヘラウ」の「ヘ」は「エ」に、「ラウ」は軽く「ロー」と歌ふやうにする。
9. 「チヨナラシマセウ」の「セウ」も、軽く「ショー」と延ばすやうに歌ふ。
10. 強ひて發想をつけさせる必要は無いが、全曲の中で中央にあたる第五第六小節「アノソラアカイ」「チヨナラシマセウ」の部分を中心とし、之を中心として發想をつける。その前後はあかるい *mf* の強さでよい。

伴奏法

1. 全體を圓滑に、右手も左手もなるべくその旋律をはつきりと現はすやうに演奏することが肝要である。
2. 特に右手の旋律を美しく表現するやうに注意しなければならない。
3. 美しい旋律の流れを、伴奏を聴きながら兒童が自然に感得し、歌唱の上にも現はれるやうに指導することが肝要である。

エンソク

元氣よく ♩=104

一 ソ ラ ハ ア フゾラ ヨ イ テン キ
ニ カ ゼ ハ ソ ヨカゼ ヨ イ キ モ チ

ミ ー ナ ゲ ン キ ニ ア ル キ マ セウ
ミ ー ナ ゲ ン キ ニ ウ タ ヒ マ セウ

ケ フ ハ エ ン ソ ク ウ レ シ イ ナ
ケ フ ハ エ ン ソ ク タ ノ シ イ ナ

ニ カゼハ ソヨカゼ、
ヨイ キモチ、
ミンナ ゲンキニ
ウタヒマセウ、
ケフハ エンソク
タノシイナ。

一 ソラハ アラゾラ、
ヨイ テンキ、
ミンナ ゲンキニ
アルキマセウ、
ケフハ エンソク
ウレシイナ。

四 エンソク

第二節
遠足に於ける楽しい氣持を歌つたものである。

第一節
遠足に於ける元氣な様子を歌つたものである。

四 エンソク

指導要旨

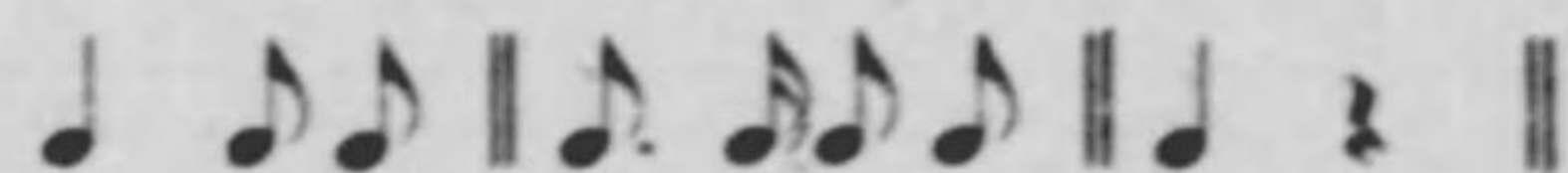
遠足の楽しさを歌はせて、明朗快活の精神を養ふ。

楽曲の解説

一点ニ音から二点ニ音迄の音域から成るト調長音階の楽曲であるが、その第七度「嬰へ音」を旋律には用ひて居ない。

前半八小節と後半四小節との二部分に分けられる。

四分の二拍子。律動は次のやうな形式が組み合はされて居る。



指導要項

1. 附点八分音符と十六分音符から成る律動の形式は、始めて現はれるのであるから、特に注意して之を指導しなければならない。

2. 全曲にふくまれて居る律動の形式を正しく體得させ、歩調に合わせて歌ふやうな練習もして、實際に校外教授や、遠足の際に歌はせ、團體訓練の上にも之を利用するやうに指導する。

3. 速度は、四分音符を一分間に104であるから、兒童が實際に行進する場合の歩速よりは遅い。之は、教室に於て歌唱する場合の速度であつて、實際行進に際して歌はせるやうな時には、適宜兒童の歩速に合はせて、あまり亂暴にならないやう、寧ろ輕快に歌はせることが肝要である。

4. (♪♪)といふ一拍と(♪♪)といふ一拍とがはつきり區別されるやうに(♪♪)の(♪)には、少しはつきりとしたアクセントを與へて、之を鮮明に表現することが大切である。

5. 五線譜の音名讀が出来るやうになつた後には音名でも歌ふ練習をする。

歌ひ方

1. 明朗快活に、歩きながら輕く歌ふやうな氣持を表現することが大切である。

2. 歌詞第一節及び第二節にある「ゲンキ」の「ゲ」は、鼻濁音でない、はつきりと濁音に歌ふ。

3. 「テンキ」「ゲンキ」の「ン」は、後舌背と軟口蓋との閉鎖によつて發音する。
4. 「ミンナ及びエンソク」の「ン」は、中舌背の閉鎖による發音である。
5. 歌唱部、第五小節「ミンナ」の「ミー」の部分の「トイ」といふ音程をはつきりと掴ませるやうに注意する。
6. 「アルキマセウ」「ウタヒマセウ」の「セウ」は、「ショー」と輕く歌ふやうにする。之が重苦しく發音されたり、又は長く延ばし過ぎたりすると、全曲の曲想が重苦しくなるから注意しなければならない。
7. 「ウレシイナ」「タノシイナ」の「シイ」は、「イ」を殊更に發音しないで、寧ろ「シーナ」と滑かに歌つた方がよい。
8. 「ウレシイナ」「タノシイナ」の「ナ」も、特に不自然な力を加へたり、又は重苦しく「ナー」と延ばして歌つたりすると、曲想が非常に重苦しくなるから、比較的輕く發音するやうに注意する。
9. 前奏を可成り強く、之を受けて始めは *mf* の強さで歌ひ出すが、第二段の第二小節、「ゲンキニ」のところを *f* に歌ひ、第三段は始めから *f* の氣持で歌ふ。

大體、次のやうな發想が自然に體得されるやうに導く。

<i>mf</i>	ソラハ	アヲゾラ	ヨイテンキ
<i>mf</i>	ミンナ	ゲンキニ	アルキマセウ
<i>f</i>	ケフハ	エンソク	ウレシイナ

伴奏法

1. 右手は、單音で旋律が出て居るから、之をはつきりと奏することが大切である。
2. 左手はスタッカートが付けられてあるから、特に輕快に奏して、歩調に合はせるやうな氣持を表現する。
3. 各小節の始めの音にはつきりとアクセントを與へて、律動を鮮明に表現するやうに演奏することが肝要である。
4. 前奏部は、可成り強く、はつきりと奏する。

カクレンボ

活潑に ♩ = 112

カクレンボスルモノヨットイデ

ジャンケンボンヨアヒコデショ

五 カクレンボ

カクレンボスルモノ
 ヨットイデ。
 ジャンケンボンヨ、
 アヒコデシヨ。
 モウイイカイ。
 マアダヨ。
 マウイイカイ。
 マアダヨ。
 モウイイカイ。
 モウイイカイ。

我が國古來、各地で歌はれて居る童謡
 では、「ヨミカタ」(一) 三十三頁に描
 載されて居るものをそのまゝ採用した
 のである。
 「ヨットイデ」は、「ヨツテオイデ」の
 童謡的な表現法である。
 「マアダヨ」も、「マダダヨ」の「マ」
 を延ばした童謡的な表現法である。

五 カクレンボ

指導要旨

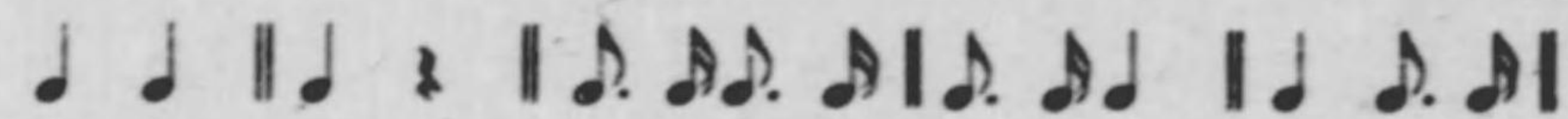
我が國古來の童謡を歌はせて、純真な童心を培ひ、國民的情操の醇化に資する。

楽曲の解説

一點ニ音から一點ニ音迄の音域で、イ音を主音とする我が國固有の陽音階から成る旋律である。

四小節を一単位として三つの異なつた、そして獨立した童謡を聯曲としたものである。

四分の二拍子、律動は、次のやうな形式のものが組み合はされてある。



指導要項

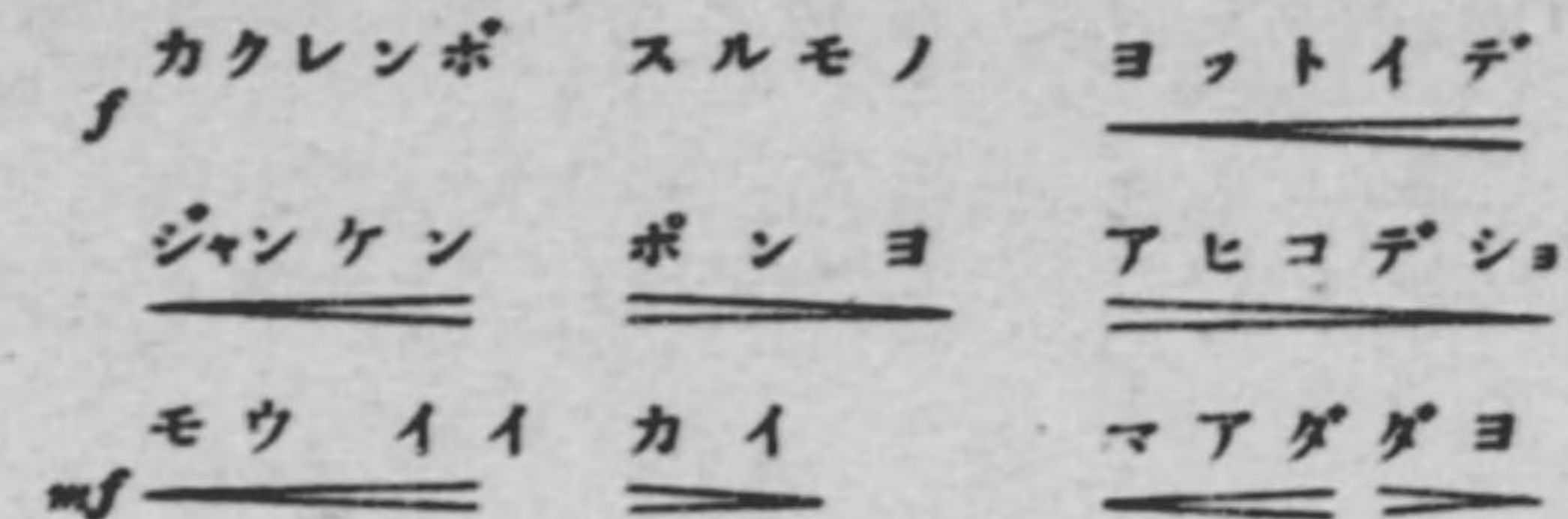
1. 「ガクカウ」及び「ヒノマル」等に於ける (♪♪) 又は (♪♪♪♪) といふ律動形式が發展して、「エンソク」に於ては、(♪♪♪♪) といふ形になつた。更に、この「カクレンボ」に於ては、それが (♪♪♪♪) といふ形式に發展したと見る事が出来る。この律動の形式を十分に體得させ、之を表現する要領を會得させることを主眼として指導する。

2. 「エンソク」に於ては、(♪♪♪♪) といふ形式を本體とし、第二拍に於ては、八分音符二箇の平坦な一拍が用ひられて居たが、この歌曲に於ては、(♪♪♪♪) といふ形式を本體として居るので、第一拍に於ても、第二拍に於ても、附點八分音符を鮮明に表現しなければならない。ややもすると、「エンソク」に於ける (♪♪♪♪) といふやうな形式と混同し易いから、十分に注意して指導しなければならない。しかし、その爲に二拍子本來の強拍と弱拍の表現が不明確になつてはならない。やはり、第一拍の強拍を常に正しく表現させるやうに指導することが肝要である。

3. 五線譜の音名讀が或程度迄出来るやうになつたならば、この歌曲も音名で歌はせて見て、音名讀の應用練習とし、一面に於ては、音高記憶と音名視唱法との基礎訓練に導入すべきである。

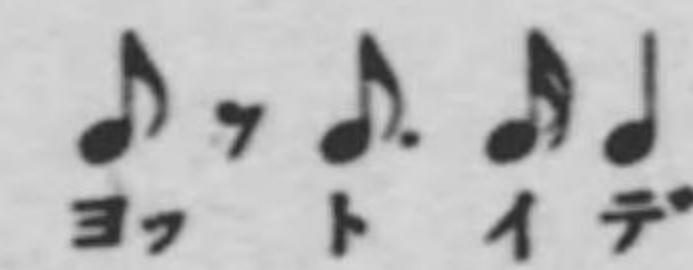
4. 實際の遊戯に合はせて歌ふやうな練習も大切である。その間に、自然

に表現される畫想で歌ふのであるが、大體、次のやうな氣持で歌ふ。



歌ひ方

1. 無邪氣に、はきはきと歌ふ。
2. 「カクレンボ」の「レン」は、判然と分け難いところに妙味がある。極めて自然に可愛らしく發音する。
3. 「ヨットイデ」は、「ヨツテオイデ」ではない。はつきりと「ヨットイデ」と發音し、促音を明瞭に歌ふ。大體、次のやうな形となる。



4. 「ジャンケンボンヨ」は、跳ね上るやうな氣持で、元氣に歌ふ。
5. 「アヒコデシヨ」は、自然に少し弱目に歌ふ。
6. 「モウイイカイ」は、「モーイーカイ」となる。「カイ」は、「カ」を強めに「イ」を軽く歌ふ。
7. 「モウイイヨ」も、「モーイーヨ」と歌ふ。
8. 「モウイイカイ」「マアダダヨ」は、兒童を二組に分けて、互に呼び合ふ如くに練習し、實際にその氣持を表現する。

伴奏法

1. 前奏の第二小節以降は、右手はスタッフカートをはつきりと奏し、左手はレガートに奏する。
2. 常に右手の旋律をはつきりとひいて、左手の音を軽くひくやうにすることが肝要である。
3. 左手のスタッフカートの部分に注意してひく。
4. 附點八分音符にアクセントをはつきり與へて、律動を明示するやうにひくことが大切である。

ホタル コイ

きれいに ♩ = 132

ホウ

ホウ ホタル コイ チビ サナ チャウ チン

サゲテコイ ホシノ カズホド トン デコ

イ ホウ ホウ ホタル コイ

六 ホタル コイ

ホウ ホウ
ホタル コイ。

小サナ チャウチン
サゲテ コイ。

ホシノ カズホド
トンデ コイ。

ホウ ホウ
ホタル コイ。

我が國各地にある古來の童謡を整理したもので、「ヨミカタ」(二)三十八頁に掲載されて居るものを、作曲の都合上、一部分修正してある。

ウ ミ

ゆったりと、そして懐れるやうな気持ちで ♩ = 88

mf legato

一 ウ ミ ハ ヒロイ ナ オホキ イ ナ
 二 ク ミ ハ オホナ ミ アライ ナ ミ
 三 ウ ミ ニ オフネ ヲ ウカバ シ テ

f mf

ツ キ ガ ノボル シ ヒガシ ヅ ム
 ユ レ テ ドコマ デ ツヅク ヤ ラ
 イ ツ テ ミタイ ナ ヨソノ ク ニ

七 ウ ミ

一 ウミハ ヒロイナ、

大キイナ、

ツキガ ノボルシ、

日ガ シヅム。

ニ ウミハ 大ナミ、

アライ ナミ、

ユレテ ドコマデ

ツヅクヤラ。

三 ウミニ オフネヲ

ウカバシテ、

イツテ ミタイナ、

ヨソノ クニ。

「ヨミカタ」(二)六十三頁にも海の韻文があるが、この歌詞とは全然表現の形式が違ふ。

第一節 海の廣大無邊であることを歌つたものである。

「ツキガノボルシ、日ガシヅム」は、「日モノボルシ、ツキモシヅム」といつてもよいところであるが、詩的表現の都合上、このやうにしたものである。

第二節 波濤萬里の彼方に又他の國のあることを歌つたものである。

第三節 海國日本國民の憧憬と意氣とを歌つたものである。

七 ウ ミ

指導要旨

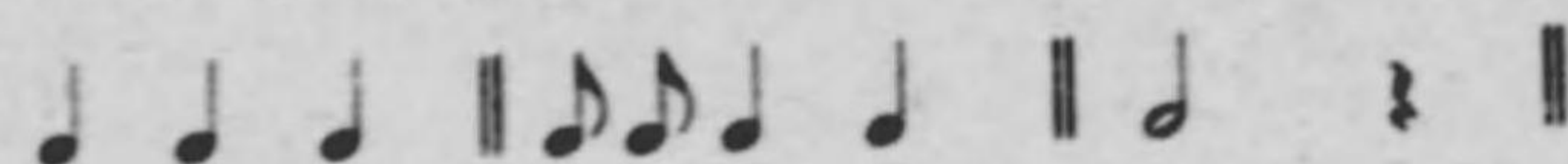
廣大無邊の海を歌はせて、海事思想を鼓吹し、明朗瀟灑の精神を養ふ。

楽曲の解説

一点ニ音から二點ニ音迄の音域で、ト調長音階であるが、旋律の中にはその第七度、「嬰へ音」を用ひて居ない。

八小節から成る一部分形式で、第五小節に全曲の頂點がある。

四分の三拍子。律動は、次のやうな形式のものが組み合はされてある。

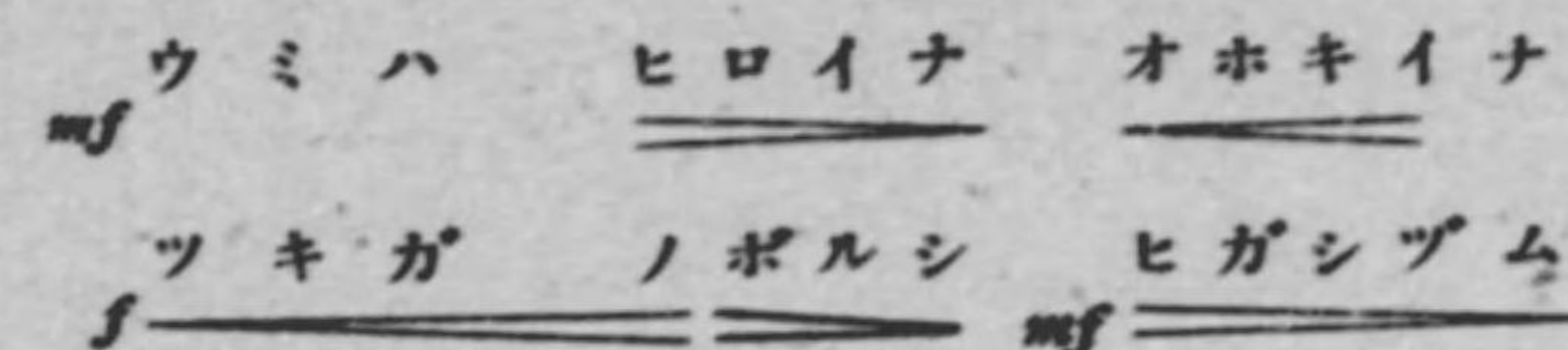


指導要項

1. 本學年、第一學期に於ける第三番目の必修教材である。
2. 拍子としては、既に四分の二拍子と、四分の四拍子とが現はれて居るが、こゝに始めて四分の三拍子が現はれたのである。この三拍子の拍子訓練を行ふことに重點を置いて指導する。
3. 三拍子は、第一拍に強拍があり、第二拍と第三拍とが弱拍であるが、この強拍をはつきりと表現することが肝要である。特に第一拍が八分音符二箇に分割されて居る場合には、この強拍が不明確になり易いから注意して指導しなければならない。
4. 今迄の歌曲は、すべて音階の主和音の主音か、又は第五音から旋律が起つて居たのであるが、この「ウミ」は、「ト調長音階」の主和音の第三音即ち「ロ音」から起つて居る。この第三音から起る旋律は、主音又は第五音から起るものよりも概して技巧的であるから、この點にも十分注意して指導しなければならない。
5. 歌詞が第三節迄あるものも、今學年の教材としては始めてである。この點にも注意して指導することが肝要である。
6. 小節の始めにある八分音符二箇が、つまつて短くなつたり、又は不平均になつたりする傾向があるから、比較的幅廣く、はつきりと歌ふことが肝要である。
7. 歌唱部、第七小節の第二拍と第三拍とに、「ニ→イ」といふ完全五度の進

行がある。このところにも十分注意して指導しなければならない。又、その「イ」の音が弱拍であるに係はらず、急に上行する爲に、不自然に力が入られる傾向があるから、軽く美しく歌ふやうに注意する。

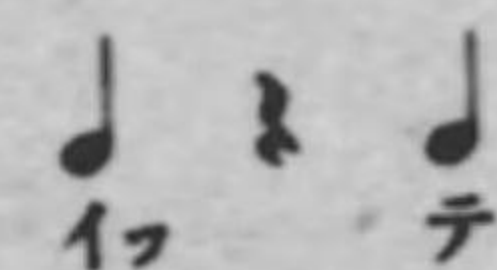
8. 第五小節に全曲の頂點があるから、之を中心として極めて自然に發想をつける。その大體の形式は、次の如くである。



9. この教材が取扱はれる頃は、「一点ニ」から「二點ニ」迄の間の五線譜の音名讀が出来てあらうから、練習の際、この歌曲も音名で歌へるやうにし、音高記憶と音名視唱法との基礎訓練をすることが肝要である。

歌ひ方

1. いきいきと、あかるく歌ふことが肝要である。
2. 歌詞第一節「ツキガ」「ヒガ」の「ガ」は、鼻濁音である。
3. 歌詞第三節の「オホキイナ」の「フ」の發音が不明瞭になつて、「オウキナ」といふやうになり易いから注意して歌はせる。
4. 「イツナ」の促音は、次のやうに、その間に休符を挟む心持で、はつきりと歌ふことが肝要である。



5. 速度は、四分音符一分間に88であるから、やや落ち着いて歌ふ。

伴奏法

1. 右手の旋律をはつきりと生かすやうに、全體をレガートに演奏することが肝要である。
2. 三拍子の強拍の所在をはつきり意識して演奏し、之が自然に兒童に感得され、且その歌唱の上に表現されるやうに心掛ける。

オウマ

あどけなく ♩ = 112 .

一 オウマノ オヤコハ ナカヨシ
 二 オウマノ カアサン ヤサシイ

コヨシ イツデモ イツシヨニ ポックリポックリ アルク
 カアサン コウマヲ ミナガラ ポックリポックリ アルク

ハ オウマ

一 オウマノ オヤコハ、
 ナカヨシ コヨシ。
 イツデモ イツシヨニ、
 ポックリ ポックリ
 アルク。

二 オウマノ カアサン、
 ヤサシイ カアサン。
 コウマヲ 見ナガラ、
 ポックリ ポックリ
 アルク。

第一節
 馬の親子の愛を歌つたものである。
 「ナカヨシコヨシ」は、「ナカヨシ」と
 同じで、幼児語である。

第二節
 馬の母親のやさしさを歌つたもので
 ある。

八 オ ウ マ

指導要旨

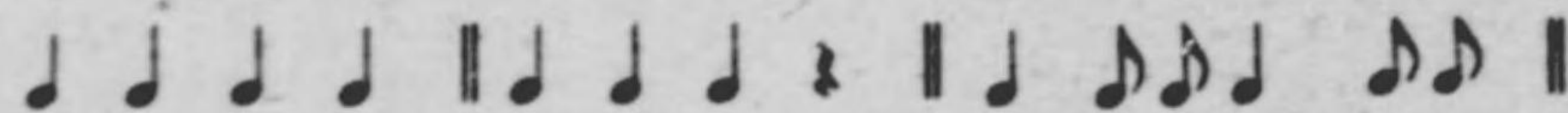
親馬と仔馬との愛情を歌ったこの歌曲を歌はせて、快活純美の情を養ひ、動物愛護の精神を喚起する。

楽曲の解説

一点ハ音から二點ハ音迄の音域から成るハ調長音階の楽曲である。

八小節の一部分形式である。

四分の四拍子。律動は、次のやうな形式のものを組み合はせて居る。

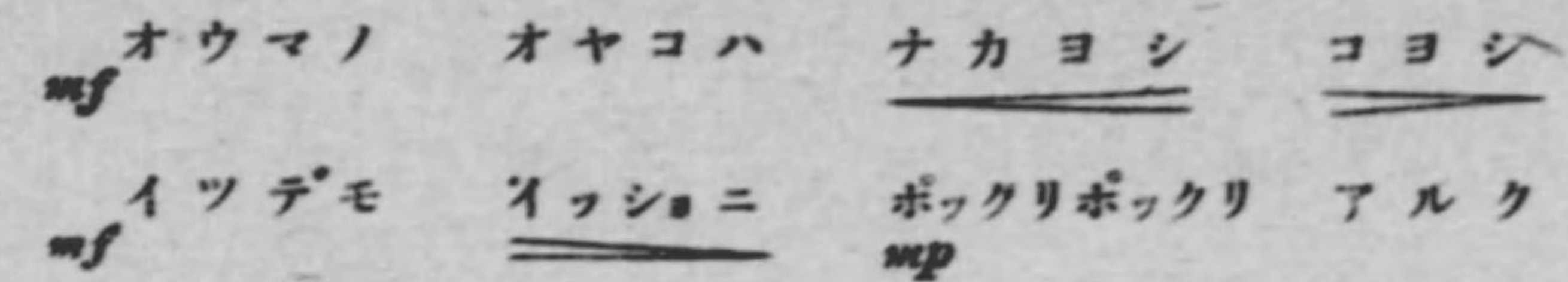


この律動形式は、四拍子の一小節を二分の二拍子の一小節とも考へられる單純な形式である。

指導要項

1. 四分音符の並列を本體とするこの楽曲の律動形式は、馬が「ボクボク」と蹄の音をさせながら歩いて行く様子を聯想させる眞實さがある。
2. 親馬と仔馬との愛らしい様子、愛情のこまやかな有様を考へながら歌ふことによつて、自然に動物に対する愛情を喚起し、又、一面には母性愛の尊さをも暗示することが出来るであらう。このやうな點に相當注意して指導することが肝要である。
3. 全曲始と四分音符を並列した律動形式であるから、四分音符といふものの律動的單位を十分に理解させるやうに徹底的に指導することが出来る。
4. この楽曲の最後は、一点ハ音になつてゐる。この程度の兒童には、この音域は場合によると歌はせにくいかも知れないが、強ひて強く發聲させず、出せる程度に軽く歌はせて置けばよい。
5. 第二學期の必修教材である。旋律は、音程としても、律動としても、極めて平易なものであるから、このやうな程度のもは、必ず全國の兒童が之を正しく體得し得ることを理想として指導することが肝要である。
6. 速度は、四分音符一分間に112であるから、大體に於て軍隊の速歩行進114の速度に近い。頭の中に軍隊の速歩行進を描きながら歌はせることによつて、正しい速度に導くことが出来る。

7. 發想は強ひてつけるのではなく、旋律の進行や、歌詞の上から自然に生まれて來る程度でよいが、大體、次のやうな形になる。

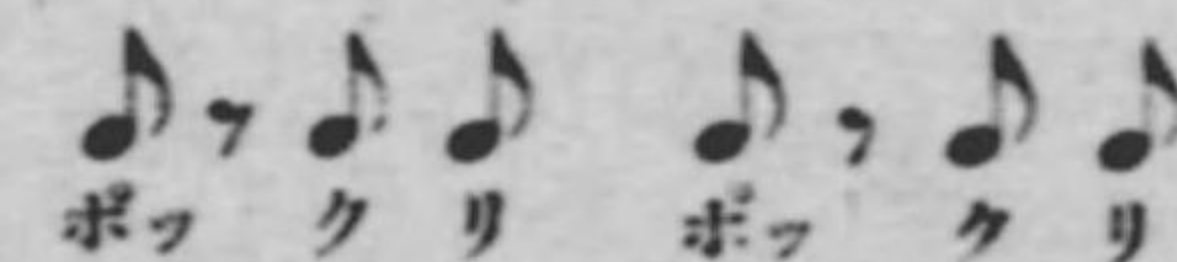


歌ひ方

1. あどけなく、愛情をこめて歌ふ。
2. 「オウマ」は、「オンマ」に近く、「ウ」は、兩唇鼻音である。
3. 四拍子の強拍の所在を明確に意識して指導することが肝要であるが、特に第一拍のアクセントは、鮮明に表現する方がよい。
4. 歌詞第一節、「イツテモ イッショニ ボックリボックリ アルク」の「イツ」の「ツ」のところに四分休符を置くやうなつもりで、促音をはつきり發音する。



5. 「ボックリ ボックリ」のところは、「ボ」に鮮明なアクセントを與へて、はつきり歌ふことが肝要である。「ボックリ」の促音も、「ク」の前に八分休符を置くやうな氣持ではつきりと歌ふ。



6. 歌詞第二節、「ヤサシイ」は、「イ」を殊更に發音せず、「ヤサシー」とレガートに歌ふ。又、「カーサン」も「ア」を殊更に發音しないで、「カーサン」とレガートに歌ふことが肝要である。

7. 「コウマ」の「ウ」も、「オウマ」の「ウ」と同じく、「コンマ」に近い發音とする。「ミナガラ」の「ガ」は、鼻濁音である。

伴奏法

1. 右手の單純な音の進行とスタッカートとは、馬の蹄の音を思はせるものである。スタッカートを軽くはつきり表現して奏する。
2. 右手の旋律は、レガートに奏するやうに注意する。

オ月サマ

美し $\bullet = 88$
mf

mf legato

一 デ タ デ タ ツ キ ガ
二 カ ク レ タ ク モ ニ
三 マ タ デ タ ツ キ ガ

f

マ - ル イ マ - ル イ マ ン マ ル イ
ク - ロ イ ク - ロ イ マ ッ ク ロ イ
マ - ル イ マ - ル イ マ ン マ ル イ

ボ - ン ノ ヤウ ナ ツ キ ガ
ス - ミ ノ ヤウ ナ ク モ ニ
ボ - ン ノ ヤウ ナ ツ キ ガ

mf

九 オ月サマ

一 出タ、出タ、月ガ。
マルイ マルイ マンマルイ
ボンノ ヤウナ 月ガ。

二 カクレタ、クモニ。
クロイ クロイ マツクロイ
スミノ ヤウナ クモニ。

三 マタ 出タ、月ガ。
マルイ マルイ マンマルイ
ボンノ ヤウナ 月ガ。

新訂尋常小學唱歌に掲載され
てあるものをそのまま採用し
たのである。

九 月 月 サ マ

指導要旨

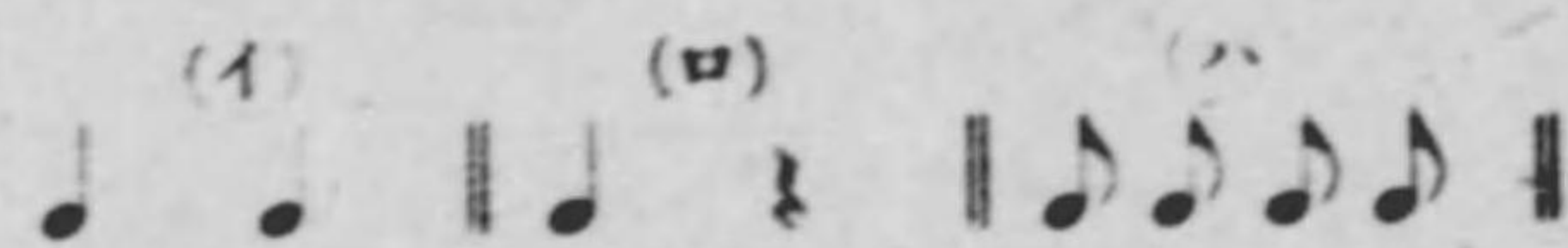
美しい月の歌を歌はせて、快活純美の情を養ふ。

楽曲の解説

一点へ音から二点へ音迄の音域から成るへ調長音階の旋律であるが、その第四度「變ロ音」を旋律に用ひて居ない。

全曲を一連の一部分形式と見ることも出来るが、又、始めの四小節と之に続く八小節とを二つに分けて、二部分形式と考へることも出来る。

四分の二拍子、律動は、次のやうな形式のものが組み合はされてある。



この形のうちで(イ)及び(ロ)は、二拍子に於ける最も基本的な形式であるが、先づ始めの四小節はこの形式で起り、次の四小節に於ては、この基本的な律動形式が一步發展した形であるところの(ハ)の形式に進み、最後の四小節に於ては、その第一小節だけが(ハ)の形式で、その次は、又最初の四小節と同じ形式になつて居る。この律動形式の組み合はせを見ると、次のやうな排列と見ることが出来る。

A + B + A

即ち律動形式の排列に統一と變化の配合の妙味を現はして居る楽曲である。

指導要項

1. 歌詞は、新訂尋常小學唱歌に掲載されてあるものをそのまま採用したのであるが、楽曲に於ては、一部分に修正されたところがある。若し、前の楽曲が先入主となつて居るやうな場合には、特にこの點に留意して指導しなければならない。

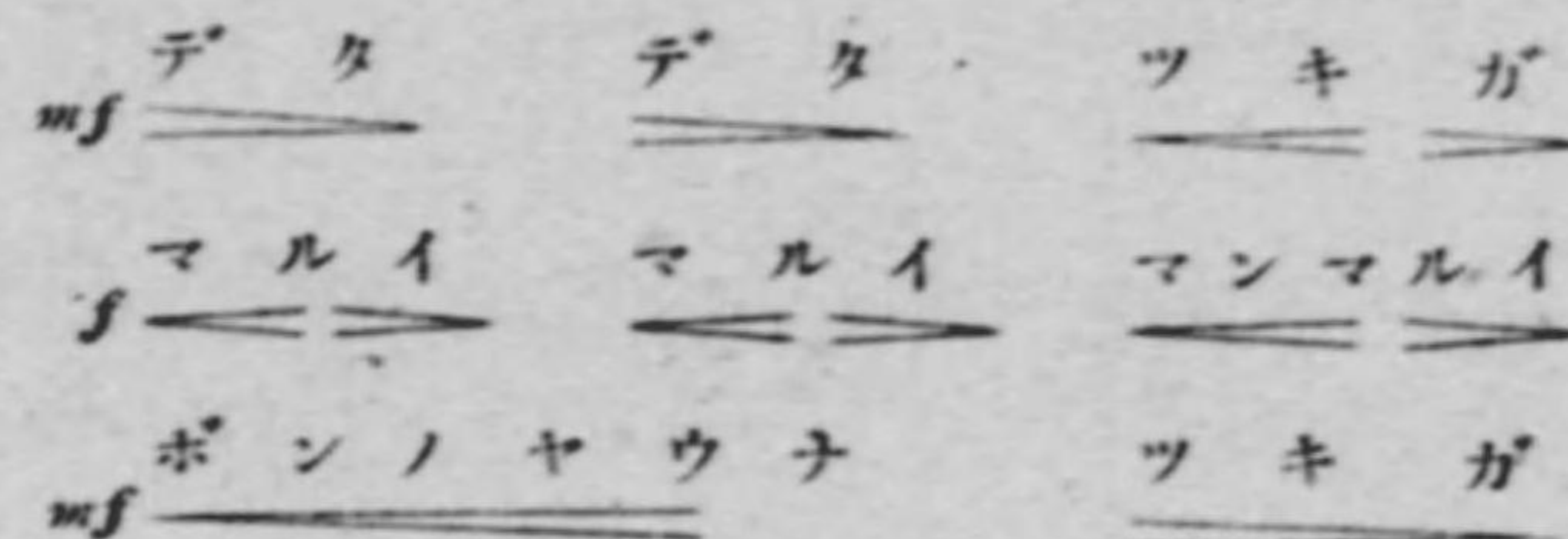
2. この教材は、第二學期に於ける第二番目の必修教材である。特に月の美しい季節に關聯して徹底的に指導する。

3. 律動形式の組み合はせに於て、變化と統一との妙味を現はして居るから、之を十分に正しく體得させることが肝要である。一面からいふと、この楽曲は、四分音符、八分音符及び四分休符のみから成るので、律動の基礎練

習と關係づけて、その訓練を徹底するのに便利な教材である。

4. 第二學期になれば、五線譜の音名讀も相當徹底して來るであらうし、特にこの歌曲は、使はれて居る音の數も少く、音域も狭いし、且、律動も簡單であるから、音名で歌はせる練習教材として適切である。

5. 發想は、自然に次のやうな形式に導かれるやうに指導することが肝要である。



歌ひ方

1. 比較的落ちついて、美しくほがらかに歌ふ。
2. 歌詞第一節、「デタデタ」のところは、「デ」に可成りはつきりとしたアクセントを興へて、月を發見した喜びを表現しなければならない。「ツキガ」の「ガ」は、鼻調音である。
3. 第二段の「マルイマルイマンマルイ」は、「マルイ」「マルイ」「マンマルイ」と漸進的に力を加へて行つて、言葉の實感を表現することが大切である。
4. 「ヤウナ」は、「ヨーナ」である。
5. 第二節の歌詞は、第一節に比べて、心の暗さを表はす自然の現はれとして、全體を心持弱めにする方がよい。
6. 第三節の歌詞は、第二節と對比的に、一層あかるくなつた喜びを表現するやうに歌ふことが肝要である。

伴奏法

1. 發想を比較的嚴格に表現して演奏し、兒童がそれを聴きながら自然に會得するやうに指導する。
2. 右手と左手の音をよく調和させて、全體をレガートに奏するやうに、特に注意しなければならない。
3. 二拍子の強拍の所在をはつきりと意識して、之を表現するやうに奏することが大切である。

モモタラウ

お伽の世界を思いつつ ♩ = 96

ハ タ ハ ヒ ノ マ ル ア ヲ イ ウ ミ
ニ フ ネ ニ キ ル ノ ハ モ モ タ ラ ウ
三 ハ マ デ ミ オ ク ル オ チ イ サ ン

チ ヒ サ ナ フ ネ ガ ホ ヲ ア ゲ タ
オ ト モ ハ サ ル ト イ ヌ ト キ ジ
ナ ラ ン デ テ ヲ フ ル オ バ ア サ ン

十 モモタラウ

一 ハタハ 日ノマル

青イ 海

小サナ フネガ

ホ ヲ アゲタ。

二 フネニ キルノハ

モモタラウ、

オトモハ サルト

犬ト キジ。

三 ハマデ 見オクル

オチイサン、

ナランデ 手ヲ フル

オバアサン。

第一節

桃太郎が鬼が島へ向つて舟出する有様を歌つたものである。

第二節

桃太郎とのお供のことが歌つてある。

第三節

お爺さんとお婆さんが海岸で見送つて居る様子を歌つたものである。

十 モモタラウ

指導要旨

昔時に現はれる小さな英雄桃太郎の歌曲を歌はせて、英雄崇拜の思想を鼓吹し、国民精神を昂揚する。

樂曲の解説

一點ニ音から二點ニ音迄の音域から成るハ調長音階の旋律である。

八小節から成る一部分形式である。

四分の三拍子。律動は、次のやうな形式のものが組み合はされてある。



指導要項

1. 桃太郎を歌つた歌曲は、從來も數多くあるが、鬼が島征伐といふ海に關係のある話であるに係はらず、舟出の様子等を歌つた歌詞のものは無い。ここに新鮮味もあり、特に海國日本の兒童に歌はせるものとして深い意義がある。この點に留意して指導することが肝要である。

2. 本學年としては、三拍子の歌曲はこの外に第一學期の必修教材「ウミ」があるばかりである。従つて、三拍子の拍子訓練の材料として重要な教材であり、寧ろ必修教材に準じて取扱ふべきものである。

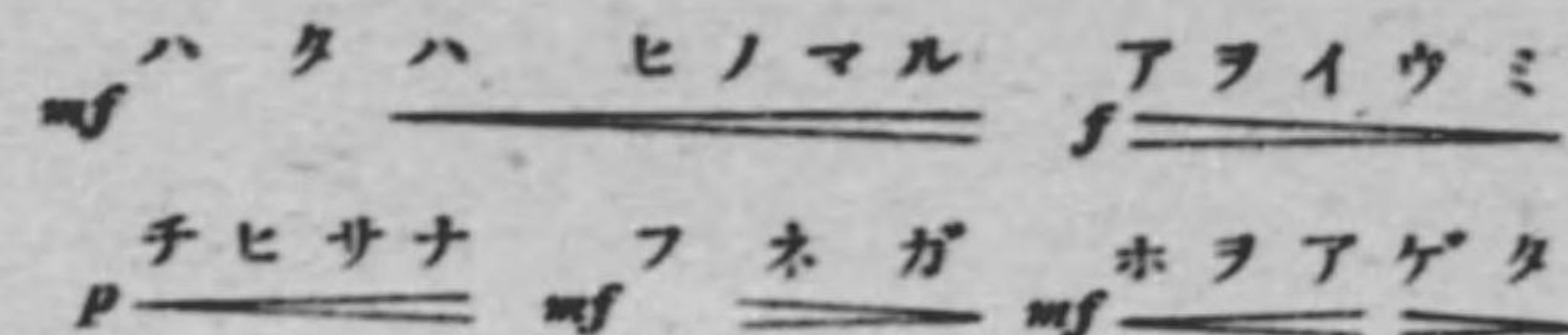
3. 律動の形式も、前の「ウミ」と殆ど同じであり、音符及び休符としても、本學年程度として基本的取扱はなければならない重要なものばかりが用ひられてあるので、律動訓練としても大切な教材である。

4. 歌唱部、第三小節の始めにある「イ→ニ」といふ完全四度及び第五小節から第六小節に入るところの「ト→ハ」といふ完全四度、第七小節の終りにある「ト→ニ」といふ完全五度の音程は相當注意して、明確に歌へるやうにしなければならない。この音程訓練の上から見ても、本學年として重要な教材である。

5. 音名視唱の練習教材としても、最も好適の程度であるから、十分訓練して音高記憶と音名視唱法との基礎訓練に資することが肝要である。

6. 速度は、四分音符一分間に96であるから、丁度氣持のよい中庸の程度である。

7. 發想も自然に表現される程度でよいが、大體、次の如き形式になる。



歌ひ方

1. かたくるしくなく、一種のあこがれの氣持をもつて歌ふことが肝要である。

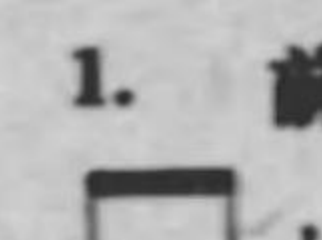

2. 三拍子に於ける強拍を可成りはつきりと表現する氣持で歌ふ。

3. 歌詞第一節、「チヒサナ」は、「チーサイ」でよい。「サイ」の「イ」が、角立つて發音されない方がよいのである。「フネガ」の「ガ」は、鼻濁音である。「ホヲアゲタ」の「ホ」は、十分注意してはつきり發音させるやうに注意しなければならない。ややもすれば、「ホ」が「オ」に聞えるやうな場合があるから注意する。「アゲタ」の「ゲ」も鼻濁音である。

4. 歌詞第二節、「フネニ」の「フ」も、はつきりひびくやうに歌ひ、「フネニ」とその次の「キルノハ」の「キ」との間が、はつきり區別出来るやうに歌ふ。又「モモタラウ」は、勿論、「モモタロー」である。

5. 歌詞第三節「オヂイサン」は、「オヂーサン」で、「イ」を特にひびかせないで歌ふ。「チヲフル」の「ヲ」は、四分音符一箇に附けられてあるが、之は八分音符二箇に等分して歌ふ。次の「オバアサン」も、「オバーサン」と發音し、特に「ア」を角立ててひびかせない方がよい。

伴奏法

1. 前奏部及び歌唱部の第四小節と第八小節にある  の形のところは、 といふ氣持で、後の音を押し強めるやうな氣持で奏することが大切である。

2. 全體をレガートに、旋律を美しくひびかせて奏することが肝要である。

3. 歌唱部第三小節と第四小節とは、旋律に「嬰へ音」が現はれて居ないけれども、伴奏部に現はれて居て、この曲のハ調長音階から、その完全五度上の「ト調長音階」に轉調して居ることがわかる。即ち第三小節は、「ト調長音階」の屬七の和音で、第四小節で主和音に解決して居る。

タネマキ

元氣よく ♩ = 132

一 バ ラ バ ラ バ ラ バ ラ タ ネ マ キ シ マ セ ウ
 ニ バ ラ バ ラ バ ラ バ ラ タ ネ マ キ ス レ バ

マ イ タ ラ ヒ モ テ レ ア メ モ フ レ
 メ ガ デ テ ハ ガ デ テ ハ ナ ガ サ ク

十一 タネマキ

一 バラバラ バラバラ、

タネマキシマセウ。

マイタラ 日モ テレ、

雨モ フレ。

第一節

種を播いて、太陽と雨との自然の恩恵を願ふ歌である。

第二節

人の勤勞と自然の恩恵とが融合して、植物が成長することを歌つたものである。

ニ バラバラ バラバラ、

タネマキスレバ、

メガ 出テ、ハガ 出テ、

花ガ サク。

十一 タネマキ

指導要旨

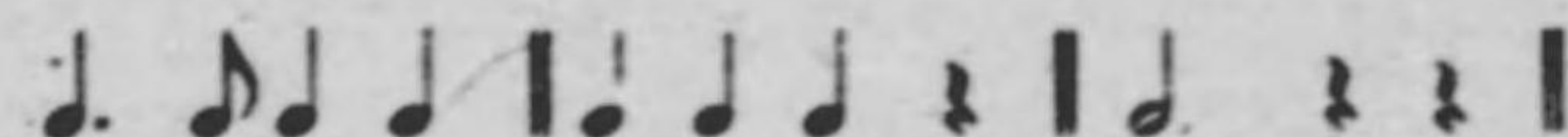
種まきの歌曲を歌はせ、人間の勤勞が自然の恩恵に浴して成就する天理を暗示し、勤勞を愛好する精神を養ふ。

楽曲の解説

一点＝音から二点＝音迄の音域から成るト調長音階の楽曲であるが、旋律の中にはその第七度「嬰へ音」を用ひて居ない。

八小節から成る一部分形式である。

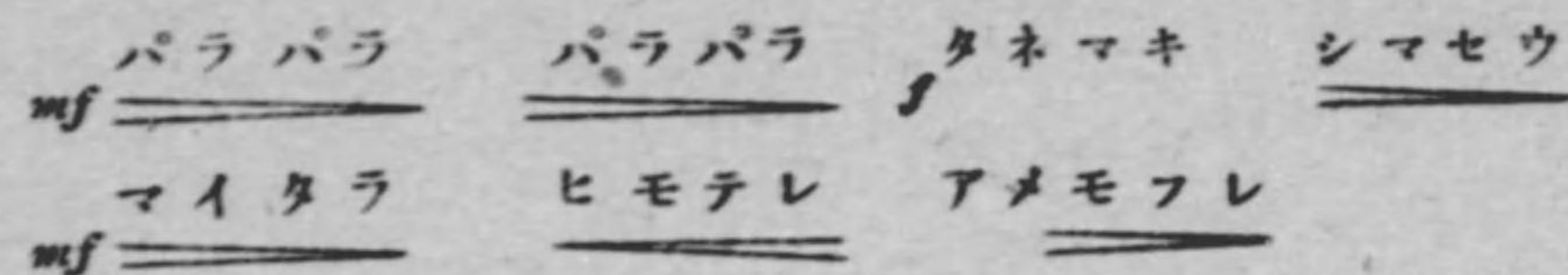
四分の四拍子、律動は、次のやうな形式のものを組み合せたのである。



指導要項

1. 本學年には、四拍子のもものは四教材きりない。この歌曲は、四拍子のもものとして第二番目である。従つて、この拍子訓練を行ふことに重きを置いて指導することが大切である。
2. 速度は、四分音符一分間に 132 であるから、體操の時間などに兒童が行進する時の歩速に近い。従つて、二拍子のやうな歌ひ方になる。この比較的速い四拍子の歌曲の歌唱に習熟させるといふことも、この教材を取扱ふ主眼点である。
3. 速度が速い爲に (♪♪♪) の第三拍と第四拍の律動が曖昧になつて (♪♪♪) といふやうな形にくづれ易いから、この點も十分注意して指導し、この律動形式を正しく體得させ、正しく表現させなければならない。又、(♪♪) の八分音符の方があまり短くなつて (♪♪) といふ律動の形式が曖昧になり、従つて、「パラバラ」の「ラ」とか、「タネマキ」の「ネ」といふ歌詞の發音が不明確になり易いから、十分注意して指導することが大切である。
4. この歌曲も、練習を重ねて居る間に音名でも歌へるやうにし、音高記憶と音名視唱法との基礎訓練に資することが肝要である。
5. 第七小節の始めにある「ロ→ハ」といふ進行が、ややもすると、「ロ→ニ」といふやうに訛る癖を生じ易いから注意して指導する。
6. 發想は、旋律の形式と歌詞の言葉の自然の姿から、極めて自然な形で

つけられるのが當然であるが、大體、次のやうになる。



歌ひ方

1. 輕快に且はきはきと歌ふことが肝要である。
2. 「パラバラ」の「パ」は、兩唇をつけ、はつきりと破裂させて、明瞭に發音させ、種を播く機子を考へて歌ふ。
3. 歌詞第一節の「シマセウ」の「セウ」は、「ショー」となるのであるが、あまり之を強く響かせると、言葉が不自然になるから、寧ろ輕く發音させるやうにした方がよい。
4. 第八小節の二分音符は、正しく二拍を保つやうな氣持で歌ふことが肝要である。
5. 歌詞第二節、「メガ」「ハガ」「ハナガ」の「ガ」は、何れも鼻濁音である。

伴奏法

1. 前奏が三小節の奇數小節になつて居る。このやうな形のもものは、今迄の教材には出て居なかつたものである。従つて、歌唱部に入るところを十分注意し、この前奏の形を十分覚えさせるやうに指導することが肝要である。
2. 前奏は、可成り強くはつきりと演奏する。
3. 右手の旋律をはつきりと出し、左手の伴奏をレガートに、輕く奏することが肝要である。
4. 歌唱部、第四小節の左手の第四拍の音は、スタッカートに正しく表現し、輕く奏する方がよい。

ハト ボツボ

あどけなく ♩=112

一 ボツ ボツ ボ ハト ボツ ボ
二 ボツ ボツ ボ ハト' ボツ ボ

マ メ ガ ホ シ イ カ ソ ラ ヤ ル ソ
マ メ ハ ウ マ イ カ タ ベ タ ナ ラ

ミン ナ デ イ ッ シ ョ ニ タ ベ ニ コ イ
ミン ナ デ ナ カ ヨ ク ア ソ バ ウ ヨ

十二 ハト ボツボ

一 ボツボツボ、
ハト ボツボ、

マメガ ホシイカ、
ソラ ヤルゾ。
ミンナデ イツシヨニ
タベニ 来イ。

二 ボツボツボ、

ハト ボツボ、
マメハ ウマイカ、
タバタナラ、
ミンナデ ナカヨク
アソバウヨ。

新訂尋常小学唱歌に掲載されて居るものを一部分修正して採用したのである。

第一節

子供達が豆を撒いて鳩を呼んで居るところが歌つてある。

第二節

子供達が鳩と遊びたいといふ純真な童心を歌つたものである。

十二 ハトポッポ

指導要旨

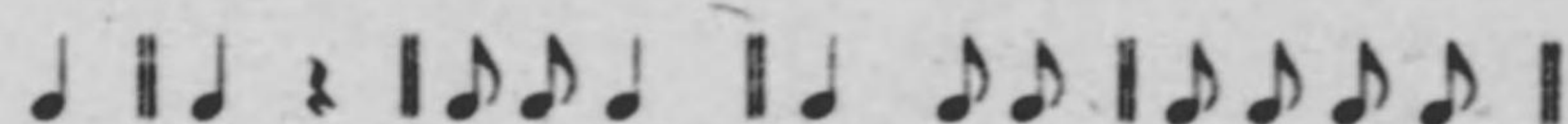
愛らしい鳩の歌曲を歌はせて、素直な童心を培ひ、動物愛護の精神を涵養する。

楽曲の解説

一点へ音から二点へ音迄の音域から成るへ調長音階の楽曲であるが、旋律の中には、その第四度、「變^ロ音」を用ひて居ない。

前が八小節、後が四小節の一部分形式である。即ち始めの四小節によつて投げかけられた問の形は、之に續く次の四小節によつて更に敷衍されて、問の形を完成し、之に對して最後の四小節が應答を與へて居るやうな形式と見ることが出来る。

四分の二拍子、律動は、次のやうな形式のものが組み合はされて出来て居ることがわかる。



指導要項

1. 新訂尋常小學唱歌に掲載されて居る歌詞の一部分が修正されて採用されてあるから、この點に注意して指導しなければならない。
2. 楽曲に於ても、極めて小部分の修正が加へられて居る。よくその點は注意して、修正された楽曲を忠實に體得させ、正しく表現させるやうに指導しなければならない。
3. 二拍子としては、前にも屢々出て居るところの極めて平易な律動形式であり、音符や休符の種類も少い。従つて、二拍子の拍子訓練を十分徹底すること、及びこの程度の音符や休符によつて構成されるところの律動訓練を徹底することに重きを置いて指導する。
4. 音域も狭く、又、律動も簡單であり、使はれて居る音も、「へトイハニ」といふ五つだけであるから、音名で歌はせることも容易であると思ふ。練習を重ねて音高記憶と音名視唱法との基礎訓練に資することが肝要である。
5. この教材は、第二學期として第三番目、本學年としては第六番目の必修教材である。

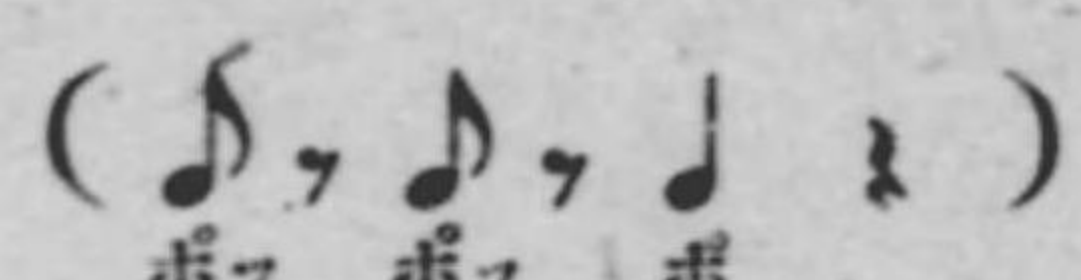
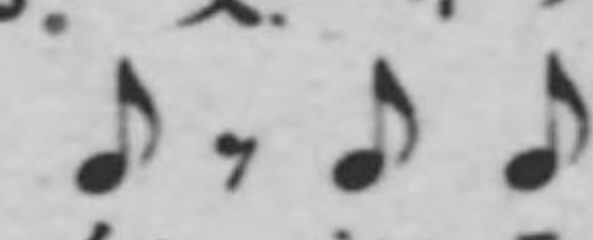
6. 四分休符の前にある四分音符を延ばし過ぎて二分音符のやうに歌ふと全體の曲想が鈍重になるから、之を軽く、あかるく切るやうに指導することが大切である。又、八分音符二箇の一拍が不平均にならないやうに注意する。

7. 自然な發想は、次のやうな形になる。

<u>mf</u>	ポッポッポ	ハトポッポ
	マメガホシイカ	ソラヤルゾ
	ミンナデ	イッショニ
<u>f</u>		タベニコイ

8. 速度は、四分音符一分間に112であるから、軍隊の速歩に近い。

歌ひ方

1. 快活明朗に歌ふことが肝要である。心の中に愛らしい鳩を描き、之を愛撫する心持で歌ふ。
2. 「ポッポッポ」は、スタッカートの心持で  と歌ふ。
3. 「ハトポッポ」の「ハト」のところは、正しく八分音符二箇に平均されるやうに、そして鳩に實際呼びかける心持で歌ふ。
4. 歌詞第一節「マメガ」の「ガ」は、鼻濁音。「ミンナデ」の「ミン」は、四分音符を二等分する心持で、「ン」を軽く發音する。又、「イッショニ」の促音も、「ショ」の前に八分休符を置くやうな氣持で歌ふ。 
5. 歌詞第二節「ウマイカ」の「ウ」は、^{イッ}「マ」の始めの鼻に通つた音、即ち兩唇鼻音である。「アソバウヨ」は、「アソボーヨ」と發音する。

伴奏法

1. スタッカートをはつきり表現して、美しく奏することが肝要である。
2. 常に歌詞の形式や氣持によく合はせるやうに右手の旋律を演奏し、兒童の歌唱を正しく誘導することが肝要である。

コモリウタ

静かに ♩=100

一 ネンネン コロリヨ オコロリ
 ニ パウヤノ オモリハ ドコヘイッ
 ミ サートノ ミヤゲニ ナニモラッ

ヨ パウヤハ ヨイコダ ネンネシ ナ
 タ アノヤマ コーエテ サトヘイッ タ
 タ デンデン ダイコニ シャウノフ エ

十三 コモリウタ

ネンネン コロリヨ、
 オコロリヨ。
 パウヤハ ヨイ子 だ、
 ネンネシナ。
 バウヤノ オモリハ、
 ドコヘ 行ッた。
 アノ山 コエテ、
 里へ 行ッた。
 里ノ ミヤゲニ、
 ナニ モラッた。
 デンデンダイコニ、
 シャウノフエ。

「ヨミカタ」(二)に掲載されてあるものをそのまま採用したのである。我が國古来の童謡で、歌詞には古い時代の玩具が入れられてあるが、そのまま味はせる。
 「デンデンダイコ」…田田太鼓、振鼓の俗稱。其の鳴る音から来た名稱である。小形のもを玩具にする。「ジャウノフエ」…笙の笛。下部に強といふ空室があり、側面に吹口を持ち、その上に笙管といふ多数の竹の管がある。古代は、十三乃至十九管あつたが、中世以來十七管に限られるやうになつた。現代でも雅楽に用ひられる。

十三 コモリウタ

指導要旨

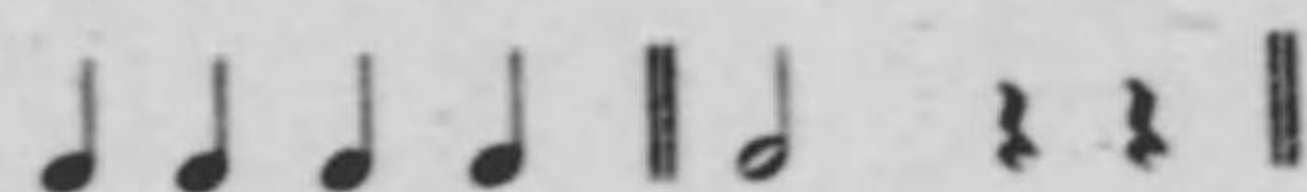
我が國固有の民族的な童謡を歌はせて、素直な童心を培ひ、國民的情操を醇化する。

樂曲の解説

一點ハ音から二點ハ音迄の音域で、「ニ音」を主音とする我が國固有の陽音階である。我が國の各地に歌はれて居る子守歌の典型的なものである。

八小節から成る一部分形式である。

四分の四拍子。律動は、次のやうな極めて基本的な形式のものが組み合はされてある。



指導要項

1. 我が國各地に古い童謡として、この種の子守歌が残つて居るが、歌詞及び樂曲等に多少の相違がある。しかし、それ等の多くの子守歌の典型的なものである。

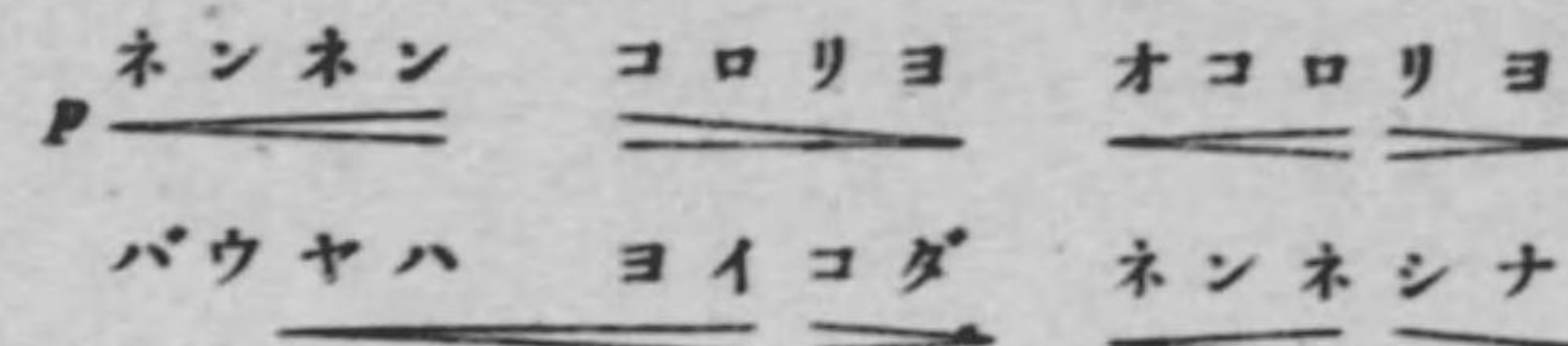
2. 樂曲に於ては、地方により、場合によつて、この樂曲の「イ音」を「變イ音」とし、「ホ音」を「變ホ音」とした陰音階のものが、同じ歌詞で歌はれて居るが爲にややもすると、歌はせて居る間に、その陰音階のやうな傾向になることがあるから、注意して指導しなければならない。

3. 律動は、極めて單純であつて、殆ど四分音符の並列から成つて居る。この程度のものであれば、兒童自身の力によつて、律動を正しく表現させるやうに導くことも可能であらう。このやうな平易な教材を利用して、律動訓練の基礎を徹底することは重要なことである。

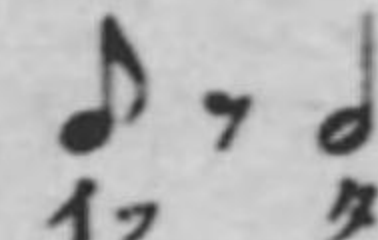

4. 「デンデンダイコ」とか、「シャウノフエ」といふやうな言葉を強ひて詳しく解説する必要はない。「デンデンダイコ」は、兒童用書の挿畫にも出て居るし、又、現代でも玩具屋などにあつて見ることが出来るけれども、「シャウノフエ」の如きは、簡單に「フエ」といふ程度に取扱つて置けばよい。

5. 「一點ハ音」の音は、場合によると、この程度の兒童に發聲しにくいこともあるが、強ひて無理に出させず、軽く歌はせて置く程度でよい。

6. 速度は、四分音符一分間に100であるから、やや中庸の程度に近い。
7. 子守歌本來の性質から、やさしく歌ふのは當然であるが、次のやうな發想が自然につく迄、練習を徹底的に行ふべきである。



歌ひ方

1. 軽く、やさしく歌ふことが肝要である。
2. 流れるやうな旋律の美しさを十分に會得させることが大切である。
3. 第四小節及び第八小節は、二分音符と四分休符二箇とから成つて居るが、四拍子に於ける自然な律動形式としては、附點二分音符と四分休符の形になる。従つて、この歌曲に於ても、二分音符は少し長めに、柔かく延ばして歌ふ心持でよい。
4. 歌詞第一節、「ネンネン」の「ン」は、軽く餘韻をつけて歌ふことが大切である。「パウヤハ」は、「ポーヤ」と發音する。
5. 歌詞第二節、「ドコヘイフタ」の促音は、「タ」の音の前に八分休符を置くやうな心持で歌ふ。
その次にある「サトヘイフタ」のところも同様である。
6. 歌詞第三節、「サトヘ」の「サ」は、二分音符のつもりで延ばして歌ふ。「ナモラフタ」の促音も、やはり、「タ」の音の前に八分休符を置くやうな氣持ではつきりと歌ふ。
「シャウ」は、「ショー」と發音する。

伴奏法

1. 全體をレガートに演奏する。
2. 右手の旋律をはつきりと、左手の音は、やや弱めに柔かに奏することが肝要である。

オ人ギヤウ

やさしく ♩ = 80

イ ツモ ツカヒニ イクトキ ハ オニンギヤウ
ニソ ラニ マンマル ツキガデ テ オニンギヤウ

サン ラ ツレテイ ク ア メガ フッ タラ
サン ハ ユメラミ ル ネン ネン コロ リヨ

カササシ テ カサ サ シ テ
ネンコロ リ ネン コ ロ リ

十四 オ人ギヤウ

一 イツモ ツカヒニ
イク トキハ、
オ人ギヤウサンヲ
ツレテ イク。
雨ガ フツタラ
カサ サシテ、
カサ サシテ、
カサ サシテ。

二 空ニ マンマル
月ガ 出テ、
オ人ギヤウサンハ
ユメラ 見ル。
ネンネン コロリヨ、
ネンコロリ、
ネンコロリ。

第一節
人形に對する兒童のやさしい愛着の
心持を歌つたものである。

第二節
人形への子守歌といふ心持を現はし
た歌詞である。

十四 オ人ギャウ

指導要旨

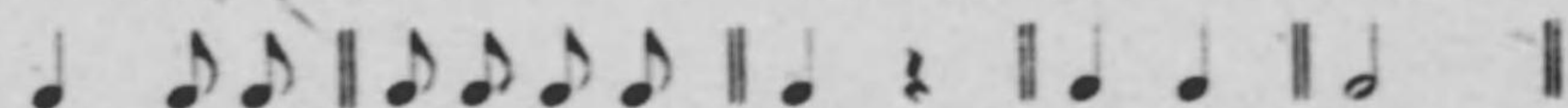
愛らしい人形の歌曲を歌はせて、純真な童心を培ひ、國民的情操の醇化に資する。

樂曲の解説

一點＝音から二點＝音迄の音域から成るハ調長音階の樂曲である。

始めの八小節の終りが半終止であるが、ここで一段落と考へ、次の六小節と區別して、二部分形式となる。終りの六小節は、四小節で終結すべきところであるが、歌詞の方で最後の「カササシテ」を反復して居る爲に二小節が延長された形である。

四分の二拍子。律動は、次のやうな形式のものが組み合はされて居る。



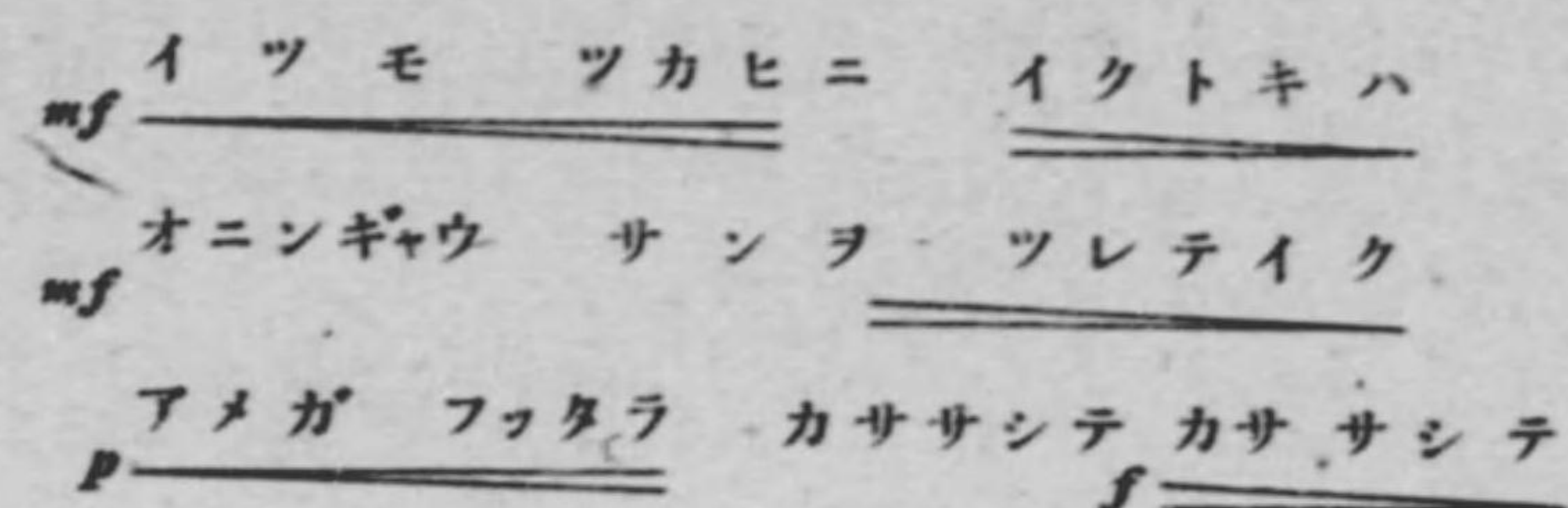
この律動は、本學年として最も基礎的に取扱ふべき音符及び休符の種類を全部ふくんで居る。

指導要項

1. 女兒向の教材であることはいふ迄も無いが、男女兒合併の學級に於ては、當然、男兒童にも歌はせて差支ない。この程度の兒童は、男兒にも或程度迄、人形と遊ぶといふやうなやさしい氣持があるものである。
2. 歌詞第一節に「イツモツカヒニイクトキハ」とあるが、この言葉の中には、たとへ小さい兒童でも、自分の力で出来ることは、親の爲に、家の爲に勤勞をいとはないといふ意味をもふくめて居るから、之等の點にも着眼して指導することが肝要である。
3. 女兒の本能的に人形をいつくしむ心こそ、これを發展させれば、國力の重要な基礎となる母性愛である。特に女兒に於ては、この點に留意して指導することが肝要である。
4. この樂曲に使はれて居る音符及び休符は、本學年として指導する基本的なものであるから、律動訓練の立場から十分注意して徹底的に指導する必要がある。
5. 速度は、四分音符一分間に80であるから、あまり速い方ではない。

寧ろやや落ちつき氣味に、柔かく歌ふべきである。

6. 歌詞の言葉の感じを忠實に表現すれば、極めて自然な發想がつくが、大體、次の如くなる。



歌ひ方

1. やさしく、愛情をこめて歌ふことが肝要である。
2. 最後の小節は、二分音符となつて居り、伴奏の方では、更に一小節延長されて居るが、この二分音符は、二拍延ばしてそのまま切つてしまふので無く、多少餘韻を残すやうな心持で歌ふことが大切である。
3. 歌詞第一節「オ人ギャウ」の「ギャウ」は、「ギョー」であるが、この「ギョ」は、鼻濁音である。「ギョー」は、柔かに發音し、あまり角立たないやうに歌ふ方がよい。「オ人」の「ン」は、後舌背で調節をする。「サン」の「ン」は、閉鎖點のない「ン」でもよい。
「アメガ」の「ガ」は、鼻濁音である。又、「フツタラ」は、「タラ」の前に八分休符を置く心持で、促音をはつきり歌ふ。
4. 歌詞第二節「マンマル」の「ン」は、兩唇を閉鎖する。「フキガ」の「ガ」は、鼻濁音である。「ネンネン」の始めの「ネン」は、八分音符二箇に二等分して歌ふ。「ネン」の「ン」は、前舌背の閉鎖。「ネンコロ」の「ン」は、後舌背の閉鎖によつて通鼻する。

伴奏法

1. 全體として柔かに、レガートに奏することが肝要である。
2. 特に右手の旋律をはつきりと、左手の音は、少し弱めに柔かく奏するやうに注意する。

才 正 月

業朴に ♩ = 108

mf p

mf

十五 才正月

一 早く 来イ 来イ、

才正月、

山ノ ウラジロ

持ツテ 来イ。

二 早く 来イ 来イ、

才正月、

タニノ ワカ水、

クンデ 来イ。

「ヨミカタ」(二)の「十五、才正月」を原據とし、之を作曲上の都合から修正したものである。

第一節

お正月の飾物にする、うらじろ、を持つて、お正月よ、早く来い、と歌つて居る。

「うらじろ」…羊齒科植物、葉の裏が白い。

第二節

わかみづをくんで、早くお正月よ、来い、と歌つて居る。

「わかみづ」…古來我が國では、正月は門口に松竹を立てる外、屋内の神棚には七五三繩を張り、供へ餅をし、特に元旦の早朝には、新鮮な冷水を供へて踏神を拜する習慣であつた。この元旦早朝の清水を若水といふので、年中の邪氣を拂ふものと考へられて居た。

十五 オ正月

指導要旨

お正月を待つ歌曲を歌はせて、純真な童心を培ひ、快活純美の情を養ふ。

楽曲の解説

一点へ音から二点ハ音迄の音域で、「ト音」を主音とする我が國固有の陽音階を基礎とする旋律で、一種の民謡調を帯びて居る。

四小節の樂節二箇を並べた単純な一部分形式である。

四分の二拍子、律動は、次のやうな形式のものを組み合はせたものである。



指導要項

1. 歌詞は、着想に於て「ヨミカタ」(二)の「お正月」と殆ど同様である。しかし、作曲の便宜上から或程度の修正をして居るのであるから、この點に注意して指導することが肝要である。

2. 「早く来い来いお正月」といふのは、純真な兒童の心持であり、誠に切實な叫び聲である。この心持を十分に尊重して取扱ふことが肝要である。

3. 旋律は、我が國固有の陽音階を基礎として居るが、その中には、多分に素朴な民族的な氣持があふれて居る。この點に於ては、今迄の「カクレンボ」や「ユフヤケコヤケ」或は「オタルコイ」「コモリウタ」等とは異なつた趣があるから、之等の點にも注意して指導しなければならない。

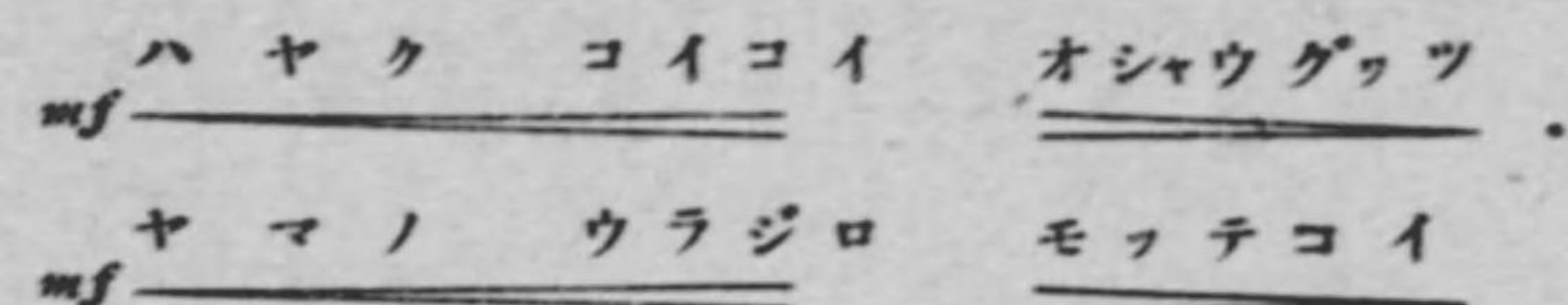
4. 二拍子としては、用ひられてある音符や休符の種類も極めて少く、単純な律動形式であつて、この歌曲の律動を正しく體得し表現させることにより、律動訓練の徹底に資することが出来る。

5. 旋律は、結局「ヘトイハ」といふ四箇の幹音だけしか用ひられて居ない極めて単純なものであり、しかも、拍子も、律動も、簡單であるから、この時期になれば、十分音名で歌はせることも出来ると思ふ。この練習を重ねて、音高記憶と音名視唱法との基礎訓練に資すべきである。

6. 全曲が八分音符二箇の一拍を單位とした平坦な律動形式を基礎として居るのであるが、之を歌ふ際に注意しないと(♪ ♪)といふやうな形式になり易い。

7. 速度は、四分音符一分間に108であるから、中庸の速度より心持速い。しかし、速きに失しないやうに注意しなければならない。

8. 特に發想をつけさせる必要はないが、練習を重ねる間に、歌唱指導の發展的な段階として、兒童がその發想的表現に迄自然に到達するといふことは注目すべきことである。その大體の要領は、次の如くなる。

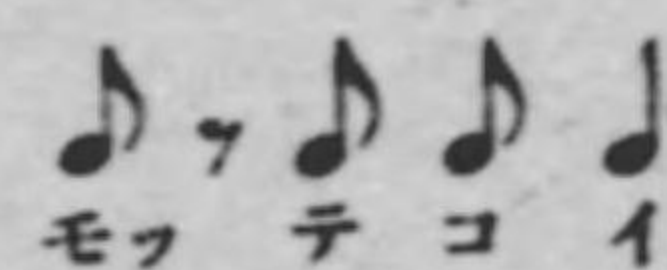


歌ひ方

1. 素材に、元氣に、朗かに歌ふことが肝要である。

2. 「ハヤクコイコイ」の「コイコイ」のところは、「コ」をはつきりと、「イ」はむしろ少し弱めに軽く發音した方がよい。之が、ややもすると違になつて、「コイーコイー」といふ風になる傾向がある。即ち「コ」のひびきが短くなつて、「イ」の方が長く強くなるのである。この歌ひ方は、よろしくないから、注意しなければならない。

3. 歌詞第一節「オシャウグツツ」は、「オシヨーグツツ」でよい。「ガ」は、鼻濁音である。「オシヨオグツツ」といふ風に、「オ」が角立つてひびかないやうに注意する。「モツテコイ」は、「ツ」の前に八分休符を置いたやうな氣持で歌ふ。



4. 歌詞第二節「クンデコイ」の「クン」は、四分音符に附けられてあるが、之は、大體八分音符を二等分する氣持で歌ふ。この「ン」は、前舌音による。

伴奏法

1. 前奏が六小節ある。之をよく覚えさせて歌唱部の發唱を正しく揃ふやうに指導する。前奏部の終りの二小節は、スタフカートをはつきりと、弱く軽く奏することが肝要である。

2. 右手の旋律をレガートに奏する。

デンシャゴッコ

快活に ♩ = 126

一 ウンテンシユハ キミダ
ニ ウンテンシユハ ジャウズ

シャウハ ボクダ アトノ ヨニシガ デンシノ
デンシハ ハヤイ ツギハ ボクラノ ガクカウ

オキヤク オノリハ オハヤク ウゴキマ ス
マヘダ オオリハ オハヤク ウゴキマ ス

十六 デンシャゴッコ

一 ウンテンシユハ キミダ。

シヤシヤウハ ボクダ。

アトノ 四人ガ、

デンシヤノ 才客。

「オノリハ 才早く、

ウゴキマス。」

ニ ウンテンシユハ ジヤウズ。

デンシヤハ 早イ。

ツギハ ボクラノ

学校前

「オオリハ 才早く、

ウゴキマス。」

「ヨミカタ」(二)の「十二」デンシヤ
ゴッコ」に出て居るものであり、又、
新訂尋常小學唱歌にも掲載されてあつ
たものであるが、最後の「チンチン」とい
ふ擬聲は、作曲の都合上之を省略し
たのである。新訂尋常小學唱歌に掲載
されてあるものは、一部分違ふところ
がある。

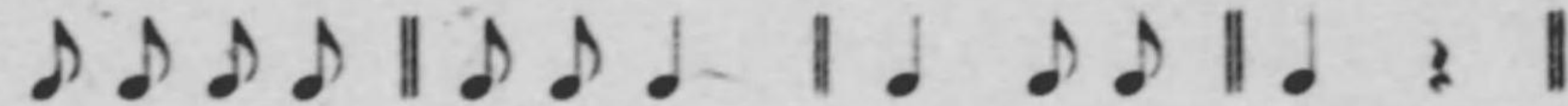
十六 デンシャゴッコ

指導要旨

楽しい電車ごつこの歌曲を歌はせて、純真な童心を培ひ、快活の情を養ふ。

楽曲の解説

一点ホ音から二点ニ音迄の音域から成るハ調長音階の楽曲である。
 始めの八小節と、次の四小節との二つの樂節から成る一部分形式である。
 四分の二拍子。律動は、次のやうな形式のものが組み合はされてある。



指導要項

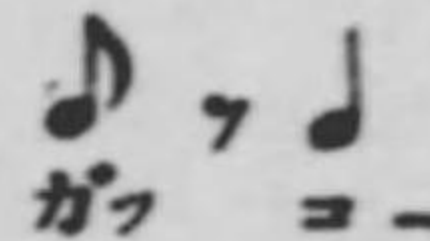
1. 「ヨミカタ」にあるものと全く同じであるが、最後の「チンテン」は、作曲の都合上之を省略してある。又、新訂尋常小學唱歌に掲載されてあるものを一部分修正してあるから、この點に注意して指導しなければならない。
2. 楽曲は、新訂尋常小學唱歌に掲載されてあるものを根本的に大修正が加へられてあるが、之は國民學校に於ける音高記憶の體系と、律動訓練の體系とに由来するのであつて、必ずしも新訂尋常小學唱歌にあるものが、兒童に與へる歌曲として劣つて居るといふ意味で修正したのではない。従つて、或程度まで新訂尋常小學唱歌にあつたものの旋律なり、律動なりを尊重して修正が加へられて居る。この點に十分注意して指導しなければならない。
3. 速度は、四分音符一分間に126であるから、可成り速い。兒童が、體操の時間に行進する歩速よりも少し遅い位であらう。この速度の中で、しかも八分音符を本體とする律動形式であるし、一面歌詞の言葉が速く進行するから、發音訓練の教材としても重要なものである。これ等の點にも注意して指導することが肝要である。
4. この程度の教材は、音名で歌ふ練習も十分に出来るから、漸次その練習を進めて、音高記憶と音名視唱法の基礎訓練に資することが大切である。
5. 發想は、數多く練習して居る間に自然につけられるやうに導くことが大切であるが、大體、次の如くなる。

ウンテンシュハ キミダ シャシャウハ ボクタ
 mf

f ア ト ノ ヨ ニン ガ デン シャ ノ オ キ ャ ク

mf オ ノ リ ハ オ ハ ヤ ク ウ ゴ キ マ ス f

歌ひ方

1. はざれよく、はきはきと、快活に歌ふことが肝要である。
2. 比較的速くうごく發音の修練になるといふことに相當重きを置いて指導する。
3. 歌詞第一節「ウンテンシュ」の「ウン」「テン」「シュ」は、特に各音をはつきり發音するやうに注意して歌はせる。
4. 「シャシャウ」は、少し切るやうに歯ざれよく歌ふ。
5. 「ヨニン」の「ン」は、後舌背の閉鎖による。「ヨニンガ」の「ガ」は、鼻濁音である。「デンシャ」の「デン」は、四分音符一箇に附けられてあるが、大體八分音符二箇に等分する心持で歌ふ。
6. 「ウゴキマス」の「ゴ」は、鼻濁音。「ス」は軽く少し長く延ばすやうに歌ふ。
7. 歌詞第二節「ジャウズ」は、「ジョーズ」と發音する。「デンシャ」の「ン」は、中舌背の軽い閉鎖又は閉鎖點の無い發音でよい。
8. 「ガクカウ」は、「ガツコー」であり、「コ」の前に八分休符を置く心持で、促音をはつきりと歌ふ。
9. 「オオリハ」の「オ」は、何れも軽く云ひ直すやうな心持で歌ふ。

伴奏法

1. 前奏は、二小節であるが、その右手の部分は、「ハハト」といふ三和音の連続である。尚、歌唱部になつても、「ハハト」及び「ハヘイ」の和音が多く用ひられて居るので、この伴奏音を利用して和音訓練を行ふことも出来る。
2. スタッフカートが附けられてあるところが多いから、之をはつきりと表現することが肝要である。
3. 全般的に輕快に奏する方がよい。

カラス

明るく ♩=116

The first system of the musical score for 'カラス' consists of a vocal line and a piano accompaniment. The vocal line is a single note with a dash, indicating a rest. The piano accompaniment is in 2/4 time, starting with a forte (f) dynamic and moving to mezzo-forte (mf) in the second measure. The piano part features a rhythmic pattern of eighth and sixteenth notes.

カラス カラス カンザブラウ アノ

The second system of the musical score for 'カラス' features a vocal line with the lyrics 'カラス カラス カンザブラウ アノ'. The piano accompaniment continues with a mezzo-forte (mf) dynamic, maintaining the rhythmic pattern from the first system.

ヤマクジダ トビグチ フツテ ハシ

The third system of the musical score for 'カラス' features a vocal line with the lyrics 'ヤマクジダ トビグチ フツテ ハシ'. The piano accompaniment continues with a mezzo-forte (mf) dynamic, maintaining the rhythmic pattern from the first system.

レ ウマレタ ヤ マヲ ワスレル ナ

The first system of the musical score on the second page features a vocal line with the lyrics 'レ ウマレタ ヤ マヲ ワスレル ナ'. The piano accompaniment continues with a mezzo-forte (mf) dynamic, maintaining the rhythmic pattern from the first system.

十七 カラス
カラス カラス
カンザブラウ。
アノ山 クワジ
ダ。
トビグチ フツテ、
ハシレ。
生マレタ 山ヲ
ワスレルナ。

「カラスカラス カンザブラウ」といふのは、古くから各地で童謡的に用ひられて居る慣用語である。この言葉を展開して童謡風にしたものである。
「アノ山クワジダ」…山の夕焼を指していふ。
「トビグチフツテ」…鳥の嘴が崖口の形に似て居るからいつた語で、鳥を火消しと見做したのである。
「生マレタ山ヲ」…鳥の故郷を山と見たのである。

十七 カラス

指導要旨

純朴な童謡風なこの歌曲を歌はせて、純真な童心を培ひ、快活明朗の精神を養ふ。

楽曲の解説

一点ハ音から二点ニ音迄の音域で、「イ音」を主音とする我が國固有の陽音階である。多分に民謡調をふくんで居る。

全曲は、十六小節から成るが、この二小節を四拍子の一小節と見ることの出来る旋律で、前後二つの部分に分けることが出来る。

四分の二拍子。律動は、次のやうな形式のものを組み合はせてある。



指導要項

1. 「カラス カラス カンザブラウ」は、言葉も、楽曲も、各地で歌はれて居る童謡をそのまま採つたものである。その後この言葉の発展した形として、この歌詞が生まれ、更にこの旋律の発展した形としてこの楽曲が出来て居る。この純朴な歌詞と楽曲との味を十分に會得させることが大切である。

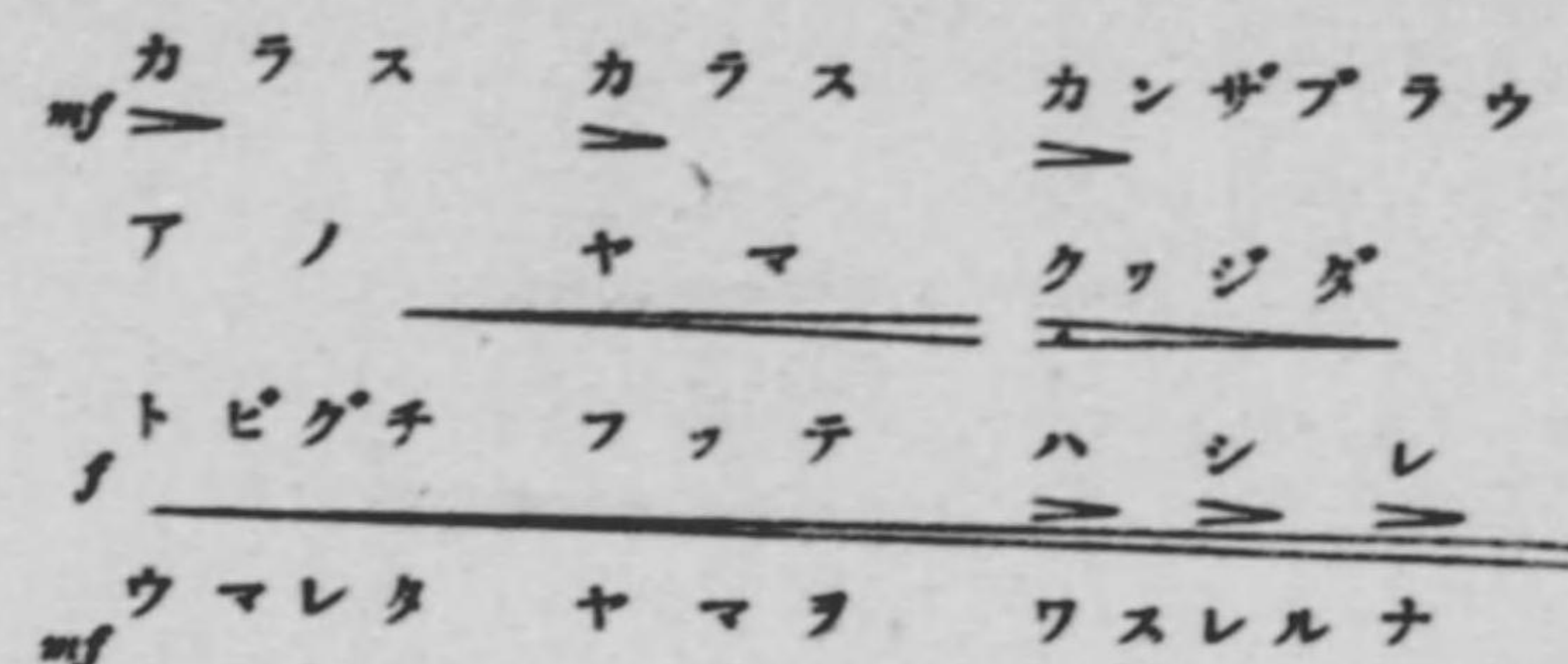
2. 本學年の教材の中には、可成り多く我が國固有の陽音階のものが採られて居るが、それ等は、何れも特徴があり、我が民族的情操の涵養上に重要な使命を持つから、その點を考慮して指導することが肝要である。特に他教科及び他科目との連絡もあり、更に兒童の實際生活に深い關係のあるものが少くないから、それぞれその特徴を生かすやうに取扱ふべきである。

3. この楽曲は、速度が四分音符一分間に116となつて居る。軍隊の速歩行進114に殆ど近い速度である。頭の中に軍隊の行進を描きながら正しい速度に導くことが出来る。

4. 「トビグチフツテ」の「フツテ」のところは(♪♪)となつて居るが之が(♪♪)といふ風にくづれ易いから、十分注意して指導しなければならない。

5. この教材も音名で歌へるやうに練習を重ね、音高記憶と音名視唱法との基礎訓練に資することが肝要である。

6. 素朴な童謡風のものであるから、言葉をはつきりと歌つて、自然の發想がつけられるやうに歌ふ。大體、發想の形は、次の如くである。



歌ひ方

1. 夕焼の空の中を飛んで行く鳥に呼びかける如く、素朴に、快活に歌ふことが肝要である。

2. 「カラスカラス」は、「カ」に少し鮮明なアクセントをつけて歌ふ。「カンザブラウ」の「カン」は、四分音符一箇に附けられてあるが、八分音符二箇に等分するやうな氣持で歌ふ。又、「カンザブラウ」は、「カンザブロー」と發音する。

3. 「クワジダ」は、「カジダ」と發音してよい。

4. 「トビグチ」の「グ」は、鼻濁音である。

5. 「フツテ」は、「テ」の前に八分休符を置くやうな心持で、促音をはつきり歌ふ。

6. 「ハシレ」は、各々の音にアクセントをつけて、命令形のこの言葉に勢をつける。

7. 「ウマレタ」の「ウ」は、兩唇の閉鎖した鼻音とする發音である。

伴奏法

1. 全體をレガートに、旋律をはつきり響かせて奏することが肝要である。

2. 二拍子の強拍をはつきり表現することは勿論であるが、特に歌唱部の第一、第二、第三小節、及び第九、第十三、第十五小節の右手の第一拍をはつきり響かせるやうに注意する。

兵タイゴッコ

早く、勇ましく ♩=176 (♩=88)

一カタカタ
ニカタカタ

カタカタ バンボン バンボン ~ イ タ イ
カタカタ バンボン バンボン ス ス メ ヨ

ゴ ッ コ カタカタ カタカタ バンボン
ス ス メ カタカタ カタカタ バンボン

バンボン ボク ラ ハ ツ ヨ イ
バンボン テ キ ~ イ ハ ニ ゲ ル

十八 兵タイゴッコ

一カタカタ カタカタ、
バンボン バンボン、
兵タイゴッコ。

カタカタ カタカタ、
バンボン バンボン、
ボクラハ ツヨイ。

ニカタカタ カタカタ、
バンボン バンボン、
ススメヨ、 ススメ。

カタカタ カタカタ、
バンボン バンボン、
テキ兵ハ ニゲル。

「ヨミカタ」の十六、兵タイゴッコの終りに出て居る横文を一部分修正して採用したのである。
勇ましい兵隊ごつこの様子を歌つたものである。
「カタカタ カタカタ」は、機關銃の擬聲であり、「バンボン バンボン」は、銃砲の擬聲である。

十八 兵タイゴッコ

指導要旨

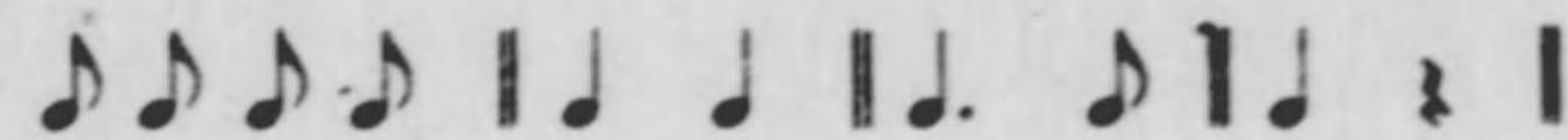
勇ましい兵隊ごつこの歌曲を歌はせて、勇壯活潑の精神を養ふ。

楽曲の解説

一點ハ音から二點ニ音迄の音域から成るハ調長音階の旋律である。

八小節づつの樂節二箇から成る一部分形式の楽曲である。

四分の二拍子。律動は、次のやうな形式のものが組み合はされてある。

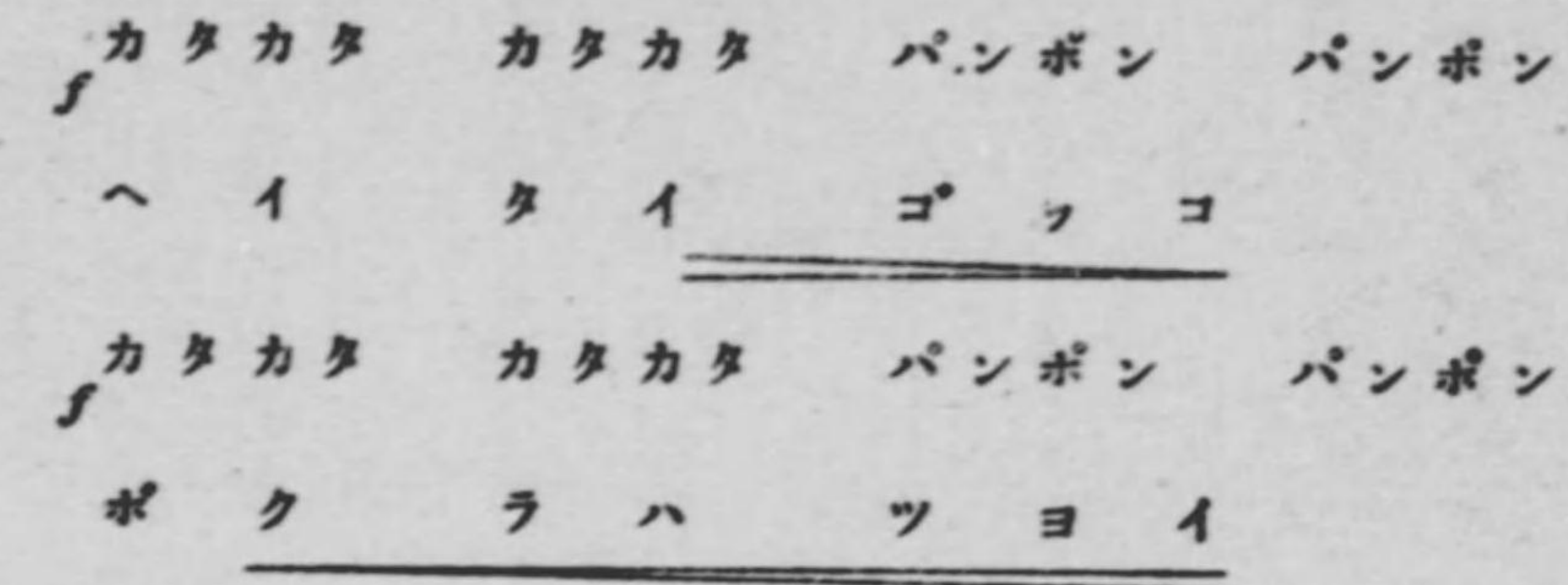


指導要項

1. 第三學期、最初の必修教材である。
2. 先づこの楽曲は、速度が四分音符一分間に176であるから、非常に速い。十六小節の全曲、歌詞一節約十一秒の間に歌ひ終らなければならない。歌詞二節を續けて歌ふとしても二十二秒弱である。この速度の非常に速い歌曲の歌唱を會得させ、同時にその妙味を十分に體得させなければならない。
3. この速度に於て、「カタカタ カタカタ、パンボン パンボン」といふのは、この程度の兒童にとつて相當修練を要するものと思はれる。一面からいふと、この發音の要領を會得させるといふ點に、この歌曲を取扱ふ重要な意義があるから、十分注意して指導しなければならない。
4. 第一段の四小節、「カタカタ カタカタ、パンボン パンボン」のところは、第三段に至つて、同じ歌詞の言葉であるが、旋律に於ては、更に發展した形式になつて居る。同じ歌詞の言葉で、しかも相當に長い「カタカタ カタカタ、パンボン パンボン」といふ擬聲であり、更に最初の一小節は、同じ旋律で起りながら、旋律が變化して進行するといふのは、この程度の兒童にとつては相當に技巧的な負擔である。しかし、この技巧的な負擔を克服して熟練させるといふ點に、この歌曲を本學期に於ける最初の必修教材に選定した意義が多分にふくまれて居るから、この點に十分留意して指導しなければならない。
5. この教材を取扱ふ頃には、五線譜の音名讀も相當徹底して來ることと思ふから、その練習と、この歌曲の歌唱とを結合して、音高記憶と音名視唱

法との基礎訓練に導入することが肝要である。

6. 着想は、擬聲の部分強く、第二段と第四段は *mf* でよいが、第四段の終りに全曲の頂點を置いて終結を引き締める。



歌ひ方

1. 元氣一杯に歌ふ。
2. 「カタカタ カタカタ、パンボン パンボン」は、實感が出るやうに鋭く歌ふ。
3. 「カタカタ」は、何れも「カ」にアクセントをはつきりつけ、「パンボン」の「バ」と「ボ」は、兩唇を閉鎖してはつきりと破裂させて發音する。
4. 「ヘイタイ」は、「ヘータイ」と發音する。
5. 「ゴッコ」は、促音をはつきりと、中間に休符を置くやうな心持で歌ふ。



6. 「ラキヘイ」は、「ラキヘー」と發音する。
7. 「ニゲル」の「ゲ」は、鼻濁音である。

伴奏法

1. 各小節共、第一拍到可成りはつきりとアクセントを與へて、二拍子の強拍を明確に表現するやうに奏することが肝要である。
2. スタッカートが多く用ひられてあるから、之を鮮明に表現するやうに奏する。
3. 右手の音は、「ハホト」及び「ハヘイ」或は「ロニト」の和音訓練の音をそのまま用ひてあるところが多いから、之を和音訓練と連絡して指導することが肝要である。

ヒカウキ

元気よく ♩ = 132

ヒカウキ ヒカウキ ハヤイナ

アライソラニギンノツバサ

ヒカウキ ヒカウキ ハヤイナ

十九 ヒカウキ
 ヒカウキ、
 ヒカウキ、
 早イナ。
 ヒカウキ、
 ヒカウキ、
 早イナ。
 ギンノツバサ。
 青イ空ニ

「ヨミカタ」(二)の二十七頁に出て居るものをそのまま採用したのである。但し作曲の都合上、一部分の語句を反復して居る。

十九 ヒカウキ

指導要旨

飛行機の歌曲を歌はせて、航空機に対する関心を喚起し、明朗快活の精神を養ふと共に航空思想の涵養に資する。

楽曲の解説

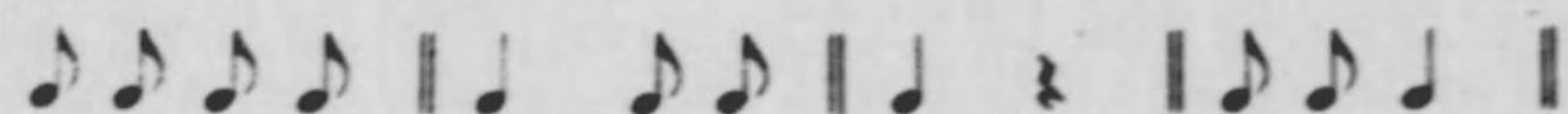
一點ニ音から二點ニ音迄の音域から成るハ調長音階の楽曲である。

歌詞が一句を単位とする三部分から成つて居るので、楽曲も四小節づつの三部分形式のやうに組立てられて居る。その旋律の構成は、次の如くである。

A (四小節) + B (四小節) + A (四小節)

即ち始めの四小節と終りの四小節とが、對蹠的な形をなして居る。

四分の二拍子。律動は、次のやうな形式で組み合はされて居る。



指導要項

1. 本學年最後の必修教材である。しかし、「ヨミカタ」では、「一」の巻に出て居るので、之と直接連絡をとるならば、當然、第一學期に取扱はねばならないものである。

2. 「ヨミカタ」に掲載されてあるものは、之を楽曲とする際に、楽曲の形式を整へる必要上不備の部分がある爲に、一部分の語句を反復して居る。この點に注意して指導することが大切である。

3. 速度は、四分音符一分間に132であるから、可成り速い。體操の時間に兒童が行進する歩速に大體近いであらう。この比較的速い速度の歌曲に習熟させることも、この教材を取扱ふ重要な着眼點である。快速の氣持を體得させることを十分重んじて指導しなければならない。

4. 反復練習して居ると、自然に音名で歌ふことが出来るやうにならう。始めの間は、少し速度をゆるめて歌はせ、追々正しい速度で歌へるやうに導いて、音名視唱法の基礎訓練を行ひ、併せて音高記憶の基礎を培ふ。

5. 「アライソラニ」「ギンノツバサ」とここだけは、二小節毎に息をついで歌ふ。この息つぎの要領を會得させることも、この教材を取扱ふ上に注意しなければならない點である。

6. 「ヨミカタ」の方で取扱ふ朗讀の發展した形で、この歌曲の指導をするといふことも大切な着眼點である。

7. 普通の會話から朗讀へ、朗讀から歌唱へ、と發展的な過程を考へると、更に自然な發想に到達しなければならない。その大體の形は、次の如くなる。

<u>f</u>	<u>ヒカウキ、</u>	<u>ヒカウキ</u>	<u>ハヤイナ</u>
<u>mp</u>	<u>アライ</u>	<u>ソラニ</u>	<u>ギンノ ツバサ</u>
<u>f</u>	<u>ヒカウキ</u>	<u>ヒカウキ</u>	<u>ハヤイナ</u>

歌ひ方

1. 青空に美しい飛行機を発見した驚異と、憧憬の心を率直に表現するやうに、はきはきと、元氣よく歌ふことが肝要である。

2. 速度が遅くなると曲想が鈍重になるから、正しい速度を常に保つやうに注意しなければならない。

3. 「ヒカウキ」は、「ヒコーキ」と發音して、「コー」のところはレガートに歌ふ。「ヒ」は、はつきりと發音しなければならないが、「コ」に少しアクセントをつけて歌ふ。

4. 「ギン」の「ギ」は、鼻濁音であつてはならない。はつきりとした濁音である。「ン」は、前舌背の閉鎖となる。

5. 「アライソラニ」の「ニ」と「ギンノツバサ」の「サ」とは、重苦しく延ばさないで、寧ろ軽く切つて歌ふ。尚、この部分、即ち第五小節から第八小節は、他の部分に比べてレガートに歌ふ。

6. 第十小節の始めにある「二點ニ音」にアクセントをつけて、之をはつきりと歌ふ。

伴奏法

1. 前奏を強くはつきりと奏することが肝要である。

2. 強拍の表現をはつきりと、右手の旋律を十分ひびかせるやうに、特に注意して奏することが大切である。

ウグヒス

愛らしく ♩ = 96

一ウメノコエダデウグヒスハ
ニユキノオヤマヲキノフデテ

ハルガキタヨトウタヒマス
サトヘキタヨトウタヒマス

ホウホウホケキョホウホケキョ
ホウホウホケキョホウホケキョ

二十ウグヒス
一ウメノ小枝デ、
ウグヒスハ、
春ガ来タヨト
ウタヒマス。
ホウホウホケキョ、
ホウホウホケキョ、
二雪ノオ山ヲ
キノフ出テ、
里ヘ来タヨト
ウタヒマス。
ホウホウホケキョ、
ホウホケキョ、

第一節
庭の梅の木に来て春を告げる鶯を歌
つたものである。

第二節
鶯が雪の山から人里へ来たことが歌
つてある。

二十 ウグヒス

指導要旨

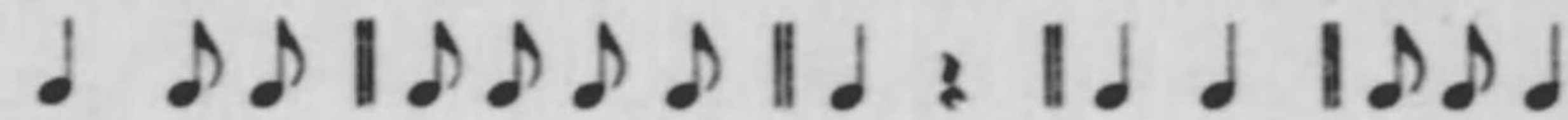
鶯の歌曲を歌はせて、自然の音楽へ傾聴する心を喚起し、快活純美の情を養ふ。

楽曲の解説

一点ニ音から二點ニ音迄の音域から成るへ調長音階の楽曲であるが、旋律にはその第四度變ロ音を用ひて居ない。

十二小節から成る一部分形式であるが、始めの四小節が發問の形であり、次の四小節が新しい發問を重ねたやうな形式で、最後の四小節が之に對する應答の形である。即ち八小節と四小節との連なりからなる構造である。

四分の二拍子。律動は、次の如き形式のものが組み合はされて居る。



指導要項

1. 鶯は、自然の歌手である。この鶯のやさしい鳴聲に関心を持たせ、音楽の美しさを感得させるやうに指導することも大切である。

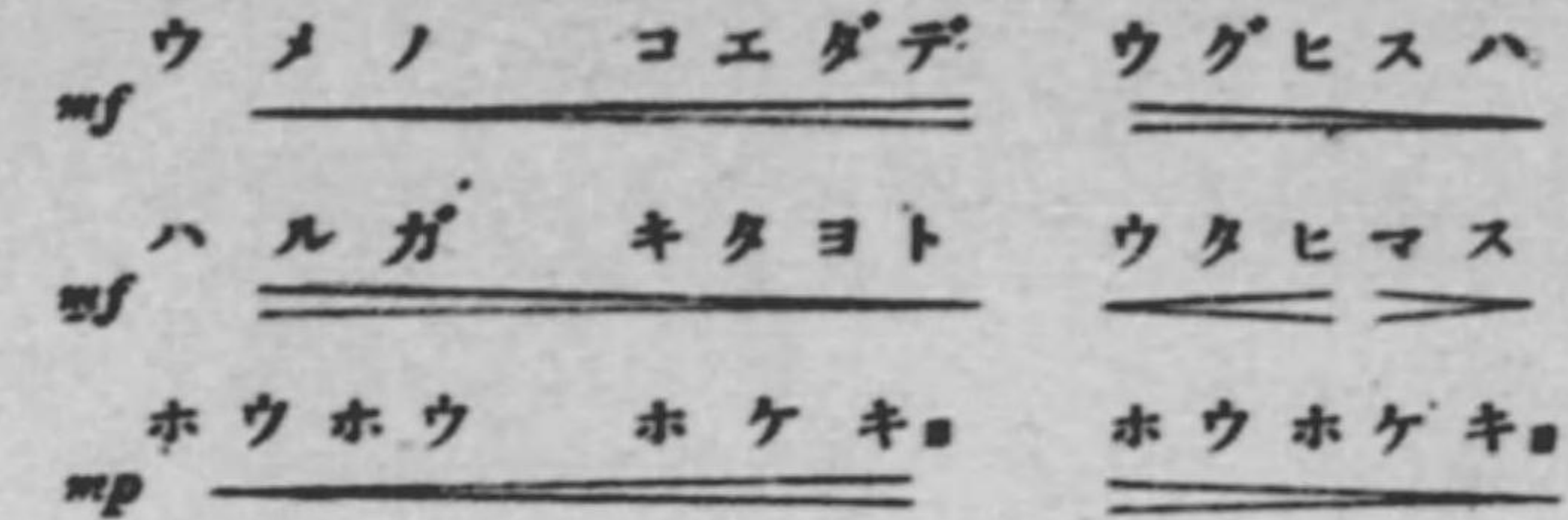
又、鶯は春を告げる自然の聲である。この自然の恩恵に對する注意を喚起することも大切なことであらう。

2. 旋律的に見ても、律動の上からいっても、極めて平易なものである。この教材によつて、四分音符、八分音符、四分休符の律動訓練を徹底するやうに指導することが肝要である。

3. この教材を取扱ふ時期になれば、五線譜の音名讀も相當徹底するであらうから、あまり竹を折らずにこの歌曲の音名視唱に誘導することが出来る。かくて、音高記憶と音名視唱法との基礎訓練に資すべきである。

4. 速度は、四分音符一分間に96であるから、極めて心持のよい中庸の速度である。あまり速くならないやうに、又遅くなつて曲想が鈍重にならないやうに注意しなければならない。

5. 旋律進行の上から、又、歌詞の言葉や内容の上から、歌つて居る間に自然に發想がつくと思ふ。この自然な發想を表現することが肝要であるが、その大體の形は、次の如くなる。



歌ひ方

1. 可愛らしい鶯の姿と、美しいその鳴聲とを胸に描いて、やさしく、美しく歌ふことが肝要である。

2. 「ホウホウホケキョ」の次で息をつぐことを忘れないで、「キョ」は、重苦しく延ばさないやうに軽く切つて歌ふことが大切である。尚、この「ホウホウホケキョ」の場合、「ホケキョ」の「ケ」に少しアクセントをつけて、鶯の鳴聲を實際に真似るやうに歌つた方がよい。

3. 歌詞第一節、「ウメ」の「ウ」は、兩唇を一旦閉ちて息を鼻腔に通し、次の「メ」で兩唇を開くやうに發音する。「ウグヒス」の「グ」は、鼻濁音である。

4. 「ホウホウホケキョ」は、「ホー、ホー、ホケキョ」と、一音づつ餘韻を残し、少し弱くしながら切る心持で歌ふ。

5. 歌詞第二節、「キノフ」は、「キノー」とレガートに發音する。

伴奏法

1. 前奏部右手の旋律は、歌唱部、第十小節の「ホケキョ」のところを真似て居るので、この部分を假に歌詞が附くとすれば、



となるであらう。この「ケ」の音に當るところにアクセントを與へて奏すると、鶯の鳴聲の實感が表現される。

2. 全體として柔かに、右手の旋律をよくひびかせて奏することが肝要である。

附 録

藝能科音楽に関する法令

およそ国民学校の教育に干渉する者は、国民学校令及び国民学校令施行規則に關する一切の法規に通曉して居なくてはならないが、特に藝能科音楽の指導を擔當するに當つては、次の法令を常に心に銘記して居なくてはならない。

1. 国民学校令

第一條 国民学校ハ皇國ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ國民ノ基礎的鍊成ヲ爲スヲ以テ目的トス

2. 国民学校令施行規則

第一條 国民学校ニ於テハ国民学校令第一條ノ旨趣ニ基キ左記事項ニ留意シテ兒童ヲ教育スベシ

一 教育ニ關スル勅語ノ旨趣ヲ奉體シテ教育ノ全般ニ互リ皇國ノ道ヲ修練セシメ特ニ國體ニ對スル信念ヲ深カラシムベシ

二 國民生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ體得セシメ情操ヲ醇化シ健全ナル心身ノ育成ニカムベシ

三 我ガ國文化ノ特質ヲ明ナラシムルト共ニ東亞及世界ノ大勢ニ付テ知ラシメ皇國ノ地位ト使命トノ自覺ニ導キ大國民タルノ資質ヲ啓培スルニカムベシ

四 心身ヲ一體トシテ教育シ教授、訓練、養護ノ分離ヲ避クベシ

五 各教科並ニ科目ハ其ノ特色ヲ發揮セシムルト共ニ相互ノ關聯ヲ緊密ナラシメ之ヲ國民鍊成ノ一途ニ歸セシムベシ

六 儀式、學校行事等ヲ重シク之ヲ教科ト併セ一體トシテ教育ノ實ヲ舉グルニカムベシ

七 家庭及社會トノ聯絡ヲ緊密ニシ兒童ノ教育ヲ全カラシムルニカムベシ

八 教育ヲ國民ノ生活ニ即シテ具體的實際的ナラシムベシ

高等科ニ於テハ尙將來ノ職業生活ニ對シ適切ナル指導ヲ行フベシ

九 兒童心身ノ發達ニ留意シ男女ノ特性、個性、環境等ヲ顧慮シテ

適切ナル教育ヲ施スベシ

十 兒童ノ興味ヲ喚起シ自修ノ習慣ヲ養フニカムベシ

藝能科ニ關スル法規

第十三條 藝能科ハ國民ニ須要ナル藝術技能ヲ修練セシメ情操ヲ醇化シ國民生活ノ充實ニ資セシムルヲ以テ要旨トス

技巧ニ流レズ精神ヲ訓練スルコトヲ重シク眞摯ナル態度ヲ養フベシ

我ガ國藝術技能ノ特質ヲ知ラシメ工夫創造ノ力ヲ養フニカムベシ

教材ハ成ルベク土地ノ情況ニ應ジ生活ノ實際ニ即シ且國民的情操ノ陶冶ニ資スルモノタルベシ

日常生活ニ於ケル應用ヲ指導シ個性ノ伸長ニ留意スルト共ニ適宜共同作業ヲ課スベシ

機ヲ重シク姿勢ニ留意シ用具、材料ニ付テ適切ナル指導ヲ爲スベシ

藝能科音楽ニ關スル法規

第十四條 藝能科音楽ハ歌曲ヲ正シク歌唱シ音楽ヲ鑑賞スルノ能力ヲ養ヒ國民的情操ヲ醇化スルモノトス

初等科ニ於テハ平易ナル單音唱歌ヲ課シ適宜輪唱歌及重音唱歌ヲ加ヘ且音楽ヲ鑑賞セシムベシ又器樂ノ指導ヲ爲スコトヲ得

歌唱ニ即シテ適宜樂典ノ初歩ヲ授クベシ

高等科ニ於テハ其ノ程度ヲ進メテ之ヲ課スベシ

歌詞及樂譜ハ國民的ニシテ兒童ノ心情ヲ快活純美ナラシメ徳性ノ涵養ニ資スルモノタルベシ

兒童ノ音樂的資質ヲ啓發シテ高雅ナル趣味ヲ涵養シ國民音樂創造ノ素地タラシムベシ

發音及聽音ノ練習ヲ重シク自然ノ發聲ニ依ル正シキ發音ヲ爲ラシメ且音ノ高低、強弱、音色、律動、和音等ニ對シ鋭敏ナル聽覺ノ育成ニカムベシ

祭日祝日等ニ於ケル唱歌ニ付テハ周到ナル指導ヲ爲シ敬虔ノ念ヲ養ヒ愛國ノ精神ヲ昂揚スルニカムベシ

學校行事及團體的行動トノ關聯ニ留意スベシ

音 樂 用 語

1. 音

- 楽音 (がくおん) 規則的に振動する音。
- 噪音 (さうおん) 不規則的に振動する音。
- 音高 (おんかう) 音の高低。
- 音長 (おんちやう) 音の長短。
- 音力 (おんりよく) 音の強弱。
- 音色 (おんしよく) ねいろ。
- 高音 (かうおん) 高い音。
- 低音 (ていおん) 低い音。
- 長音 (ちやうおん) 長い音。
- 短音 (たんおん) 短い音。
- 強音 (きやうおん) 強い音。
- 弱音 (じやくおん) 弱い音。

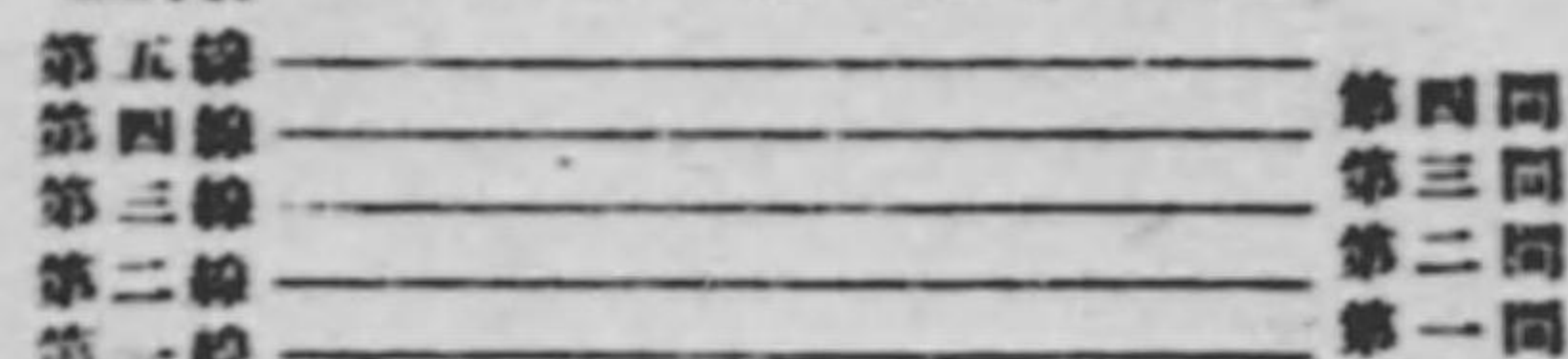
2. 音 名

- 音名 (おんめい) 楽音の名稱。
- ハ、ニ、ホ、ヘ、ト、イ、ロ。
- 八度 (はちど) オクターブのこと。
- 幹音 (かんおん) 有鍵楽器の白鍵音。
- 派生音 (はせいおん) 幹音に嬰變などがついて變化した諸音で、主に有鍵楽器の黒鍵音である。

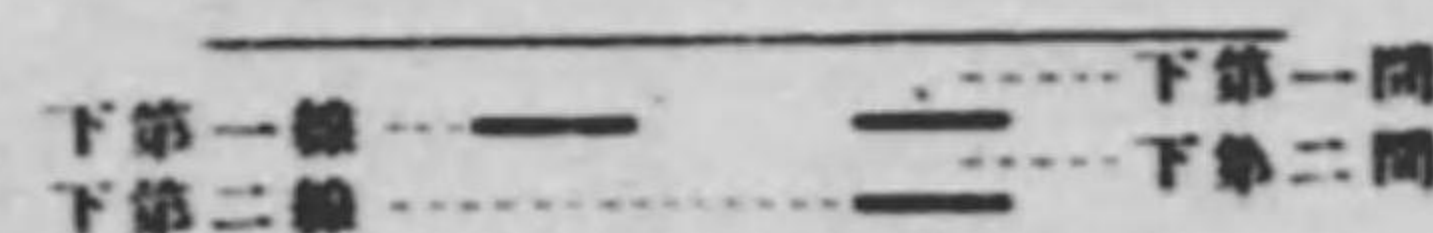
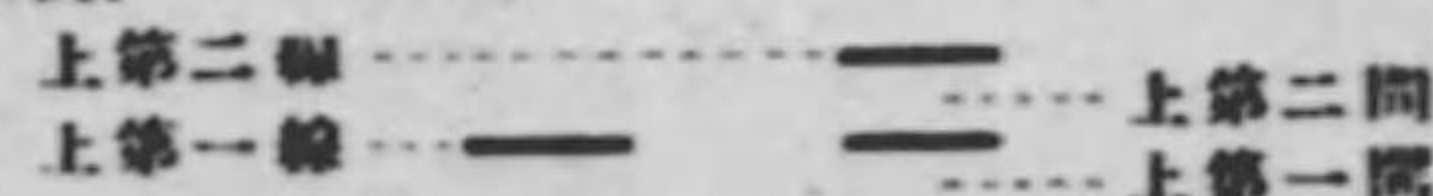
3. 譜表と音部記號

楽譜 (がくふ) 五線譜又は略して譜といふ。

五線 (ごせん) 譜表ともいふ。



加線 (かせん)



音部記號 (おんぶきがう) 基準音高を表示する記號。

ト音記號 (とんきがう) 一點ト音を表示する音部記號。

ヘ音記號 (へんきがう) 小字ヘ音を表示する音部記號。

4. 音符と休符

音符 (おんぶ) 音の長短を示す記號。

單純音符 (たんじゆんおんぶ) 全音符、二分音符、四分音符、八分音符、十六分音符、等。

附點音符 (ふてんおんぶ) 附點全音符、附點二分音符、附點四分音符、附點八分音符、等。

休符 (きうふ) 音の黙止の長短を示す記號。全体符、二分休符、四分休符、八分休符、等。

附點休符 (ふてんきうふ)、附點全体符、附點二分休符、附點四分休符、等。

三連符 (さんれんぶ) 二等分すべき音を三等分したもの。

5. 拍 子

縦線 (じゆうせん) 五線を縦に區切る線。

單縦線 (たんじゆうせん) 五線を縦に區切る一本の線。

複縦線 (ふくじゆうせん) 楽曲の終結又は段落に用ひる二本の縦線。

強拍 (きやうはく) 拍子の中の強い拍。

弱拍 (じやくはく) 拍子の中の弱い拍。

強起 (きやうき) 強拍から起ること。

弱起 (じやくき) 弱拍から起ること。

小節 (せうせつ) 縦線を以て等分した一區劃。

拍子記號 (ひやうしきがう) 楽曲の拍子を示す記號。

拍子 (ひやうし) 楽曲の強拍と弱拍との周期的反復。

二拍子 (にびやうし) 各小節が強弱の二拍からなる拍子。2 又は $\frac{2}{4}$ の如く記す。

四拍子 (しびやうし) 各小節が強、弱、中強、弱の四拍からなる拍子。4 又は $\frac{4}{4}$ の如く記す。

三拍子 (さんびやうし) 各小節が強、弱、弱の三拍からなる拍子。3 又は $\frac{3}{4}$ の如く記す。

六拍子 (ろくびやうし) 各小節が強、弱、弱、中強、弱、弱の六拍からなる拍子。6 又は $\frac{6}{8}$ の如く記す。

拍法 (はくはふ) 拍子を正しくとる方法。

呼節法 (こせつはふ) 各拍に當る音符を一、二の如く呼唱する拍法。

拍節法 (はくせつはふ) 音をたてずに手又は指揮棒に依つて拍子をとる拍法。

切分音 (せつぶんおん) 同高の弱拍と強拍の音が結合され、その結果、強勢が弱拍に移つたもの。

6. 派 生 音

嬰音 (えいおん) 幹音に嬰のついた音。

變音 (へんおん) 幹音に變のついた音。

嬰記號 (えいきがう) 嬰音を示す記號(♯)

變記號 (へんきがう) 變音を示す記號(♭)

本位記號 (ほんゐきがう) 變化した音を原位置に復歸する記號。(♮)

臨時記號 (りんじきがう) 變記號、嬰記號

及び本位記號を以て、音を臨時に變化する時には、之を臨時記號といふ。

調號 (てうがう) 調を示す爲に譜表の頭初に記す場合の嬰記號、變記號を調號といふ。

7. 音 程

音程 (おんてい) 二音間の高さの距離をいふ。完全音程、長音程、短音程、増音程、減音程、等。

半音 (はんおん) 鍵盤楽器に於て、隣接する二音間の高さの距離の小なるもの。

全音 (せんおん) 鍵盤楽器に於て、隣接する二音間の高さの距離の大なるもの。

音程の名稱 (おんていのめいしよう) 完全一度、長二度、短二度、長三度、短三度、完全四度、増四度、完全五度、減五度、長六度、短六度、長七度、短七度、完全八度、等。

音程の轉回 (おんていのてんくわい) 二音の中、下位の音を八度高く、又は上位の音を八度低く移すことをいふ。

轉回音程 (てんくわいおんてい) 轉回して出來た音程。一度が八度、二度が七度、三度が六度、四度が五度、五度が四度、六度が三度、七度が二度、八度が一度、等。

協和 (けふわ) 二音又は數音を同時に奏して調和すること。

不協和 (ふけふわ) 二音又は數音を同時に奏して調和せぬこと。

協和音程 (けふわおんてい) 二音がよく調和する音程。完全一度、完全四度、完全五度、完全八度、長三度、短三度、

長六度、短六度、等。

不協和音程(ふけふわおんてい) 二音が調和しない音程。長二度、短二度、長七度、短七度、等。

協和音(けふわおん) 協和する音。

不協和音(ふけふわおん) 不協和の音。

8. 音階

音階(おんかい) 樂音の階段的系列。

階名(かいめい) 音階を歌唱する場合の呼唱。ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ。

長音階(ちやうおんかい) 第三音と第四音及び第七音と第八音との間が半音、その他は全音で構成された音階。



嬰種長音階(えいしゆちやうおんかい) ハ音より順次に上方完全五度の音を主音として構成する音階であつて、第七音に嬰音を要するから、之を嬰種長音階といふ。ト調長音階、ニ調長音階、イ調長音階、ホ調長音階、等。

變種長音階(へんしゆちやうおんかい) ハ音より順次に下方完全五度の音を主音として構成する音階であつて、第四音に變音を要するから、之を變種長音階といふ。ヘ調長音階、變ロ調長音階、變ホ調長音階、變イ調長音階、等。

短音階(たんおんかい) 自然的短音階、旋律的短音階、和聲的短音階。

自然的短音階(しせんてきたんおんかい) 第二音と第三音及び第五音と第六音の間が半音、その他は全音からなる音階。



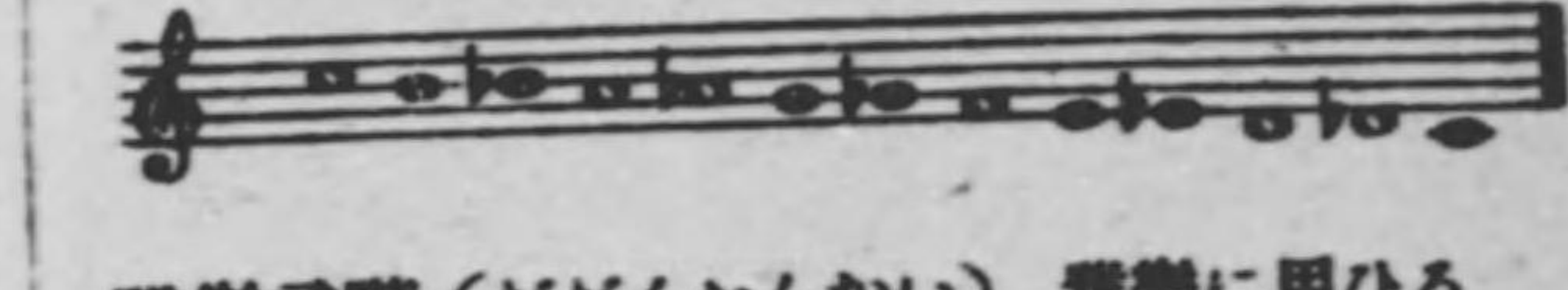
和聲的短音階(わせいてきたんおんかい) 第二音と第三音、第五音と第六音、及び第七音と第八音とが半音、第六音と第七音とが一全音半、その他は全音からなる音階。



旋律的短音階(せんりつてきたんおんかい) 第二音と第三音及び第七音と第八音との間が半音、その他は全音で上行し、第六音と第五音、第三音と第二音の間が半音、その他が全音で下行する音階。



半音階(はんおんかい) 各音の間が全部半音からなる音階。



雅樂音階(かがくおんかい) 雅樂に用ひる音階であつて、呂音階と律音階とがある。(總論十五頁参照)

俗樂旋法(ぞくがくせんぽふ) 邦樂に用ひる音階であつて、陽音階と陰音階とがある。(總論十六頁参照)

長調(ちやうてう) 長音階による樂曲。

短調(たんてう) 短音階による樂曲。

移調(いてう) 或調の樂曲をその儘他の調

に移すこと。

轉調(てんてう) 或調の樂曲が中途に於て他の調に轉すること。

並行調(へいかうてう) 同一の調號を有する長調と短調の相互關係。

同主調(どうしゆてう) 長調と短調とが互に主音を同じくするもの。

關係調(かんけいてう) ハ長調に對するト長調、ヘ長調の如く、及び並行調、同主調の如く、共通音を多數に有する關係深き調。

9. 發想標語及び記號

速度標語(そくどへうご) 樂曲全體又は一部の速度を指定する語。

(1) 緩徐なる速度

(イ) きはめておそく

(ロ) おそく

(ハ) ややおそく

(2) 中庸なる速度

(イ) あるく速さ

(ロ) 中等の速さ

(3) 急速なる速度

(イ) ややはやく

(ロ) はやく

(ハ) きはめてはやく

附加語(ふかご) 速度標語に附加して速度を限定する語。甚だ、きはめて、ややだんだん、等。

速度の變更(そくどのへんかう)

だんだんはやく

もつとはやく

一そうおそく

だんだんおそく [rit.]

はやさを自由に

もとのはやさで [a tempo]

一番はじめのはやさで [Tempo I.]

強弱記號(きやうじやくきがう) 樂曲の強弱を指定する記號。

pp (最も弱く)

p (弱く)

mp (やや弱く)

mf (やや強く)

f (強く)

ff (最も強く)

< (だんだん強く)

> (だんだん弱く)

dim. (だんだん弱く)

曲想標語(きよくさうへうご) 曲想を示す語。

悲しく、優しく、愛らしく、心をこめて、元氣よく、靜かに、愉快に、神々しく、生々々、雅やかに、素朴に、無邪氣に、輕快に、莊嚴に、壯大に、勇ましく、活潑に、行進曲風に、樂しく重々しく、敬虔に、力強く。

10. 雜記號

斷奏記號(だんそうきがう) 音符の上又は下に附記する點であつて、音符を鋭く打ち切つて奏する。

連結線(れんけつせん) 異高度の數音に附記し、滑かに奏する。(スラー)

結合線(けつがふせん) 同高度の二音に附記し、二音を結合して奏する。(タイ)

保音記號(ほおんきがう) 一又は ten. で現はし、その音符の長さを十分に保つ。

強勢記號(きやうせいきがう) ^ 又は <

の記號を音符に付け、その音を特に強く奏する。(アクセント)

氣息記號(きそくきがう) Vの記號を旋律の某所に記し、氣息の場所を示す。

延長記號(えんちやうきがう) 〰の記號を音符又は休符に付け、その時價を特に延長する。

終止記號(しゆうしきがう) 樂曲の中途に於て ⊥ の記號のある時は終止する。

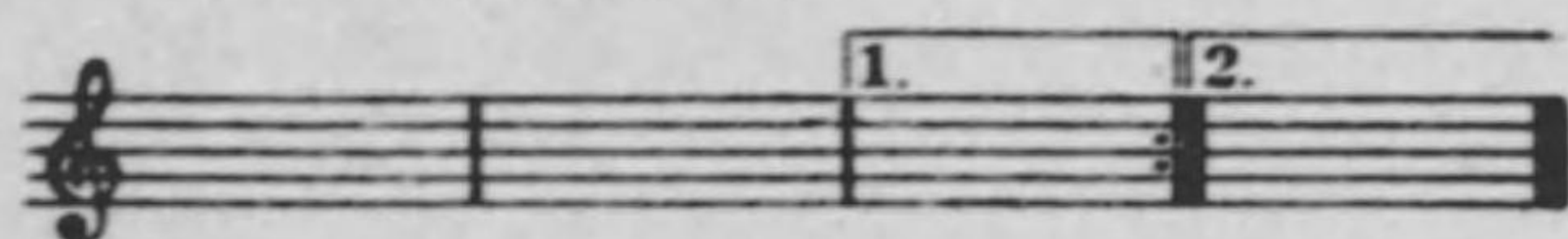
11. 省略記號

省略記號(しやうりやくきがう) 記譜を簡略にする爲に用ひる記號。

反復記號(はんぶくきがう) 樂曲の一部を反復する場合に用ひる。



樂曲の終りの部分が異なる時は、次の記號を用ひる。



反始記號(はんしきがう) D. C. の略字から曲の首部に歸る。



接續記號(せつぞくきがう) D. S. の略字から 〰 の記號に接續する。



終止記號(しゆうしきがう) Fine は、終止を示す標語。

12. 裝飾音

前打音(せんだおん) 〰 この小音符を短

前打音といふ。主音符より極めて短い音長を割く。

後打音(こうだおん) 〰 この小音符を後打音といふ。主音符より極めて短い音長を割く。

13. 和音

和音(わおん) 音高の異なる二音以上のものを同時に奏する意。

三和音(さんわおん) 或音を基音として、三度の音と五度の音とを結合した和音。

根音(こんおん) 三和音の基音。

三音(さんおん) 根音上三度の音。

五音(ごおん) 根音上五度の音。

主和音(しゆわおん) 音階の第一度上即ち主音上の三和音。

屬和音(ぞくわおん) 音階の五度上即ち屬音上の三和音。

下屬和音(かぞくわおん) 音階の四度上即ち下屬音上の三和音。

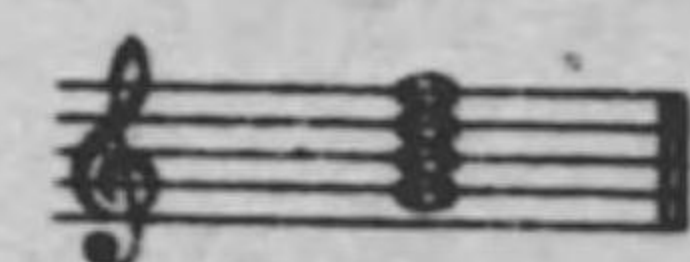
主要三和音(しゆえうさんわおん) 主和音、屬和音、下屬和音の總稱。



七音(しちおん) 或音を根音として、七度の音をいふ。

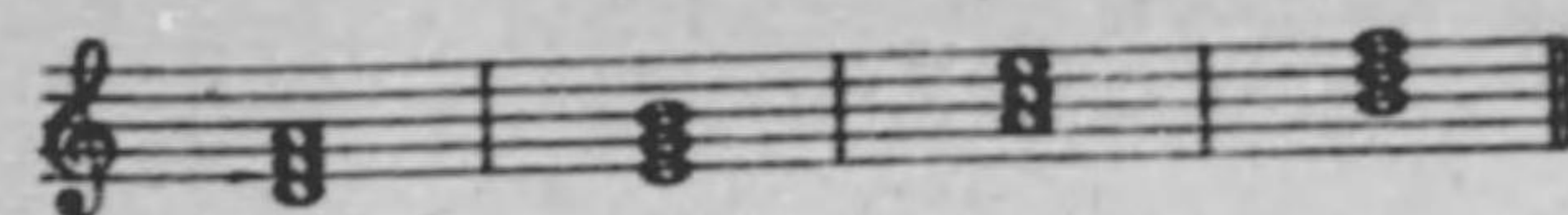
四和音(しわおん) 七の和音ともいひ、三和音の上に、更に根音から數へて七度の音を重ねた和音。

屬七の和音(ぞくしちのわおん) 音階の第五度即ち屬音上の四和音。



副次三和音(ふくじさんわおん) 主要三和

音以外の三和音の總稱。



三和音の種類(さんわおんのしゆるか) 長三和音、短三和音、増三和音、減三和音。

四聲音(しせいおん) 高音、中音、次中音、低音。

基本位置(きほんち) 和音の根音が最低位置となつた配置。

轉回和音(てんくわいおん) 和音の根音以外の音が最低音となつた配置。

六の和音(ろくのわおん) 三和音の根音を八度轉回して、第三音が最低部にある和音。

四六の和音(しろくのわおん) 三和音の根

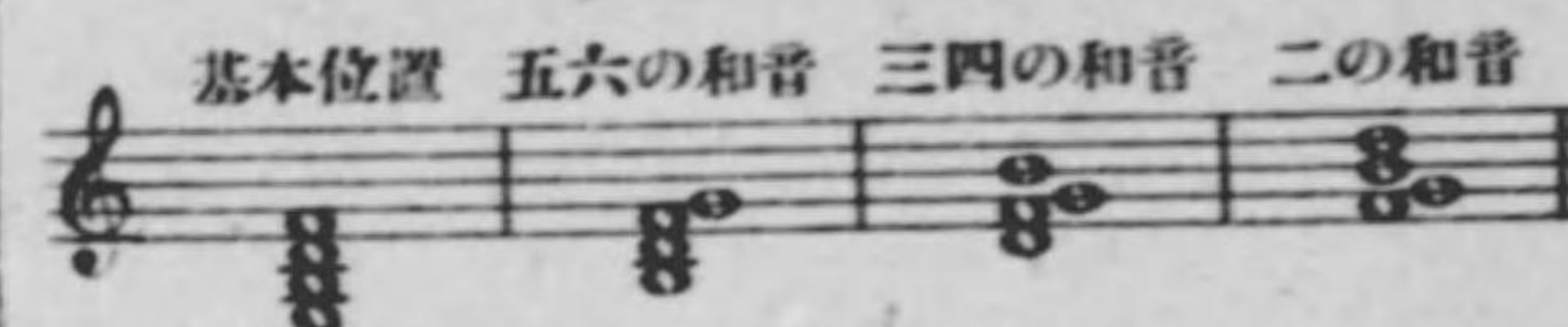
音及び第三音を八度轉回して、第五音が最低部にある和音。



五六の和音(ごろくのわおん) 七の和音の根音を八度轉回して、第三音が最低部にある和音。

三四の和音(さんしのわおん) 七の和音の根音及び第三音を八度轉回して、第五音が最低部にある和音。

二の和音(にのわおん) 七の和音の根音、第三音、及び第五音を八度轉回して、第七音が最低部にある和音。



低學年兒童用樂語

樂語は、低學年に於て適宜次のやうな名稱で取扱ひ、高學年に進み、樂典的に整理する時期に、正しい樂語を授ける。

五線の呼び方 線は、ホの線、トの線、ロの線、ニの線。間は、ニの間、ヘの間、イの間、ハの間、と呼ぶ。

高音部記號 ト音記號。

縦線 たての線。(複縦線 二本のたての線)

反復記號 くりかへしのしるし。

拍子記號 二拍子のしるし、三拍子のしるし、四拍子のしるし。

氣息記號 息つき。

音符の呼び方 〰 = ひとつち、〰 = ふたう

ち、〰 = 半うち、

〰 = ひとつち半、〰 = みうち。

休符の呼び方 〰 = ひとつち休み、〰 = 半うち休み。

音符各部の名稱

符頭... 〰 = 黒まる。〰 = 白まる。

符尾... 〰 棒。鈎... はた。附點... 〰 符の點。連符... つながつたはた。



小節 區切り

(特に必要のある場合には、和音、伴奏、前奏、マイ、スラー、等は、そのまま名稱を用ひ、その他は、適宜兒童にわかり易い言葉で現はす。)

初等科各學年教材一覽表

第一學年	○二十 ウグヒス ○十九 ヒカウキ ○十八 兵タイゴフコ ○十七 カラス ○十六 デンシヤゴフコ ○十五 オ正月 ○十四 オ人ギヤウ ○十三 コモリウタ ○十二 ハトボツボ ○十一 タネマキ ○十 モモタラウ ○九 オ月サマ ○八 オウマ ○七 ウミ ○六 ホタルコイ ○五 カクレンボ ○四 エンソク ○三 ユフヤケコヤケ ○二 ヒノマル ○一 ガクカウ × キミガヨ
第二學年	○二十 羽衣 ○十九 日本 ○十八 ひな祭 ○十七 兵たいさん ○十六 羽根つき ○十五 おもちやの戦車 ○十四 たきぎひろひ ○十三 かけっこ ○十二 菊の花 ○十一 富士の山 ○十 朝の歌 ○九 長い道 ○八 うさぎ ○七 たなばたさま ○六 花火 ○五 雨ふり ○四 軍かん ○三 國引き ○二 さくらさくら ○一 春が来た × きげん節 × 君が代
第三學年	
第四學年	
第五學年	
第六學年	

(註) ○印は必修教材 ×印は歌圖のみ掲載

指導豫定・進度表

學期	第一學期				第二學期				第三學期		
	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3
月											
週											
歌											
唱											
指											
導											
度											
視											
唱											
指											
導											
度											
聽											
覺											
調											
練											
度											
備											
考											

君が代行進曲	吉本光藏作曲
森の鍛冶屋	ミハエリス作曲
森の水車	アイレンベルク作曲
小鳥屋の店	レーク作曲
子守歌	日本古謡
国際急行列車	ブーエ作曲
時計屋の店	オルト作曲
郭公ワルツ	シヨナソン作曲
おもちやの兵隊さん	ゼツセル作曲

鑑賞用音盤一覽

初等科一學年用

昭和十六年十月十一日 文部省検査済



昭和十六年十月五日修正印刷
 昭和十六年十月十日修正發行
 昭和十六年十月十日翻刻印刷
 昭和十七年十一月二十五日翻刻發行

ウタノホン上教師用

◎ 定價金六拾錢

著作権所有 著作權 文 部 省
 發行者

東京市小石川區久堅町百八番地 22
 翻刻發行 日本書籍株式會社
 兼印刷者

代表者 大橋光吉

東京市小石川區久堅町百八番地
 印刷所 共同印刷株式會社

發行所 日本書籍株式會社

特230
413